

平安京左京三条四坊十町跡・ 烏丸御池遺跡発掘調査報告書

2 0 2 0

株式会社 文化財サービス

例 言

1. 本書は、京都市中京区富小路通御池上ル守山町 165-1 で実施した、平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡の発掘調査報告書である。(京都市番号 19H107)
2. 調査は、サムティ株式会社(代表取締役社長 小川靖展)のホテル建設に伴い実施した。
3. 現地調査は、サムティ株式会社より株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され実施した。調査は、大西晃靖、菅田 薫(文化財サービス)が担当した。
4. 調査期間は、令和元年9月2日～12月17日である。
5. 調査面積は、299.2 m²である。
6. 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は、T.P.(東京湾平均海面高度)である。
7. 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
8. 本書の執筆は、大西が行った。編集は、大西、吉川絵里(文化財サービス)が行った。
9. 遺跡の写真撮影は大西・菅田が行った。出土遺物の撮影は写房楠華堂(内田真紀子氏)に依頼した。
10. 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
11. 発掘調査及び整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕大西健吾、小林一浩、辰巳陽一、田中慎一、広瀬八郎、望月麻佑、吉岡創平
(以上、文化財サービス)、作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕赤羽 香、上野恵己、植村明男、内牧明彦、神野いくみ、甲田春奈、
塩地宏行、多賀摩耶、田邊貴教、中野キヌヨ、西尾知子、野地ますみ、場勝由紀菜、
溝川珠樹、宮下亜季、森下直子、本間愛子、若山美帆(以上、文化財サービス)

本田裕美
12. 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年に依った。
13. 現地調査・整理作業において、下記の方々にご教示をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略)

國下多美樹(龍谷大学)、浜中邦弘(同志社大学)、鈴木久男(京都産業大学)

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 整理作業・報告書作成	2

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	5

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	10
2 検出遺構	11
(1) 第1面	11
a 4層上面	11
b 5層上面	15
(2) 第2面	20
(3) 第3面	27
3 出土遺物	31
(1) 土器・陶磁器類	31
a 平安時代	31
b 鎌倉時代～室町時代	35
c 安土桃山時代～江戸時代	40
(2) 瓦	47
(3) 金属製品	49
(4) 土製品	49
(5) 石製品	49

第Ⅳ章 まとめ

1 遺構の変遷	50
2 出土遺物	58
3 左京三条四坊十町東部の宅地利用と富小路について	59

図版目次

図版 1	調査区南壁土層断面図（1：80）
図版 2	調査区東壁土層断面図（1：80）
図版 3	調査区北壁土層断面図（1：80）
図版 4	調査区西壁土層断面図（1：80）
図版 5	第1面－1平面図（4層上面 1：100）
図版 6	第1面－2平面図（5層上面 1：100）
図版 7	第2面平面図（6層上面 1：100）
図版 8	第3面平面図（7層上面 1：100）
図版 9	遺構 1. 東区第1面－1全景（4層上面 南から） 2. 東区第1面－2全景（5層上面 南東から）
図版 10	遺構 1. 西区第1面全景（南から） 2. 井戸1（東から） 3. 井戸6（南から）
図版 11	遺構 1. 井戸15（北から） 2. 井戸23（南から） 3. 井戸25（南東から）
図版 12	遺構 1. 井戸5・46（南から） 2. 井戸34上位遺物出土状況（西から） 3. 井戸34（東から）
図版 13	遺構 1. 井戸351（南から） 2. 井戸351石組細部の状況（南東から） 3. 井戸330（南東から）
図版 14	遺構 1. 井戸105（北から） 2. 井戸129（南から） 3. 井戸125（西から）
図版 15	遺構 1. 石組104（北から） 2. 石組141（北から） 3. 石組320（南から）
図版 16	遺構 1. 石組135（南から） 2. 石組135南北断面（西から） 3. 石組135完掘状況（南から）
図版 17	遺構 1. 土坑32（西から） 2. 土坑47（東から） 3. 土坑101・102・103・121（南から）

図版18	遺構	1. 東区東部集石検出状況（南から） 2. 東区東部 南北セクション断面（西から） 3. 土坑162・溝178断面（北から）
図版19	遺構	1. 集石324（北から） 2. 集石325（北から） 3. 集石382（南から）
図版20	遺構	1. 東区第2面全景（南から） 2. 西区第2面全景（南から）
図版21	遺構	1. 溝430遺物出土状況（南から） 2. 井戸551（東から）
図版22	遺構	1. 井戸398（北から） 2. 井戸180（西から）
図版23	遺構	1. 石組364（南から） 2. 集石124（南から）
図版24	遺構	1. 土坑360（西から） 2. 土坑370・379・380（西から） 3. 土坑378（北から）
図版25	遺構	1. 土坑154遺物出土状況（西から） 2. 土坑127・128・158・175・184・189・190（北から） 3. 土坑375・386・390・383・391（北から）
図版26	遺構	1. 土坑167（西から） 2. 土坑355・361・362・399・407（南東から） 3. 土坑420（北から）
図版27	遺構	1. 東区第3面全景（南から） 2. 西区第3面全景（南から）
図版28	遺構	1. 東区南西部7層上面遺構掘削後（南から） 2. 溝178完掘状況（北から） 3. 溝178セクション断面（北から）
図版29	遺構	1. 土坑520遺物出土状況（東から） 2. 土坑520断面（東から） 3. 土坑520完掘状況（東から）
図版30	遺構	1. 柱穴554土師器皿出土状況（南から） 2. 土坑542・547（南から） 3. 西区 壁面周囲下層確認状況（南から）
図版31	遺物	1. 出土遺物1（平安時代前～中期） 2. 出土遺物2（平安時代後期）
図版32	遺物	1. 出土遺物3（土坑520出土土師器） 2. 出土遺物4（鎌倉時代前半）

図版33	遺物	1. 出土遺物5（鎌倉時代土師器） 2. 出土遺物6（輸入磁器） 3. 出土遺物7（須恵器・焼締陶器）
図版34	遺物	1. 出土遺物8（室町時代前半） 2. 出土遺物9（室町時代後半）
図版35	遺物	1. 出土遺物10（土師器） 2. 出土遺物11（染付） 3. 出土遺物12（焼締陶器） 4. 出土遺物13（施釉陶器）
図版36	遺物	1. 出土遺物14（唐津） 2. 出土遺物15（瀬戸美濃・京焼）
図版37	遺物	1. 出土遺物16（瓦質土器） 2. 出土遺物17（井戸25）
図版38	遺物	1. 出土遺物18（江戸時代後半） 2. 出土遺物19（井戸1）
図版39	遺物	1. 出土遺物20（軒瓦） 2. 出土遺物21（埴塙） 3. 出土遺物22（石製品）

挿図目次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査経過写真	3
図3	調査地地区割・基準点配置図（1：200）	4
図4	既往調査位置図（1：2,500）	6
図5	井戸6・25・34平面・断面・立面図（1：40、遺物出土状況図1：30）	12
図6	井戸15・23平面・立面図（1：40）	13
図7	井戸351平面・立面図（1：40）	15
図8	井戸105・129、石組141・104・320平面・立面図（1：40）	17
図9	石組135平面・断面図（1：40）	19
図10	東区東部集石平面・断面図（1：50）	21
図11	溝430平面・断面図（平面1：20、断面1：40）	22
図12	井戸180・398、石組364、集石124平面・断面・立面図（1：40）	23
図13	第2面検出土坑断面図（1：50）	25
図14	土坑154・171・167平面・断面図（土坑154・171 1：20、土坑167 1：40）	26
図15	溝178平面・断面図（1：50）	28

図16	土坑520、柱穴554平面・断面図（1：20）	30
図17	出土遺物1（平安時代 1：4）	32
図18	出土遺物2（平安時代～鎌倉時代 1：4）	34
図19	出土遺物3（鎌倉時代～室町時代 1：4）	37
図20	出土遺物4（安土桃山時代～江戸時代前半 1：4）	41
図21	出土遺物5（江戸時代 1：4）	43
図22	出土遺物6（幕末 1：4）	46
図23	出土遺物7（軒瓦、土製品、石製品 1：4）	48
図24	遺構変遷図1（平安時代 1：100）	52
図25	遺構変遷図2（鎌倉時代前半 1：100）	53
図26	遺構変遷図3（鎌倉時代後半～南北朝時代初頭 1：100）	54
図27	遺構変遷図4（室町時代 1：100）	55
図28	遺構変遷図5（安土桃山時代～江戸時代前半 1：100）	56
図29	遺構変遷図6（江戸時代後半～幕末 1：100）	57

表目次

表1	既往調査一覧	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	31
表4	遺物観察表	60

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

京都市中京区富小路通御池上ル守山町に、サムティ株式会社によるホテル建設が予定された。建設予定地は、平安京左京三条四坊十町及び烏丸御池遺跡にあたる。

建設工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施された。試掘調査は、建設予定地の3箇所に調査区を設定して実施された。試掘調査の結果、平安時代～江戸時代までの複数の遺構面が確認されたことから、299.2 m²の調査区を設定し発掘調査が実施されることとなった。発掘調査は、サムティ株式会社から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 調査の経過

今回の調査区は敷地内のやや北寄りに東西 22 m、南北 13.6 m で設定され、調査面積は 299.2 m² である。調査は発生する残土の置場を確保するため調査区を東西に二分割して行うこととした。調査区はそれぞれ東区・西区と設定した。調査開始時に重機で掘削した近現代層については、10 t ダンプ 54 台分を場外搬出し、調査終了後の埋め戻し時に再搬入し埋め戻しを行うこととした。

発掘調査は、近隣の方に調査の周知を行った後、9月2日より周辺的环境整備及び資材等の搬入を行った。調査区の設定は9月4日に行い、9月5日から重機掘削を開始した。調査は東区より行い、重機で4層上面まで掘削し江戸時代後半の遺構面から調査を開始した。東区の調査は、

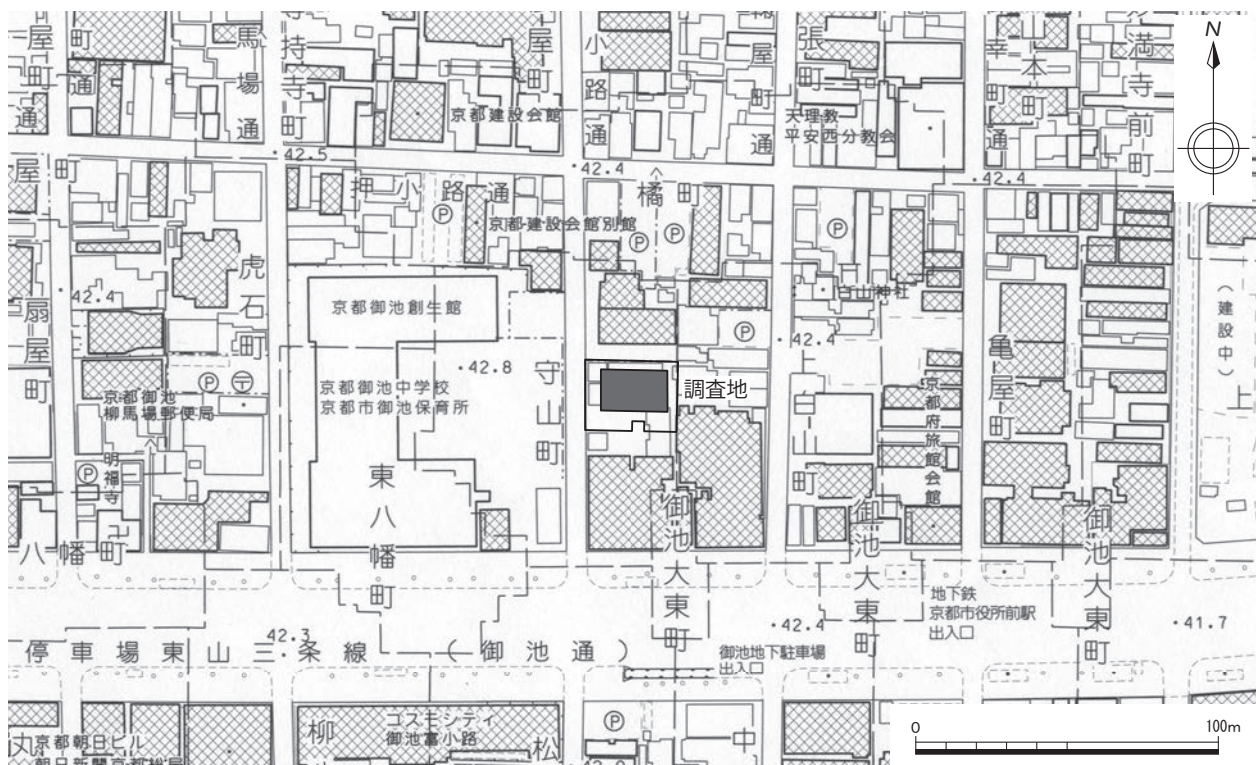


図1 調査位置図（1：2,500）

4層上面（江戸時代後半～幕末）、5層上面（安土桃山～江戸時代前半）、6層上面（鎌倉時代～室町時代）、7層上面（平安時代）で行い、各面で写真撮影及び図面作成等を行った。下層確認の後、壁断面の記録作業を行い、11月5日に東区の調査を終了した。

11月6日より重機による反転作業を実施し、西区の調査を開始した。西区は東区での調査を踏まえ5層上面より調査を開始し、5層上面、6層上面、7層上面で調査を行った。7層上面での調査終了後に下層確認を行い、壁断面の記録作業を行った。

すべての記録作業終了後、12月9日より調査区の埋め戻しと資材等の搬出を開始した。全ての作業を終了した後、12月17日に事業者へ引き渡しを行い、発掘調査を終了した。

現地調査においては、各面の遺構検出時及び遺構完掘時に文化財保護課の臨検を受け、本調査の外部検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学准教授浜中邦弘氏に現地で検証いただき、調査に対する適切な助言をいただいた。

測量基準点の設置と地区割

測量基準点は、周辺の既地点からトータルステーションにより調査地内に3箇所の基準点を設定した。基準点測量の成果は、以下のとおりである。

K. 1 X = -109,646.167 m Y = -21,442.712 m H = 42.435 m

K. 2 X = -109,635.292 m Y = -21,413.833 m H = 42.797 m

K. 3 X = -109,649.858 m Y = -21,412.716 m H = 42.727 m

検出した遺構の管理や遺物取上の単位とするため、調査区に世界測地系に基づき3m四方のグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、数字とアルファベットの組み合わせで地区名を設定した。地区名は、3mグリッドの北西交点で設定した。

3 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は、現地調査で記録した写真・図面の整理と出土遺物の整理を並行して行った。遺物の整理は、洗浄、接合、実測、トレース、写真撮影を行った後、報告書の執筆及び編集作業を行い、報告書を作成した。執筆は調査を担当した大西晃靖、編集作業は吉川絵里が担当し、その他整理業務は当社社員が分担して行った。遺物写真の撮影は、写房楠華堂に依頼した。



1. 調査前（北西から）



2. 重機掘削作業（東から）



3. 東区調査経過（南西から）



4. 土坑154調査経過（北西から）



5. 調査区反転作業（西から）



6. 西区調査経過（北西から）



7. 埋め戻し作業（南東から）



8. 調査完了後（南西から）

図2 調査経過写真

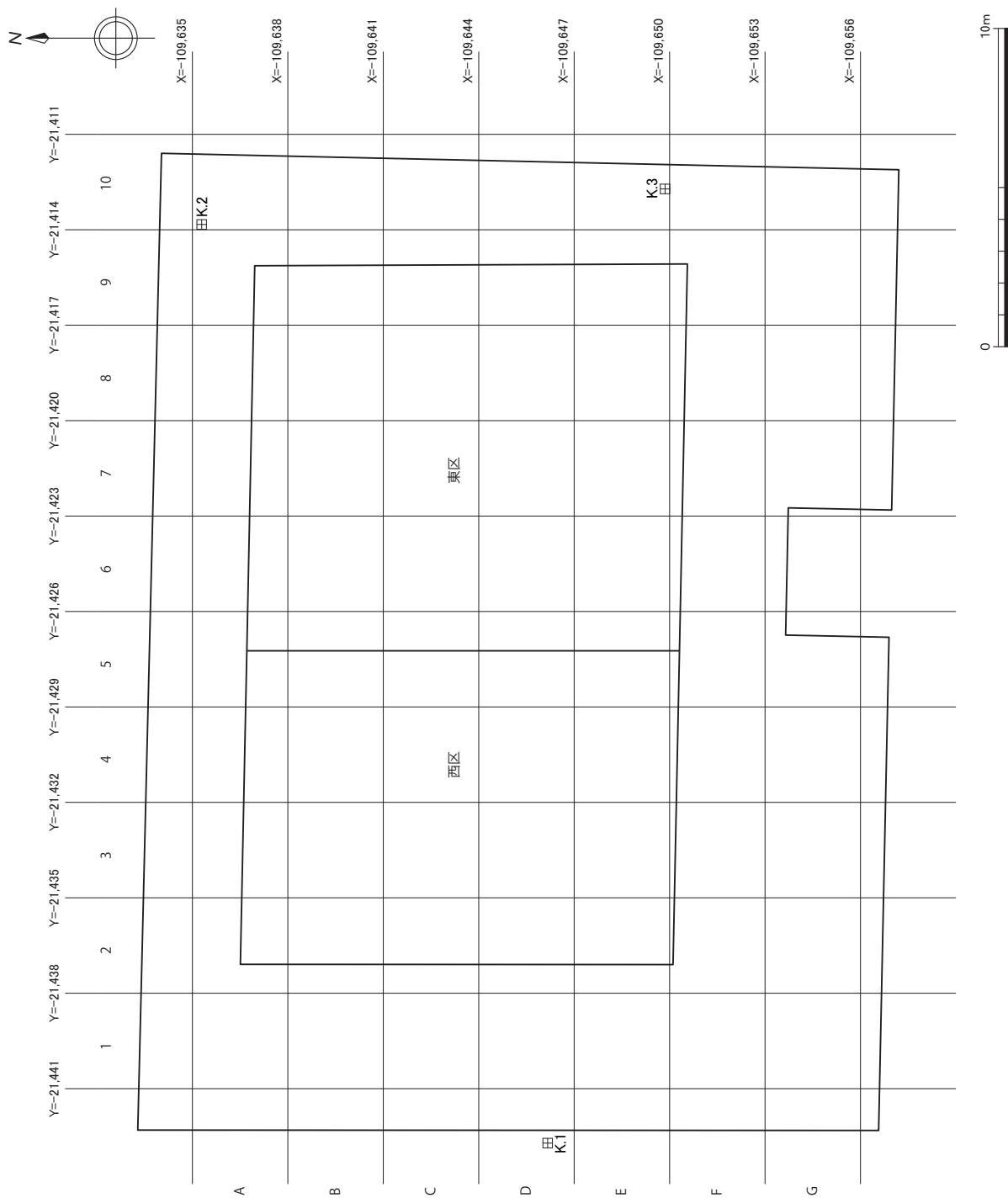


図3 調査地地区割・基準点配置図 (1 : 200)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は富小路通の東に面し、御池通から約 50 m 北に入った町屋の中に位置する。当地は烏丸御池遺跡及び平安京跡にあたる。烏丸御池遺跡は平安京造営以前の縄文時代～飛鳥時代にわたる集落遺跡で、本調査地は遺跡の東端付近に位置する。周辺の調査では竪穴住居や流路等が検出され、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器等が採取されている。

平安京条坊では、調査地は左京三条四坊十町にあたる。また、調査地の東部は富小路路面・西側溝・西築地の推定位置である。当町は、平安時代中期には右大臣藤原定方の邸宅「中西殿（山井西殿）」が存在した（『拾芥抄』）。定方は、西隣の七町には「大西殿」、東隣の十五町には「山井殿」を構えている。「中西殿」は定方から娘婿の藤原永頼（山井三位）へ、さらに娘婿の藤原能通（山井大納言）へと受け継がれた後に、長和四年（1015）に焼失している（『小右記』同年四月廿三日条）。

鎌倉時代には、当町に善法院があり、弘長二年（1262）に親鸞上人がこの地で入寂したと伝えられる。

桃山時代には、豊臣秀吉により京都改造が行われ、天正地割により富小路は西へ移動し現在の位置に作り替えられている。江戸時代には中京の町屋に含まれ、慶長五年（1600）には周辺に多くの町屋があり、繁栄した様子をうかがうことができる（『柳八幡町文書』）。

2 既往の調査（図 4、表 1）

調査地の周辺では多くの発掘調査及び試掘調査が行なわれている。以下に、周辺での調査概要を記述する。

左京三条四坊六町

地下鉄東西線に伴う調査の No.14 調査区で平安時代の土坑が検出され（調査 1）、No.15 調査区で室町時代の土坑等が検出されている（調査 2）。

左京三条四坊七町

建物建設に伴う調査において、弥生時代の自然流路、平安時代の地割溝、室町時代の等持寺の柵、安土桃山時代の池等が検出された（調査 4）。その他、多くの立会調査や試掘調査で平安時代～江戸時代の包含層が検出されている。

左京三条四坊十町

御池中学校敷地内で 3 次にわたる調査が実施されている。第 1 次調査では、古墳時代の土器類が出土し、平安～鎌倉時代の三条坊門小路の北側溝が検出されている（調査 6）。第 2 次調査では、古墳時代の流路や平安～江戸時代にかけての多くの遺構が検出された。江戸時代の真鍮工房が初めて発見され真鍮の作業工程を知る機会となった。また、陶器生産に関するトチンや窯体等も多く出土している（調査 5）。第 3 次調査では、古墳時代の流路・杭跡、平安時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の柵・溝、江戸時代の井戸・石組・室・土坑・柱穴が検出されている（調査 7）。本調査

地の南に隣接するマンション建設に伴う調査では、平安～室町時代の富小路路面と西側溝が検出された。その他に、平安時代後期の柱穴群、室町時代の土坑、江戸時代の井戸・土坑・石組等が検出されている（調査8）。

左京三条四坊十一町

地下鉄東西線に伴う調査において、No.16 調査区で室町時代後半の鋳造工房とみられる遺構や鋳造関連遺物が検出され（調査10）、No.17 調査区において平安時代の富小路路面・側溝が検出されている（調査11）。御池通に隣接するコスモシティ富小路御池建設の調査において、弥生～古墳時代の遺物を含む落ち込み、平安時代後期の園池遺構、鎌倉時代の土坑・溝・井戸・柱穴群等が検出された（調査12）。

左京三条四坊十四町

地下鉄東西線に伴う調査において、No.18 調査区で時期不明の井戸・土坑・落ち込みが検出されている（調査13）。

左京三条四坊十五町

宅地南西部に位置する建物建設に伴う調査で平安時代の園池・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町時代の井戸・集石・土坑、安土桃山～江戸時代の建物基礎・井戸・石組・土坑等が検出された（調査15）。ホテル建設に伴う調査では、平安時代中期の池・溝・土坑、鎌倉時代の路面・溝・柱列、室町～安土桃山時代の溝・土坑・柱穴、江戸時代の井戸・礎石・柱穴・土坑等が検出された（調査16）。

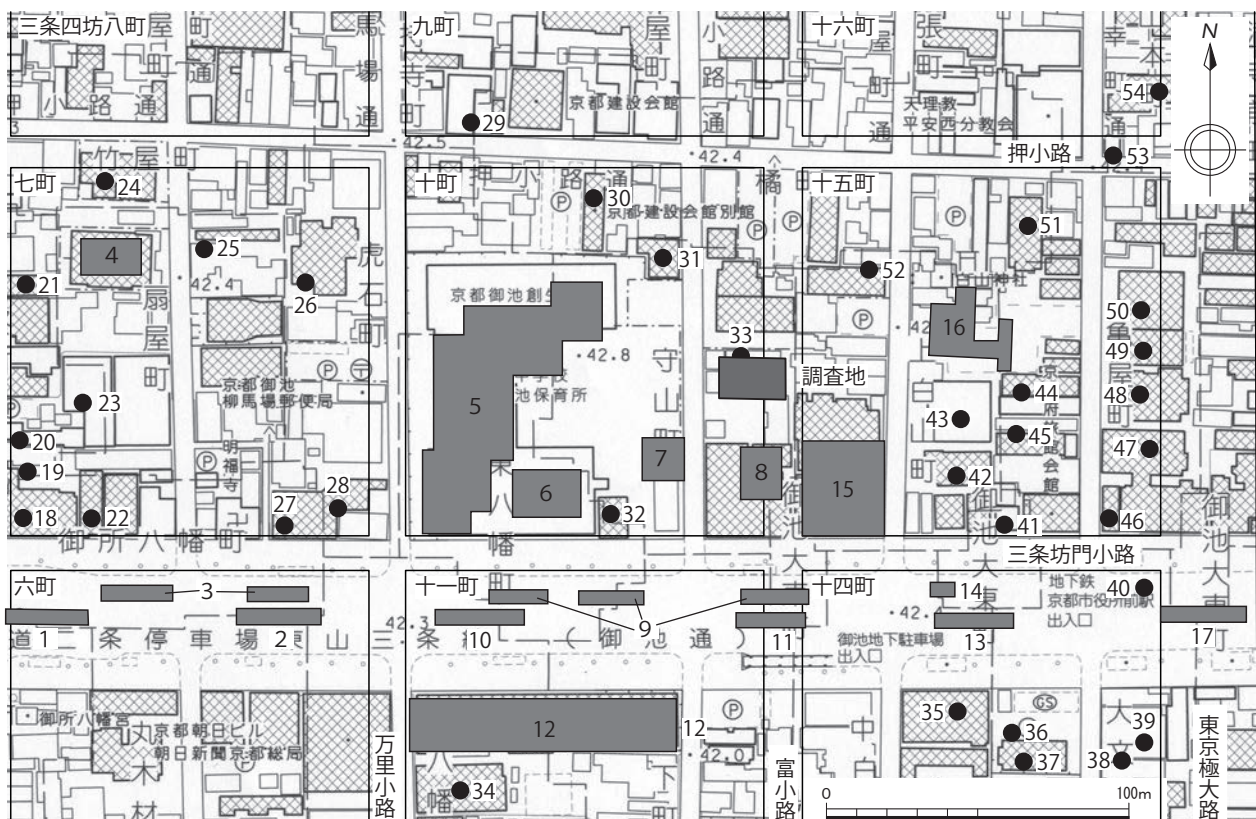


図4 既往調査位置図（1：2,500）

東京極大路

地下鉄東西線に伴う試掘調査において、No.19 調査区で平安時代後期の東京極大路路面及び東側溝が検出されている（調査 17）。

表 1 既往調査一覧

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	左京三条四坊六町	調査	No.14 調査区：平安時代の土坑・土器類。	『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
2	左京三条四坊六町	調査	No.15 調査区：室町時代の土坑など。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
3	左京三条四坊六町	立会	No.9・10 調査区：室町前半の遺構・遺物を多く検出。	『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
4	左京三条四坊七町	調査	弥生時代の自然河川、平安時代の地割溝、室町時代の等持寺の堀跡、桃山時代の池などを検出。	『平安京左京三条四坊七町跡・等持寺跡』国際文化財株式会社
5	左京三条四坊十町	調査	江戸時代の真鍮工房。陶器生産に関する遺物が多く出土。	『平安京左京三条四坊十町跡』2004 - 10 埋文研
6	左京三条四坊十町	調査	古墳時代の土器類出土。平安～鎌倉の三条坊門小路の北側溝検出。	『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
7	左京三条四坊十町	調査	古墳時代の流路・杭跡、平安時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝・柱列・土坑、江戸時代前期の井戸・土坑・石組、江戸時代後期の井戸・室・土坑・柱穴。	『平安京左京三条四坊十町跡』2004 - 4 埋文研
8	左京三条四坊十町	試掘	GL - 1m で中世以前の遺構を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 22 年度』京都市文化市民局
9	左京三条四坊十一町	立会	No.14 調査区：富小路路面・西側溝。	『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
10	左京三条四坊十一町	調査	No.16 調査区：室町時代後半の鑄造工房跡とみられる遺構・鑄造関連遺物。	『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
11	左京三条四坊十一町	調査	No.17 調査区：平安時代の富小路路面・側溝群。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
12	左京三条四坊十一町	調査	弥生～古墳時代の遺物を含む落込み、平安時代後期の園池、鎌倉時代の土坑・溝・井戸・柱穴群などを検出。	『平安京左京三条四坊十一町：コスモシティ御池富小路新築に伴う調査』古代文化調査会
13	左京三条四坊十四町	調査	No.18 調査区：時期不明の土坑・井戸・落込み。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994 年
14	左京三条四坊十四町	立会	No.15 調査区：室町前半の遺構・遺物をまとまった形で多く検出。	『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1997 年
15	左京三条四坊十五町	調査	平安時代の池跡・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町時代の土坑・井戸・集石遺構、桃山～江戸時代の建物基礎・井戸・石組・土坑などを検出。	『平安京左京三条四坊十五町 烏丸御池遺跡：麩屋町の調査』古代文化調査会
16	左京三条四坊十五町	調査	平安時代中期の池・溝・土坑、鎌倉時代の路面・溝・柱列、室町～安土桃山時代の溝・土坑・柱穴、江戸時代の井戸・礎石・柱穴・土坑などを検出。	『平安京左京三条四坊十五町跡－亀屋町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社イビソク 2018 年
17	東京極大路	試掘	No.19 調査区：平安時代後期の東京極大路路面・東側溝。	『平成 2 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研
18	左京三条四坊七町	立会	No.1:2.0m、江戸前期の包含層（土師器皿）。No.2:-1.0m 江戸後期の包含層（土師器皿）。-1.25m、江戸中期の包含層（土師器皿）。-1.85m、時期不明の包含層（土師器皿）。-2.2m、江戸初期の包含層（土師器皿、施釉陶器志野皿）。No.3:-1.6m、平安中期～室町の包含層（土師器皿、輸入青磁碗）。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局
19	左京三条四坊七町	試掘	GL-2.05m で室町時代の土坑状遺構 1 基。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 6 年度』京都市文化観光局
20	左京三条四坊七町	立会	GL-1.88m にて鎌倉～江戸の土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 2 年度』京都市文化観光局

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
21	左京三条四坊七町	立会	-2.0m、時期不明の包含層(土師器)。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成20年度』京都市文化市民局
22	左京三条四坊七町	立会	-0.7m、江戸後期の包含層。-1.93m、鎌倉中期の包含層(土師器皿)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』京都市文化市民局
23	左京三条四坊七町	立会	GL-1.5mにて室町の井戸。	『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局
24	左京三条四坊七町	立会	No.1:-1.5m、平安の包含層(土師器皿、軒平瓦)。-1.35m、平安後期の包含層(土師器皿、白色土器皿、須恵器甕、平瓦)。-1.65m以下、黄褐色泥砂の地山。No.2:-1.37m、時期不明の落込み。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局
25	左京三条四坊七町	立会	GL-1.55mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局
26	左京三条四坊七町	試掘	GL-1.05m以下包含層5、江戸3、室町2。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局
27	左京三条四坊七町	立会	-0.2mで時期不明の暗赤褐色焼土層。-0.6mで褐灰色粗砂を検出。遺構、遺物は確認できず。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
28	左京三条四坊七町	立会	No.1:-0.42m、近世以降の包含層。-1.12m、近世の包含層。No.2:-1.5m、江戸後期の包含層(土師器皿)。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
29	左京三条四坊九町	立会	No.1:-1.02m、桃山の包含層(土師器皿、施釉陶器瀬戸美濃系灰志野小碗)。-1.3m、鎌倉前期の包含層(土師器皿)。-1.45mで黄褐色砂泥の地山を切って平安末期のピット(土師器皿)。No.2:-1.3m、江戸前期の包含層(土師器皿)。-1.48m、桃山の包含層(土師器皿、白磁、平瓦)。-1.85mで黄褐色微砂の地山を切って時期不明の落込。No.3:-2.5m、平安後期の包含層(土師器皿)。-2.5m以下、黄褐色砂泥の地山。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局
30	左京三条四坊十町	立会	GL-1.85mにて室町の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局
31	左京三条四坊十町	立会	No.1:-2.2m、室町中期の包含層(土師器皿)。No.2:-1.37m、室町中期の包含層(土師器皿、瓦器碗)。-1.85m、時期不明の包含層(瓦)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
32	左京三条四坊十町	立会	-3.2mまで既存基礎。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局
33	左京三条四坊十町	立会	-0.68m、江戸後期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局
34	左京三条四坊十一町	試掘	No.1:GL-1.8mで近現代・江戸時代の包含層・土坑を検出。No.2:-0.7m以下、江戸時代の包含層。-1m以下、室町時代の包含層。-1.8m以下、平安時代～室町時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和55年度』埋文研
35	左京三条四坊十四町	立会	No.1:GL-1.7mで室町の包含層。No.2:-2.6mで地山を切って時期不明の堀状遺構。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
36	左京三条四坊十四町	立会	GL-0.85m以下、路面。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
37	左京三条四坊十四町	立会	No.1:GL-1.34mで桃山末～江戸初期の包含層。No.2:-1.77mで平安中期の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
38	左京三条四坊十四町	立会	GL-1.8mで桃山の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化市民局 1988年
39	左京三条四坊十四町	立会	No.1:GL-0.82mで鎌倉末期の包含層。-9.7mで鎌倉前期の包含層。No.2:-2.6mで桃山の包含層。-1.7mで時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
40	左京三条四坊十四町	立会	GL-1.22m以下、推定三条坊門小路路面。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化市民局 1988年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
41	左京三条四坊十五町	立会	GL-1.82 以下、平安整地層。この層を切って平安～室町の土坑 4、時期不明の東西方向柱穴列。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 27 年度』京都市文化市民局 2016 年
42	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.7m で近世の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局
43	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.2m 以下、近世の包含層。-1.65m で時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局
44	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.3m 以下、江戸末期の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局
45	左京三条四坊十五町	立会	GL-2.1m で平安末頃の包含層を切って土坑 4(平安後期 2、江戸 1、時期不明 1)。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局
46	左京三条四坊十五町	立会	GL-0.9m で江戸の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 58 年度』京都市文化観光局
47	左京三条四坊十五町	試掘	GL-2.1m で平安末頃の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局
48	左京三条四坊十五町	立会	GL-1.0m で近世以降の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008 年
49	左京三条四坊十五町	立会	GL-1.87m で平安末～鎌倉の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 6 年度』京都市文化市民局
50	左京三条四坊十五町	立会	東京極大路の路面と側溝を確認。No.1:GL-1.08m 以下、近世の包含層、時期不明の路面 2。-1.9m 以下、流れ堆積。No.2:-1.6m 以下、路面 2。No.3:-2.32m で平安後期の南北溝(西側溝)。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』京都市文化市民局 1998 年
51	左京三条四坊十五町	立会	No.1:GL-1.96m で室町の包含層。-2.31m で室町の包含層。-2.6m で室町の包含層。No.2:-2.06m で室町の包含層。-2.21m 時期不明の包含層。-2.86m で地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 27 年度』京都市文化市民局 2016 年
52	左京三条四坊十五町	立会	GL-1.11m で暗オリーブ褐色砂礫を切ってオリーブ褐色砂礫シルトの中世土坑状遺構(土師器皿)、-1.42m で黄褐色砂礫、-1.82 ～ -2.06m で暗灰黄色粘土質シルト(炭混)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 28 年度』京都市文化市民局 2017 年
53	左京三条四坊十五町	立会	GL-1.27m 以下、推定押小路路面 3、室町以降。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 62 年度』京都市文化観光局
54	左京三条四坊十六町	立会	No.1:GL-1.55m・-1.63m で江戸前期の包含層 2。No.2:-1.1m で江戸末期の包含層。No.3:-1.0m で室町末期の湿地状堆積。-1.3m で室町後期の包含層。-1.5m で時期不明の包含層。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図版1～4）

調査地の現標高は東部で42.6 m前後、西部で42.4 m前後であり、20 cm程度の高低差がある。基本層序は現代整地土も含め、8層に区分した。

- 1層 炭化物・焼土・コンクリートガラ等を含む暗褐色砂泥による現代整地層である。層厚0.5～0.9 mで調査区全域に分布する。
- 2層 オリーブ褐色砂泥による近代整地層である。層厚約0.3～0.4 m。調査区全域に分布する。
- 3層 暗灰黄色泥砂、暗オリーブ褐色砂泥、黒褐色泥砂、オリーブ黒色泥砂等による整地層である。層厚0.25 m前後で調査区全域に分布する。第1面で検出した幕末の遺構は、断面観察により3層上面から切り込むことを確認した。
- 4層 暗灰黄色砂泥、黒褐色砂泥、灰オリーブ褐色砂泥、オリーブ黒色泥砂等による江戸時代後半の整地土である。層厚0.2～0.3 mで調査区全域に分布する。東区では4層上面から調査を開始し、江戸時代後半の遺構を検出した。
- 5層 暗灰黄色砂泥、黒褐色砂泥及び泥砂、暗オリーブ褐色砂泥等による近世前半の整地土である。層厚0.2 m前後で調査区全域に分布する。5層上面では安土桃山時代～江戸時代前半の遺構を検出した。西区では5層上面より調査を開始している。
- 6層 暗灰黄色砂泥、黒褐色砂泥、暗オリーブ褐色砂泥による中世整地層である。層厚0.2～0.3 m前後で調査区全域に分布する。6層上面では、鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。
- 7層 オリーブ褐色砂質シルトによる整地層である。層厚0.3 m前後。西区ではほぼ全域で分布を確認できるが、東区では中世以降の遺構による削平により大部分が消失し東部の一部や南西部に残る。部分的に7層上面付近に暗灰黄色砂泥が0.05～0.1 mの厚さで堆積しており、部分的な整地が行なわれたものと考えられる。7層上面では、平安時代中～後期の遺構を検出した。
- 8層 オリーブ褐色砂質シルト・砂質土、暗オリーブ褐色砂礫からなる地山層である。上位には砂質シルト・砂質土が堆積し、砂礫層はその下位に堆積する。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	溝 178、柱穴群、土坑 547・152・560・542・510・189	
鎌倉時代	溝 430、井戸 551・398、石組 364、集石 124、 土坑 167・355・492・362・360・361・154・368・370・176・184	
室町時代	井戸 180、土坑 128・179・383・386・373・388・397・149	
安土桃山～江戸時代前半	井戸 129・46・105、石組 120・135・104・141、 集石 324・325・382・東部集石群、土坑 8・103・121・115	
江戸時代後半～幕末	井戸 1・5・6・23・303・333・310・351・34・25・15・314・330、 土坑 32・43・28・26・29	

2 検出遺構

今回の調査では、4層上面で江戸時代後半～幕末、5層上面で安土桃山時代～江戸時代前半、6層上面で鎌倉時代～室町時代、7層上面で平安時代中～後期の遺構を検出した。東区では近世の井戸や土坑を多く検出し、それらにより中世以前の遺構が大きく攪乱される状況であった。西区では東区と比べて中近世の遺構による攪乱が少なく、平安時代遺構面である7層が厚く堆積する状況であった。

以下、各面での検出遺構について記述する。

(1) 第1面（4・5層上面）

東区では4層上面より調査を開始し、江戸時代後半～幕末の遺構を調査した後、5層上面で江戸時代前半の遺構を検出したが、西区では5層上面から調査を開始したため同一面で江戸時代全般の遺構を検出している。以下に検出遺構を4層上面、5層上面に区分し記述を行う。

a 4層上面（図版5）

江戸時代後半～幕末の遺構を検出した。検出した遺構は、井戸、土坑が中心である。

〔柱穴等〕

4層上面では調査区北東部で柱穴状の窪みを3基検出したが、建物や柵等になるものは検出していない。

〔井戸〕

4層上面では14基の井戸を検出した。石組の井戸が7基あり、その他は井戸枠が残らず素掘りであるが、ほぼ垂直に掘り込まれる状況や底面の標高から井戸と判断した。

井戸1

東区6C・7C・6D・7D地区で検出した井戸である。井戸枠は検出していないが、湧水面の砂礫層まで掘削が及び、肩口から垂直に掘り込まれることから井戸と考えた。平面形は径2.0mの円形を呈する。深さは1.9mを測り、底面の標高は38.74mである。底面は平坦である。井戸枠は、廃絶時に石もしくは木枠が抜き取られた可能性がある。遺物は土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、国産磁器、瓦質土器、瓦、土製品など14B段階に属する遺物がコンテナ10箱以上出土した。

井戸6（図5）

東区6B地区で検出した石組の井戸である。井戸枠には主に花崗岩が用いられ、3段残存する。掘方は径1.6～1.85mの不正円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径0.9mを測る。井戸底は石組底面より0.36m掘り下げられ、検出面からの深さは0.92mを測り、井戸底面の標高は39.79mである。底面の標高が高く、井戸ではなく水溜等の可能性もある。遺物は14A段階の土師器、施釉陶器、染付等が出土した。

井戸5

東区7B・8B地区で検出した石組の井戸である。石組には花崗岩が用いられる。掘方は径1.2～1.4mの円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径0.75mを測る。井戸枠内は石組2段分ほど掘り下げたが、安全面により以深は掘削を行っていない。埋土はオリーブ褐色砂泥である。遺

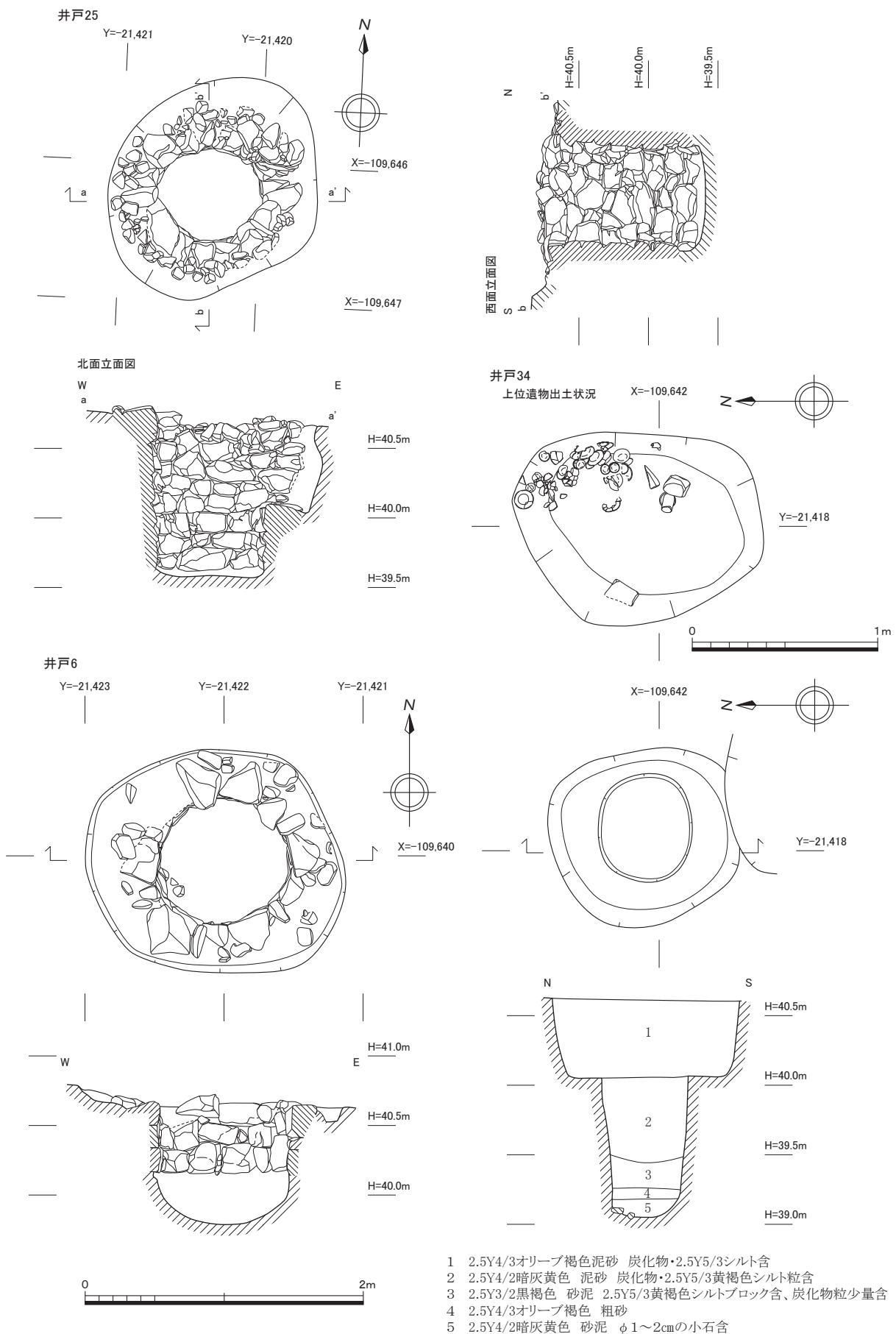


図5 井戸6・25・34平面・断面・立面図（1：40、遺物出土状況図1：30）

物は 13 B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、棧瓦等が出土した。

井戸 23 (図 6)

東区 7 E 地区で検出した石組の井戸である。石組には主に花崗岩を用いる。掘方は径 1.55 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径は 0.75 m を測る。検出面からの深さは 1.9 m を測り、井戸底面の標高は 38.77 m である。埋土は暗灰黄色砂泥であり、部分的に灰を含む黒色泥砂が混入する。遺物は 13 B 段階の土師器、施釉陶器、染付、瓦等が出土した。

井戸 15 (図 6)

東区 6 D 地区で検出した石組の井戸である。東西に位置する土坑 16 及び 122 を切る。掘方は径 1.5 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径 0.88 m を測る。標高 39.10 m まで掘り下げたが底面を検出することはできなかった。埋土は石組より上位では暗灰黄色砂泥と灰を含む黒色泥砂が互層となり、石組内は暗灰黄色砂泥である。遺物は 13 A ～ B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦が出土した。

井戸 25 (図 5)

東区 7 D ・ 8 D 地区で検出した石組井戸である。井戸枠には花崗岩が用いられる。掘方は 1.45

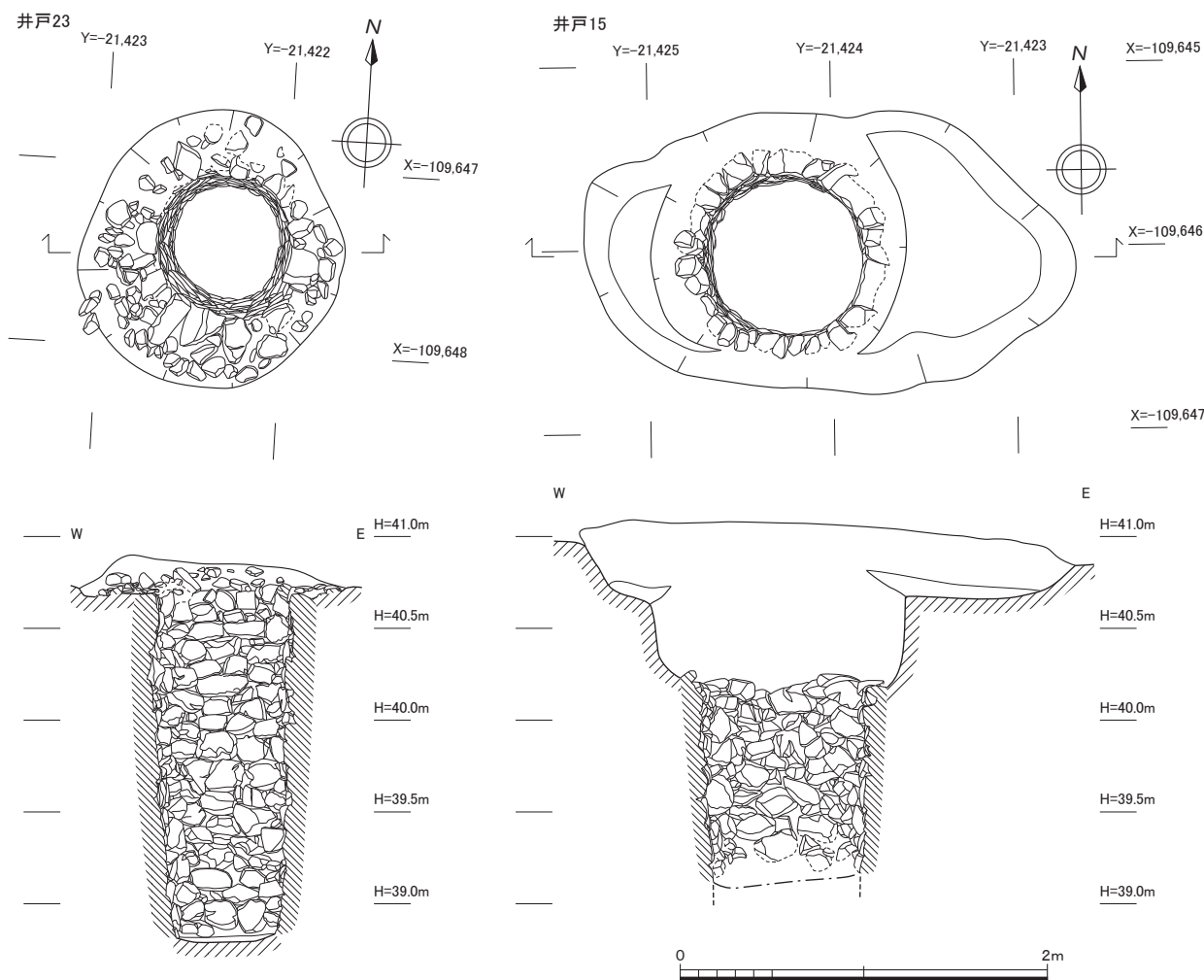


図 6 井戸 15 ・ 23 平面 ・ 立面図 (1 : 40)

～1.52 mの不正円形を呈する。井戸枠は、下位3段は石を円形に組み、上位は東側が幅0.15 m開くように組まれる。検出面からの深さは1.24 mを測り、井戸底面の標高は39.58 mである。底面の標高が高い位置にあり、井戸ではなく水溜等である可能性もある。遺物は13 A段階の土師器、施釉陶器、染付、瓦等が出土した。

井戸 34 (図5)

東区8 C地区で検出した素掘りの井戸である。上位を径1.3～1.4 mの平面不正円形に0.55 m掘り下げた後、中央部を径0.7～0.8 mの平面円形に1.0 m掘り下げる。底面は平坦である。井戸枠の石組や曲物等は確認できない。素掘りであったのか曲物等が据えられていたのかは不明である。井戸底面の標高は39.05 mである。埋土は上位の掘り込みはオリーブ褐色泥砂、下位の井筒部分は上位から暗灰黄色泥砂、黒褐色砂泥、オリーブ褐色粗砂、径1～2 cmの小石を含む暗灰黄色砂泥である。井戸の上面付近に13 A段階の土師器皿や焼塩壺がまとまって投棄されていた。その他、施釉陶器、瓦等が出土した。

井戸 351 (図7)

西区5 A・5 B地区で検出した石組の井戸である。石組が方形を呈し石室の可能性を考えたが、湧水面である砂礫層まで掘り込まれることから井戸と判断した。石組には40～50 cm大の花崗岩が用いられ、目地に川原石を詰める。掘方は東西に長い楕円形を呈し、長軸1.74 m、短軸1.52 mを測る。井戸枠は東西に長い長方形を呈し、内径は長軸0.98 m、短軸0.78 mを測る。石組底面から0.24 m掘り下げられ、検出面からの深さは2.18 mを測る。井戸底の標高は38.74 mである。遺物は13 A段階の土師器、施釉陶器、染付、瓦が出土した。

井戸 330

西区5 E地区で検出した石組の井戸である。石組には川原石が用いられる。調査区南壁沿いで検出したため正確な規模は不明であるが、掘方は径1.4 mの円形を呈し、井戸枠は内径0.7 mの円形を呈する。安全面から底までの掘削は行っていない。遺物は12 A段階の土師器、施釉陶器、染付、瓦、金属製品が出土した。

その他

その他に、井戸枠は無いが断面の形状や底面の標高から井戸と想定されるものは、井戸13・303・310・314・333がある。井戸314が13期、井戸13・303・310・333が14期に属する。

〔土坑〕

土坑 32

東区8 C・9 C地区で検出した土坑である。播鉢状に掘り込まれ、土坑の底面に黄褐色シルトを貼る。遺構の東側は調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、検出長1.68 m、幅1.65 mを測る。東壁断面の観察から、3層上面より切り込む遺構であると判断され、3層上面からの深さは1.12 mを測る。埋土は上位から炭化物・焼土・灰の混入する黒褐色砂泥、灰が多く混入する黒色泥砂である。底面貼土の厚さは0.03～0.05 mを測る。遺物は14 A～B段階の土師器、施釉陶器、染付、瓦等が出土した。

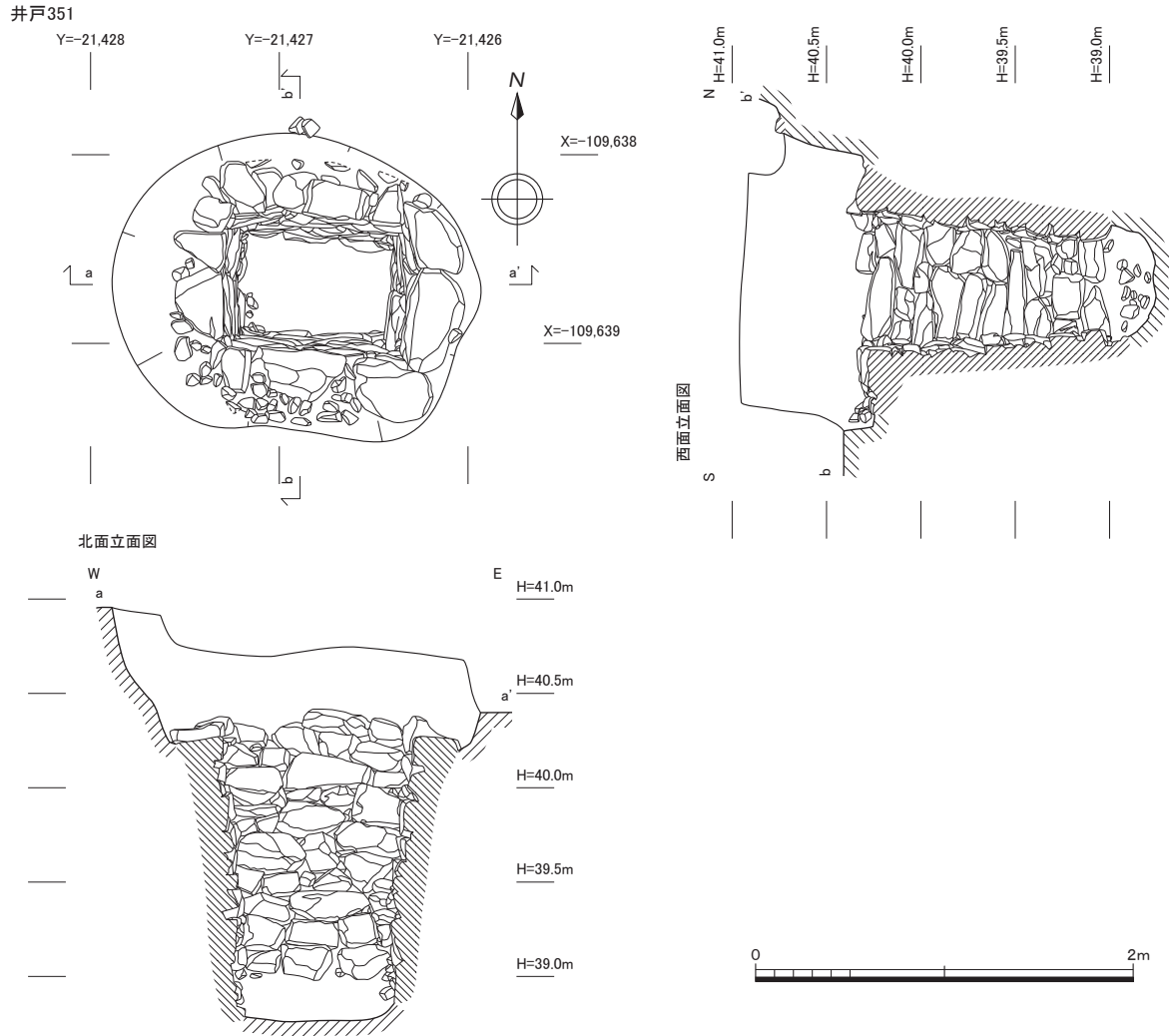


図7 井戸351平面・立面図（1：40）

土坑 47

東区7C・8C・7D・8D地区で検出した土坑である。径2.05mの円形を呈し、検出面からの深さは0.74mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。湧水面である砂礫層までは掘り込まれないことから井戸とは異なると考えられ、樽や桶などの据付跡ではないかと考える。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は12B段階の土師器、施釉陶器、染付等が出土した。

土坑 26・28・43

東区で検出した布掘り状の土坑である。土坑26・43は東西方向に延び、土坑28は南北方向に延びる。埋土は灰が多く混入する黒色泥砂である。遺物は土坑28からは12B段階、土坑26・43からは13A段階の土師器、施釉陶器、染付等が出土した。

b 5層上面（図版6）

5層上面では安土桃山時代～江戸時代前半の遺構を検出した。検出した遺構は井戸、石組、土坑が中心である。

〔柱穴等〕

西区でピット状の集石 324・325・382 を検出した。礎石の根固めの可能性もあるが、詳細は不明である。他に柱穴やピットは検出できず、建物や柵などは復元できない。

〔井戸〕

4 基の井戸を検出した。いずれも石組の井戸である。

井戸 105 (図 8)

東区 7 D 地区で検出した石組の井戸である。石組は主に川原石が用いられ、3 段残存する。南側を井戸 23 に切られ、北隣する石組 141 の南側を切る。掘方は径 1.2 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径 0.7 m を測る。石組底面から 0.5 m 掘り下げられ、検出面からの深さは 1.28 m を測る。井戸底面の標高は、39.32 m である。遺物は 11 B～C 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦が出土した。

井戸 129 (図 8)

東区 6 B・7 B 地区で検出した石組の井戸である。石組には花崗岩が用いられる。第 2 面調査時に検出したが、井戸枠内より江戸時代前半の遺物が出土したため 5 層上面に対応すると判断した。掘方は径 1.3～1.5 m の円形を呈する。井戸枠はやや歪な円形を呈し、内径は 0.65～0.75 m を測る。検出面からの深さは 0.88 m を測り、井戸底面の標高は 39.33 m である。

井戸 46

東区 8 B 地区で検出した石組の井戸である。石組には花崗岩が用いられる。西側を井戸 5 に切られる。掘方は径 1.65 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径は 1.0 m を測る。井戸枠内は石組 2 段分程度掘り下げたが、安全面から以深は掘削できなかった。遺物は 11 B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器が出土した。

井戸 125

東区 6 D 地区で検出した石組の井戸である。大部分を井戸 15 に壊され、石組の東面の一部が残存するのみであった。規模や時期の詳細は不明である。

〔石組遺構〕

石を円形に組む井戸状の石組や、方形に組む石室状の石組遺構を複数検出した。円形の井戸状石組遺構は、湧水面である砂礫層まで掘り込まれていないことから、井戸とは異なると判断した。

石組 141 (図 8)

東区 7 D 地区で検出した円形の石組である。石組には主に 20 cm 前後の花崗岩が用いられる。遺構の北・東・西を他の遺構に切られる。掘方は 1.1 m を測り、石組の内径は 0.7 m を測る。検出面からの深さは 0.4 m を測り、底面の標高は 40.02 m である。埋土はオリブ褐色泥砂である。遺物は 11 A～B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦と平安～鎌倉時代の混入物である灰釉陶器、青磁が出土した。

石組 320 (図 8)

西区 4 D・5 D 地区で検出した円形の石組である。石組には主に 15 cm 前後の川原石が用いられ

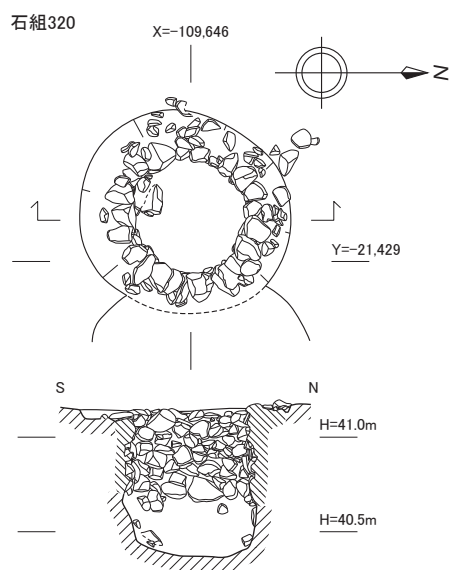
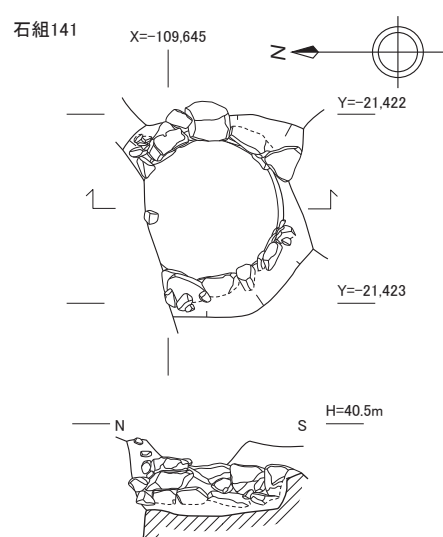
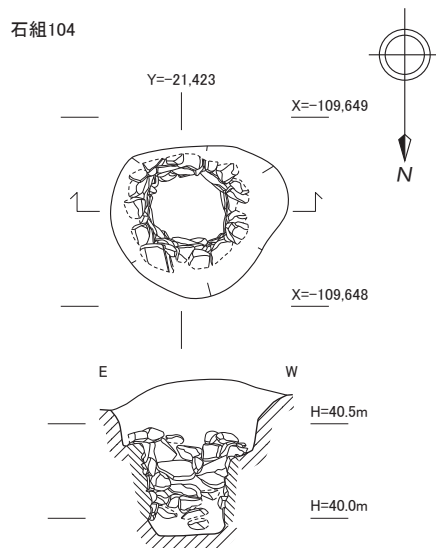
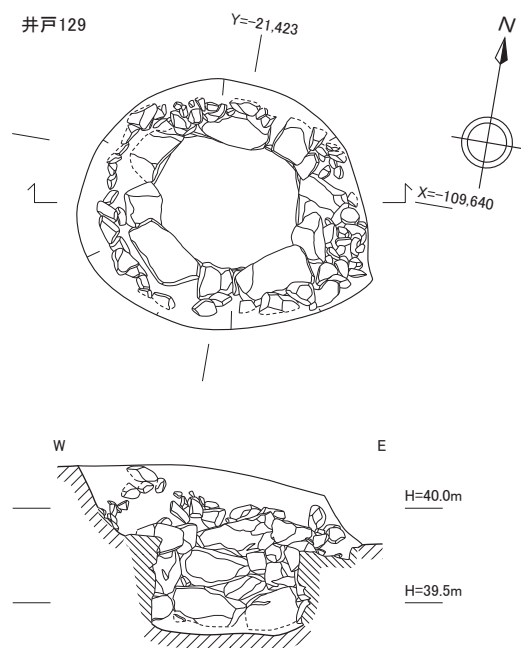
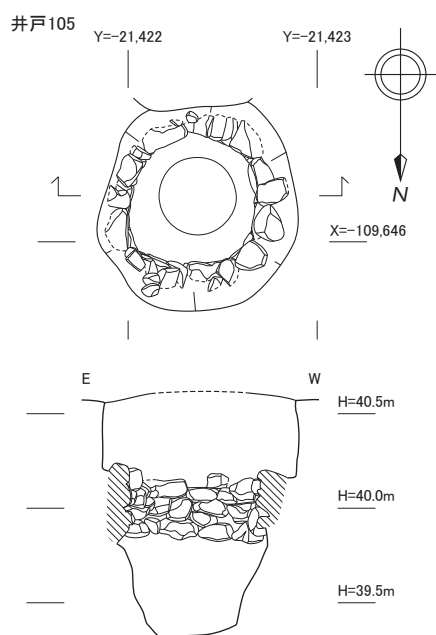


図8 井戸105・129、石組141・104・320平面・立面図（1：40）

る。遺構西側の一部を土坑 319 に切られる。掘方は径 1.2 m の円形を呈し、石組内径は 0.6 m を測る。石組の底面から 0.3 m 掘り下げられ、検出面からの深さは 0.78 m を測る。底面の標高は 40.36 m である。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は 11 B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器等が出土した。

石組 104 (図 8)

東区 6 E・7 E 地区で検出した円形の石組である。石組には主に 10～20 cm 大の川原石が用いられる。掘方は径 0.9 m 前後のやや歪な円形を呈し、石組の内径は 0.45 m を測る。検出面からの深さは 0.8 m を測り、底面の標高は 39.91 m である。埋土はオリーブ灰色泥砂である。遺物は 11 B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器等が出土した。

石組 120

東区 6 E 地区で検出した方形の石組である。調査時には東・北面と西面を別遺構と想定していたが、図上で合成した結果、方形の石室であると思われたため、1 基の遺構として扱うこととした。遺構の東部を石組 104 に切られ、南部は調査区外に延びる。方形に組まれた石室の基底部のみを検出したと考えられ、検出長 1.55 m、幅 0.82 m を測る。石組には 20 cm 前後の川原石が用いられる。

石組 135 (図 9)

東区 7 C 地区で検出した円形の石組である。方形の掘方のやや南西寄りに石組を構築する。石組は 15 cm 前後の川原石が用いられ、近世の土坑により南側を欠くが径 0.65 m を測り、北面では石組が 4 段残存し深さ 0.5 m を測る。石組底面の標高は 40.05 m である。掘方は長軸 2.5 m、短軸 2.1 m の方形を呈する。検出面からの深さは 0.85 m を測り、石組の底面より 0.2 m 程深い。ほぼ垂直に掘り下げられ底面は平坦で、土取穴のような形状を呈する。掘方内に暗灰黄色泥砂、黒褐色泥砂が 0.2～0.35 m の厚さで層状に堆積する。石組の背面に構築時の明確な掘方は確認できないことから、掘方内への埋土の充填と石組の構築は並行して行われたと考えられる。掘方の上面には拳大の礫が多数集中し検出時には上屋建物の地業である可能性も考えたが、下位では北及び東側では埋土に礫が多数含まれるがそれ以外ではまばらに含まれる状態であった。遺物は、掘方埋土からは 10 C 段階の土師器、焼締陶器、瓦等が出土し、石組内からは 11 A 段階の土師器、焼締陶器、瓦等が出土した。

石組 135 は湧水面までは掘り込まれず、石組の底面は掘方底面より上位に構築されていることから井戸とは異なると考えられる。左京三条三坊十町跡・二条殿御池城跡の調査において室町時代後半の浴室遺構として竈が検出されている⁽¹⁾。石組 135 もそれと似た構造にも見えるが、石組内や遺構の周囲で火を焚いた痕跡は確認できず、竈であるとは判断しにくい。石組は水溜として構築され、その周囲に礫を敷設したものの可能性を考えるが、土坑状の掘方と石組が別遺構である可能性も含め更なる考察が必要である。

〔土坑〕

主に東区で土取穴や廃棄土坑を検出した。また、東区東部では地業もしくは地盤改良の可能性のある集石を検出した。

石組135

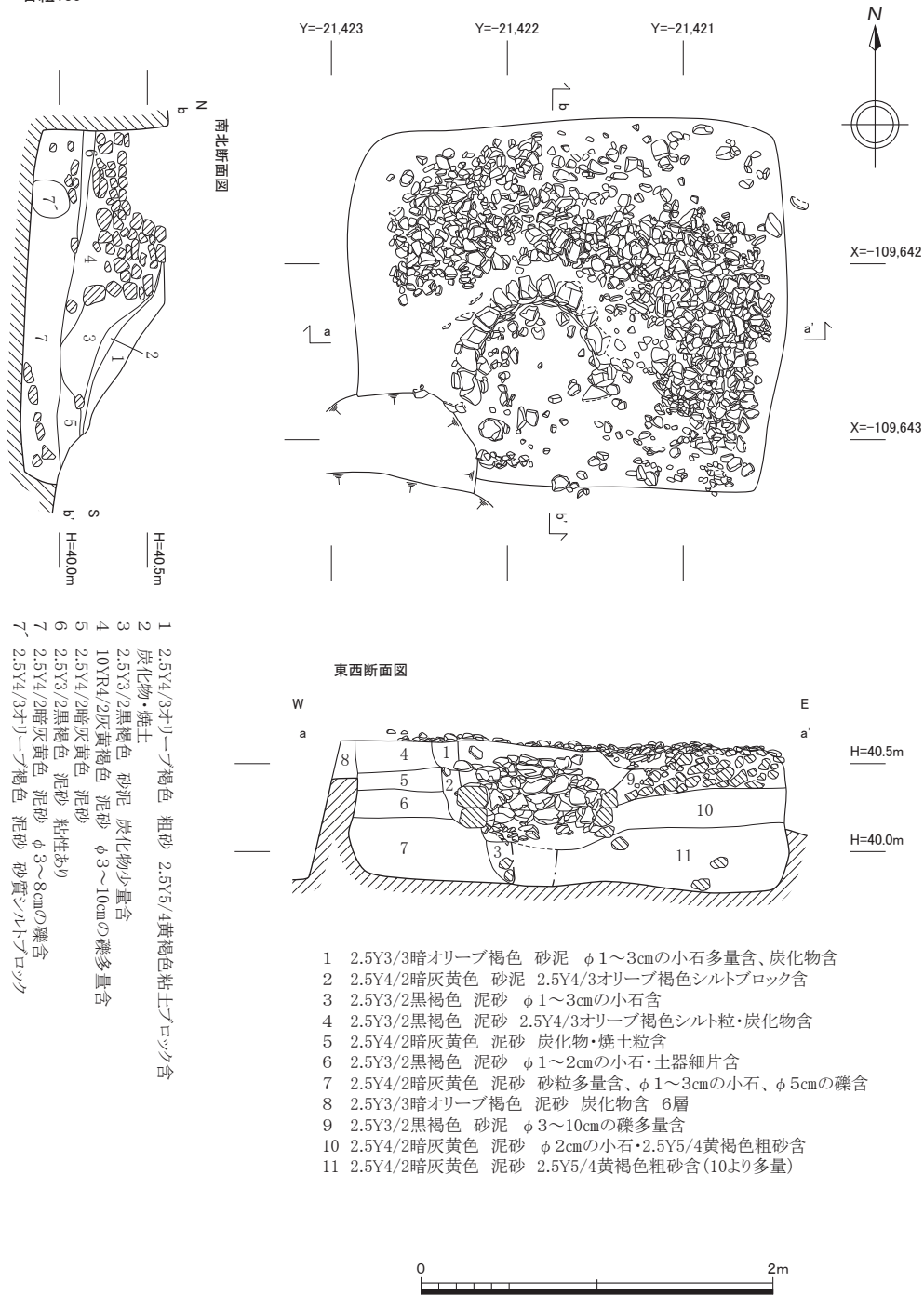


図9 石組135平面・断面図（1：40）

土坑 103・121

東区南東部で検出した土坑である。何れも平面形は方形を呈し、断面形は箱型を呈する。埋土は土坑 103 が黒褐色砂泥、黒色シルトで埋土に炭化物が混入する。土坑 121 は黒褐色砂泥・シルト、暗オリーブ褐色砂泥、オリーブ褐色砂泥で埋土に炭化物を多く含む。遺物は、11 B～C 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、染付、瓦等が出土した。

土坑 115

東西両区 5 C・6 C 地区で検出した土坑である。平面形は径 1.7 m の円形を呈する。検出面からの深さは 1.9 m を測り、底面は平坦である。肩口からはほぼ垂直に掘り込まれ、砂礫層まで掘削が及ぶことから井戸の可能性もある。埋土は黒褐色砂泥、暗灰黄色砂泥である。遺物は 11 A～B 段階の土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、染付、瓦等と平安～鎌倉時代の混入遺物が出土した。

土坑 139

東区 6 D 地区で検出した土坑である。径 0.95 m の円形を呈し、検出面からの深さは 0.82 m を測る。埋土は上位から黒褐色泥砂、暗灰黄色泥砂で、埋土に炭化物が混入する。遺物は 11 A 段階の土師器とともに鎌倉時代の須恵器、青磁が出土した。

土坑 8

東区 5 B・6 B 地区で検出した土坑である。遺構の北半は調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、径 2.1 m の円形を呈すると考えられる。播鉢状に掘り込まれ、検出面からの深さは 1.02 m を測る。埋土は上位から暗灰黄色泥砂、細砂を多く含む黒褐色シルトである。遺物は 11 A 段階の土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器が出土した。

調査区東部集石（図 10）

東区東部では南北 6.1 m、東西 3.2 m にわたり集石を検出した。平面円形・方形の土坑状に掘り込まれた内部に、拳大の川原石が集中する。平面で確認した方形・円形のプランにより集石 142・144・145・162 と区分した。集石 142・144・145 は検出面より 0.2 m の深さを測り、礫除去後の底面は平坦である。集石 162 は、幅 2.75 m の方形を呈し検出面からの深さは 0.45 m を測る。断面形は箱型を呈し、底面は平坦である。土坑埋土に 5～15 cm 大の礫が多く含まれ、埋土は層状に堆積する。出土遺物は、集石 142・144・145 から 10 C～11 A 段階の土師器、焼締陶器、瓦質土器が出土し、集石 162 からは 10 C 段階の土師器、焼締陶器、瓦質土器が出土した。

これら集石については地盤改良を目的として土坑内に礫を投入したものと考えたが、庭園の州浜の可能性も除去できない。遺構の性格については、ほぼ同時期に構築される石組 135 と合わせて、慎重に検討する必要がある。

（2）第 2 面（6 層上面 図版 7）

第 2 面では、鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。検出遺構は土坑が中心であるが、柱穴、井戸、溝等も検出している。

〔柱穴等〕

西区で鎌倉時代前半（6 B～C 段階）の柱穴を複数検出している。検出した柱穴は、径 0.3 m 前後の円形を呈し、深さは 0.2 m 前後を測る。西区北半で建物や柵の存在が想定されるが、柱間や並びは不揃いである。

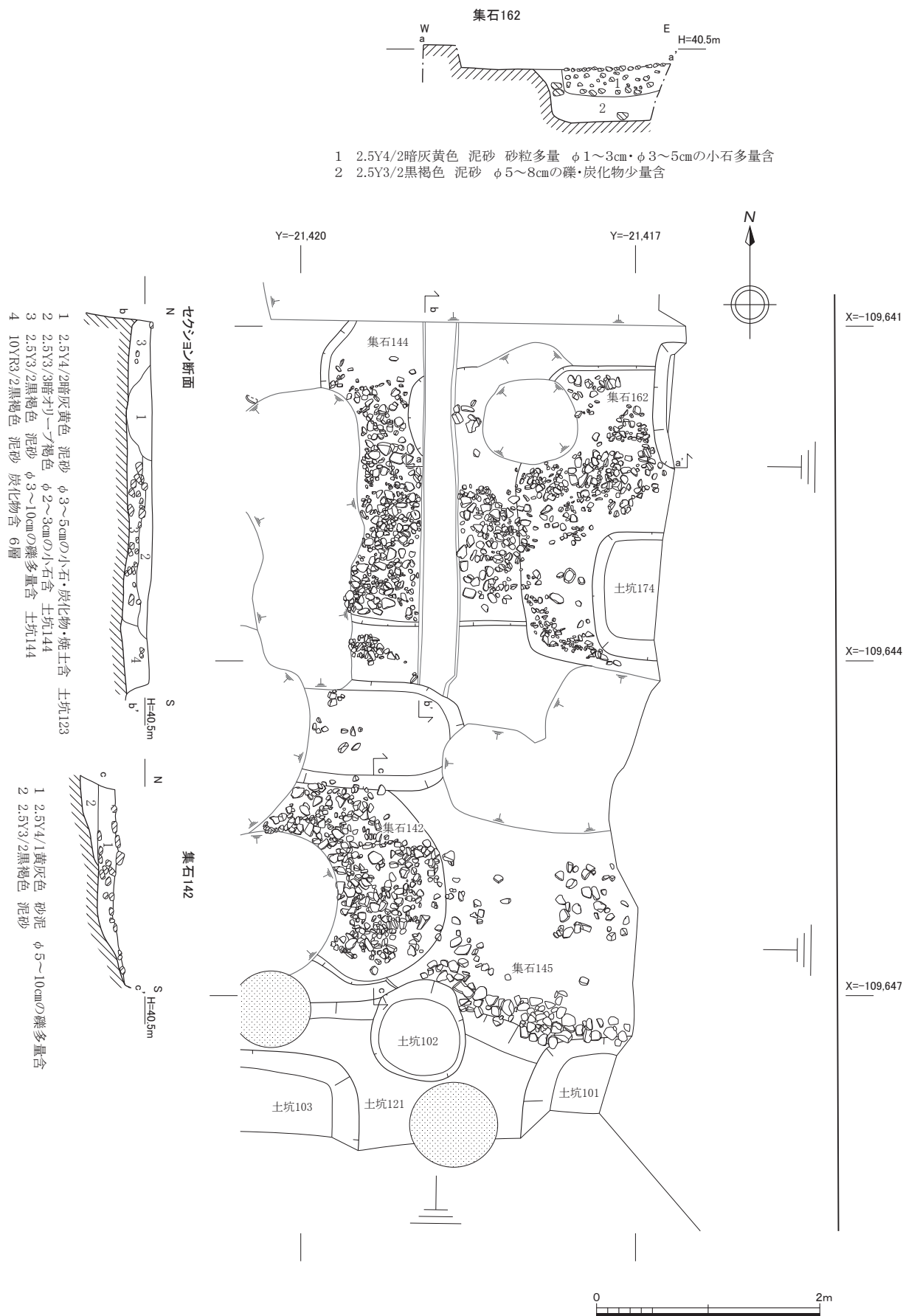


図10 東区東部集石平面・断面図（1：50）

〔溝〕

溝 430 (図 11)

西区 3 D・3 E 地区で検出した南北溝である。溝北端は $X = -109,646.25$ m で、南側は調査区外に延びる。溝は幅 0.3 m、深さ 0.46 m を測り、断面形は U 字型を呈する。埋土は炭化物、焼土粒、拳大の礫の混入する黒褐色砂泥である。遺物は 6 B 段階の土師器、青磁、瓦器等がまとめて投棄されていた。

〔井戸〕

井戸 180 (図 12)

東区 8 C・9 C 地区で検出した石組の井戸である。石組には川原石が用いられる。掘方は 1.75 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径 0.8 m を測る。検出面からの深さは 0.95 m を測り、井戸底面の標高は 39.08 m である。井戸底面に 30～40 cm 大の石が 2 石投棄されている。埋土は暗灰黄色泥砂である。遺物は 9 B～C 段階の土師器、青磁、瓦質土器が出土した。

井戸 398 (図 12)

西区 2 E・3 E 地区で検出した石組の井戸である。石組は川原石を用いる。掘方は径 2.08 m の円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径 1.0 m を測る。井戸枠内は石組 3 段程度掘り下げたが、安全面から以深の掘削は行わなかった。埋土はオリーブ褐色砂泥で、上面には拳大の礫が集中していた。遺物は 7 C 段階の土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器が出土した。

井戸 551

西区 5 D・5 E 地区で検出した石組の井戸である。遺構の北西部を柱状改良、東部を現代の井戸に切られている。第 3 面調査

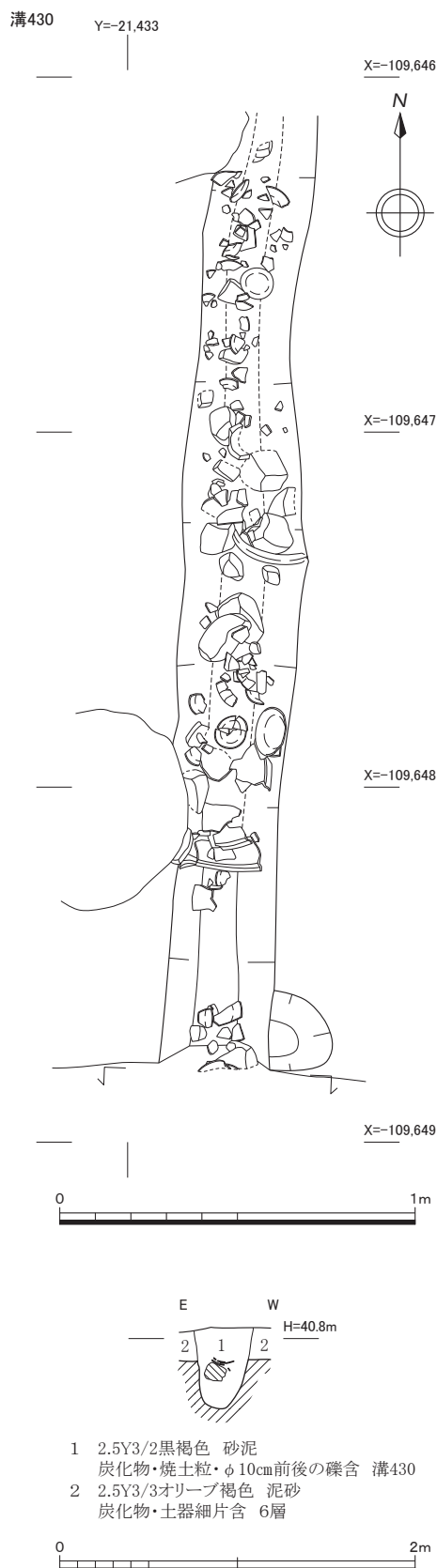


図 11 溝 430 平面・断面図
(平面 1 : 20、断面 1 : 40)

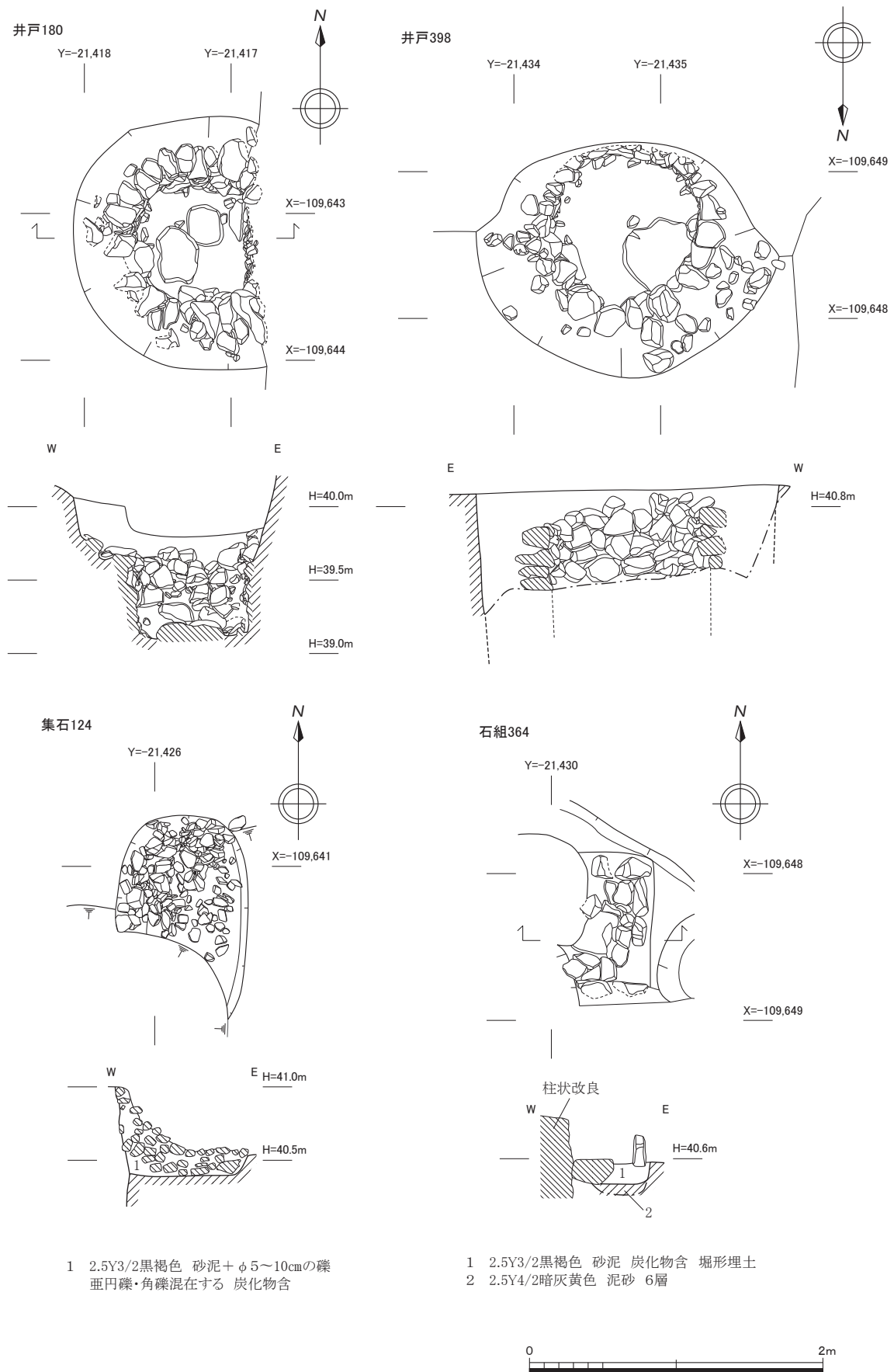


図12 井戸180・398、石組364、集石124平面・断面・立面図（1：40）

時に検出したが、井戸枠内から鎌倉時代の遺物が出土したため第2面の遺構であると判断した。掘方は1.7 m前後の不正円形を呈する。井戸枠は円形を呈し、内径0.75 mを測る。石組には川原石が用いられる。標高39.25 m地点まで掘り下げたが、安全面から完掘はできず井戸底面は確認できなかった。遺物は7 B段階の土師器、須恵器、青磁、青白磁、焼締陶器等が出土した。

〔石組遺構〕

石組 364 (図 12)

西区4 E地区で検出した平面方形を呈する石組である。底面に川原石を上位に面を向けて敷き並べ、外周は内面に面をそろえた石組を構築する。遺構の西部は後世の遺構や攪乱に切られる。石組側面の内幅は0.7 mを測る。側面の石は縦位置で用いられ、基底の1 段分残存する。

〔土坑等〕

第2面の土坑は、調査区のほぼ全域で検出し、調査区北半では鎌倉時代～室町時代の多くの土坑が切り合う状況である。時期は、大半が鎌倉時代～南北朝時代初頭（6 B～7 C段階）に属し、室町時代の土坑は少ない。

土坑 163

東区7 D・8 D地区で検出した土坑である。遺構の西部は大部分を後世の遺構に切られる。平面形は長さ2.65 m、幅2.12 mの方形を呈し、検出面からの深さは0.28 mを測る。埋土は暗灰黄色泥砂である。遺物は10 A段階に属する土師器、焼締陶器が出土した。

土坑 149

東区8 D・9 D地区で検出した土坑である。遺構の北部は近世の遺構に切られ、東部は調査区外に延びる。検出長1.9 m、残存幅1.28 mの方形を呈する。埋土は黒褐色泥砂である。遺物は、10 C段階の土師器と平安時代の須恵器、白磁が出土した。

集石 124 (図 12)

東区5 B・6 B・5 D・6 D地区で検出した集石である。遺構の南側を土坑115に切られる。幅0.9 m、深さ0.6 mを測る。埋土は黒褐色砂泥で、埋土内に拳大の礫が多数混入する。建物の地業の可能性があるが、周辺に同様の遺構は確認できなかった。遺物は7 C段階の土師器、須恵器、焼締陶器、瓦器等が出土した。

土坑 360 (図 13)

西区2 C・3 C・2 D・3 D地区で検出した南北方向の布掘りの土坑である。長さ4.4 m、幅0.78 mを測る。検出面からの深さは0.55 mを測り、断面形は逆台形を呈する。土坑内で根石等は検出されなかった。区画に伴う遺構と考えられるが、詳細は不明である。埋土は上位から炭化物を含む黒褐色砂泥、炭化物・7層土粒を含む黒褐色泥砂、暗灰黄色砂泥であり、それぞれ0.2 m前後の厚さで堆積する。遺物は7 B～C段階の土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器等が出土した。

土坑 154 (図 14)

東区5 C・6 C地区で検出した土坑である。周囲を後世の遺構に切られるため規模は不明である。検出面からの深さは0.38 mである。埋土は炭化物・焼土が混入する黒褐色泥砂である。土坑の上

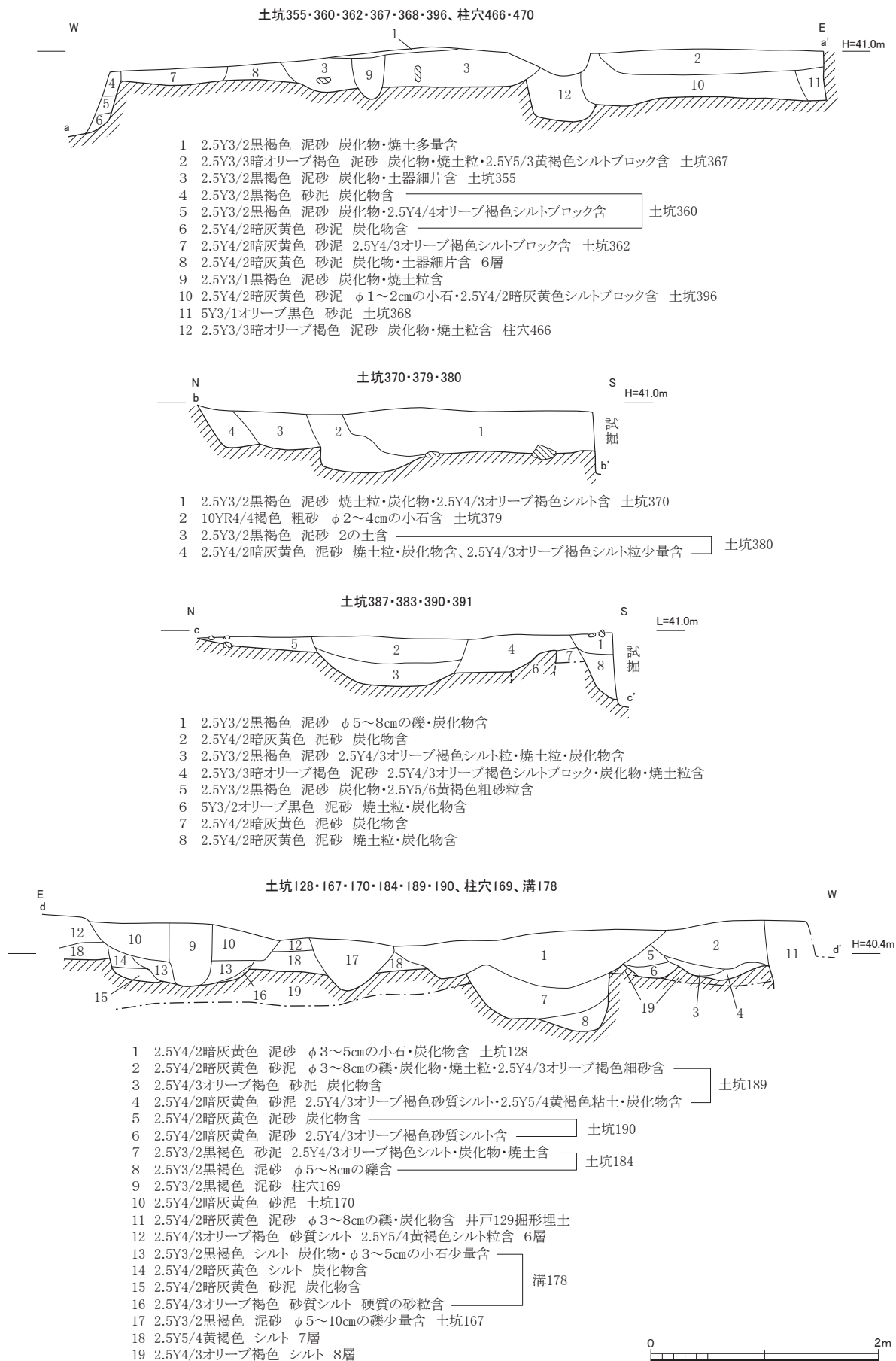


図13 第2面検出土坑断面図（1：50）

位に7B～C段階の土師器がまとまって投棄されている。その他に、須恵器、瓦質土器、瓦と平安時代の混入物である灰釉陶器、白磁が出土した。

土坑 492

西区2B・3B・2C・3C地区で検出した土坑である。遺構の南側を攪乱で切られ、上位は土坑370により削り取られる。平面形は方形を呈し、幅1.49mを測る。検出面からの深さは0.4mを測り、断面形は箱型を呈する。土坑西壁の上位に被熱痕がみられ、幅5mmの厚さで赤褐色化して硬化する。埋土はオリブ黒色泥砂、暗オリブ褐色泥砂、暗灰黄色泥砂であり、炭化物・焼土粒が多く混入する。遺物は6B～C段階の土師器、須恵器、焼締陶器と平安時代の混入物である灰釉陶器等が出土している。

土坑 167 (図 14)

東区8C地区で検出した土坑である。平面は1.45～1.60mの不正円形を呈し、検出面からの深さは0.74mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。井戸の可能性も考えたが、

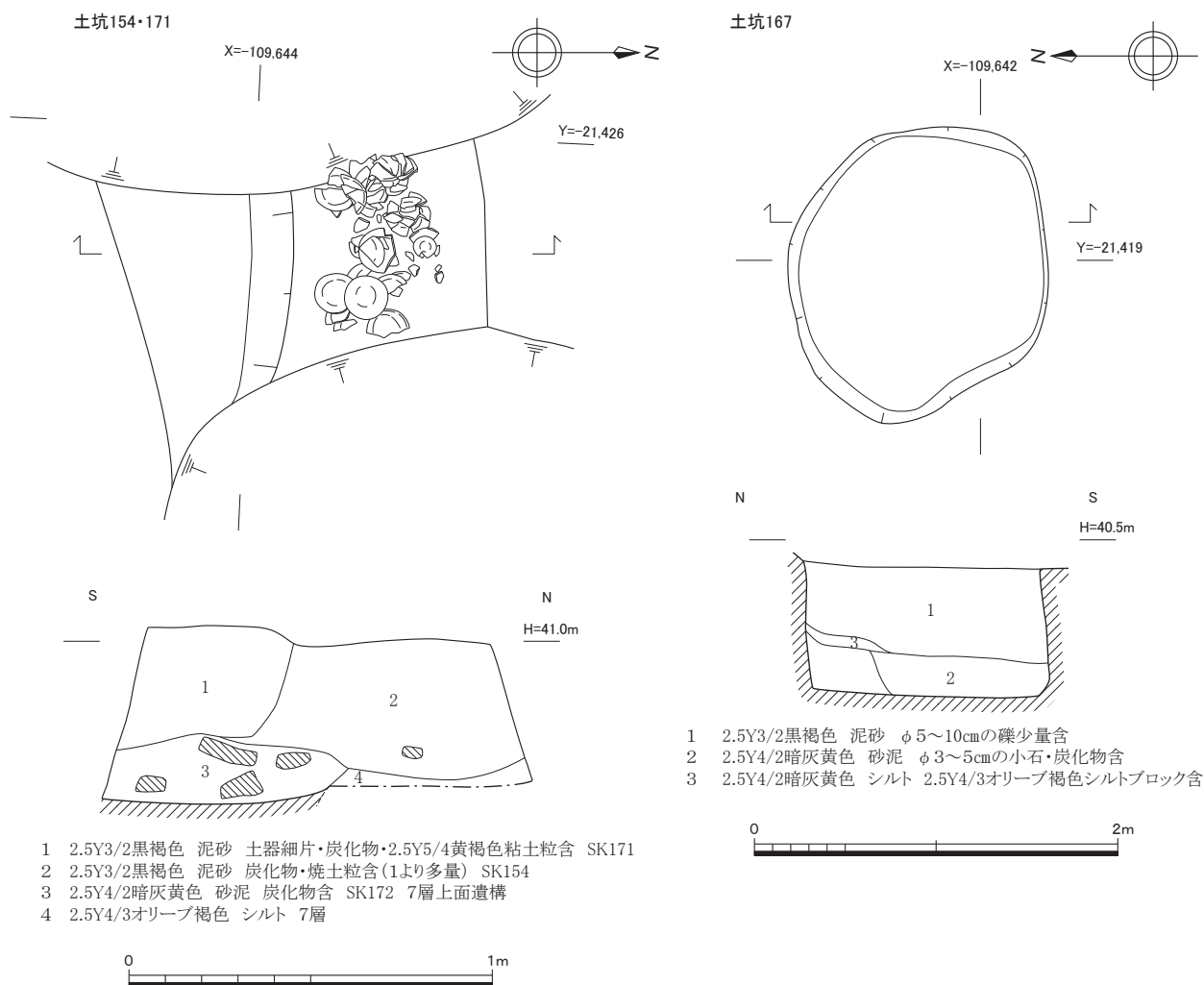


図 14 土坑 154・171・167 平面・断面図 (土坑 154・171 1:20、土坑 167 1:40)

底面の標高は 39.80 m 付近であり他の井戸と比べて浅いことから土坑としている。埋土は上位から拳大の礫を少量含む黒褐色砂泥、暗灰黄色砂泥である。遺物は 6 B 段階の土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑 425

西区 2 E・3 E 地区で検出した土坑である。調査区南西隅部で遺構の北東部を検出している。大部分を井戸 398 に切られる。肩口からほぼ垂直に掘り込まれ、検出面から 0.5 m 程掘り下げたが安全面から完掘はできず、底面は検出できていない。遺物は 6 B 段階の土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、瓦、石製品が出土した。

土坑 355 (図 13)

西区 3 C・4 C・3 D・4 D 地区で検出した土坑である。後世の遺構・柱状改良・攪乱により遺構の北・南西・南東隅部を切られている。平面形は幅 2.5 m の方形を呈する。検出面からの深さは 0.34 m を測り、底面は平坦である。土坑の西部で 13 世紀代の青磁皿が 3 枚重なった状態で出土した。土坑の埋没時に埋納された可能性がある。埋土は炭化物が混入する黒褐色砂泥である。遺物は上述の青磁の他、6 B 段階の土師器が多く出土した。

土取穴

東西両区の北半では、7 層オリーブ褐色シルトを掘り込む土取穴と考えられる土坑が多く切合う。大半は、平面形が不正円形もしくは不正方形を呈し、底面は中央付近が窪む。時期は鎌倉時代～室町時代にわたり、7 C 段階に属するものが最も多い。

(3) 第 3 面 (7 層上面 図版 8)

第 3 面では平安時代の遺構を検出した。東区は中世以降の攪乱により 7 層が広い範囲で削り取られるが、西区では東区に比べ攪乱が少ない状況であり 7 層の残存が比較的良好であった。西区では柱穴を多数検出し、東区東端で推定富小路西側溝を検出した。検出遺構の時期は 4 B～5 A 段階に属する遺構が中心であるが、3 期に属する遺構も少数検出している。

〔柱穴等〕

西区では多くの柱穴を検出している。柱穴掘方は径 0.3 m 前後で円形を呈するものが中心である。東区では 7 層の残りが良好な 6 D・6 E 地区で平面円形を呈する柱穴状の遺構を複数検出したが、いずれも深さは西区の柱穴とは異なり 0.05 m 前後であった。柱穴の時期は、出土遺物から平安時代後期と判断される。4 B～C 段階に属するものが中心で、5 A～B 段階に属するものはやや少ない。複数の掘立柱建物や柵等が想定されるが、後世の遺構や柱状改良による攪乱の為、明確な建物等は復元できなかった。柱穴 554 は、柱痕から土師器皿が完形に近い形で出土しており、埋納されたものの可能性がある (図 16)。

〔溝〕

溝 178 (図 15)

東区 8 C・9 C・8 D・9 D 地区で検出した推定富小路西側溝である。調査区北端及び南半部

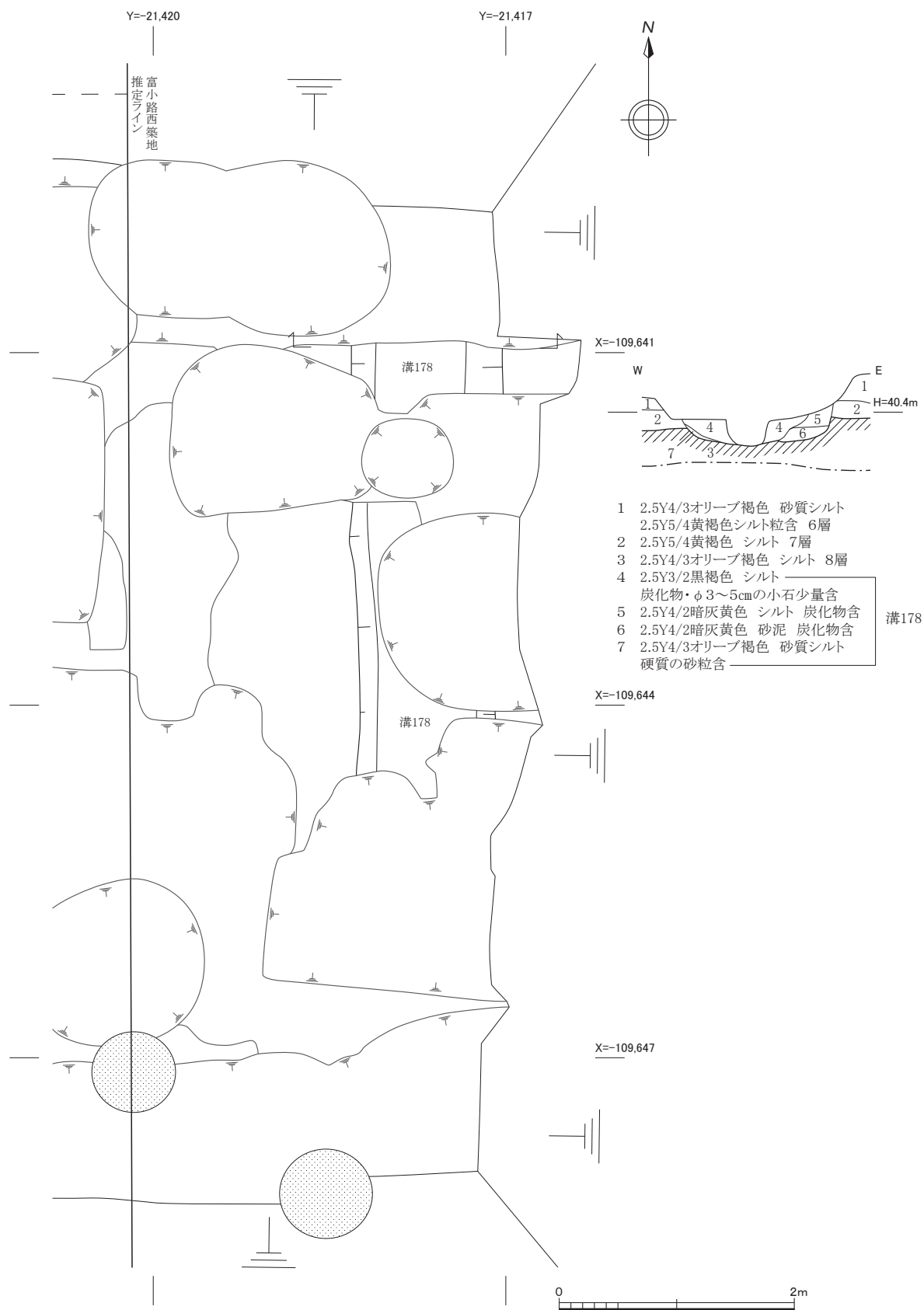


図15 溝178平面・断面図（1：50）

では後世の遺構に切られ消失する。検出長 3.85 m、幅 1.27 m、深さ 0.38 mを測る。断面形は箱型を呈し、底面付近は丸みを持つ。埋土は黒褐色シルト、暗灰黄色シルト、暗灰黄色砂泥である。遺物は、土師器、須恵器等が出土したが、細片であり詳細な時期は判断しづらい。

溝 178 の埋没時期について、出土遺物からの推定は困難であるが、6 B 段階の土坑との切合い関係から鎌倉時代初頭までには埋没した可能性が高いと考えられる。

〔土坑〕

土坑 189 (図 13)

東区 6 B・7 B・6 C・7 C 地区で検出した土坑である。後世の遺構により切られるため、規模は不明である。検出面からの深さは 0.55 m を測る。断面形は播鉢状に底面が窪む。埋土は上位から暗灰黄色砂泥、オリーブ褐色砂泥で埋土には炭化物や焼土粒が混入する。遺物は 5 A 段階の土師器、須恵器、白色土器、瓦とともに 9～10 世紀の緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。

土坑 510

西区 5 B・5 C 地区で検出した土坑である。北側を土坑 515 に切られる。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、検出長 1.05 m、幅 0.78 m を測る。検出面からの深さは 0.34 m を測り、断面は底面付近が丸みを帯びわずかに窪む。埋土は暗灰黄色砂泥、黒褐色砂泥で炭化物・焼土粒が混入する。遺物は 5 A 段階の土師器とともに 9～10 世紀の緑釉陶器や黒色土器が出土した。

土坑 560

西区 4 E・5 E 地区で検出した土坑である。径 0.76 m の円形を呈し、検出面からの深さは 0.35 m を測る。埋土は暗灰黄色砂泥で炭化物が混入する。遺物は 5 A 段階の土師器が出土した。

土坑 542

西区 3 A・4 A 地区で検出した土坑である。南側の一部を攪乱に切られ、北側は調査区外に延びる。検出幅 1.08 m で、検出面からの深さは 0.56 m を測る。埋土は炭化物・7 層土粒が混入する暗灰黄色砂泥である。遺物は 5 A 段階の土師器とともに 9～10 世紀の須恵器、緑釉陶器、黒色土器が出土した。

土坑 520 (図 16)

西区 5 B 地区で検出した土坑である。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、長さ 0.56 m、幅 0.52 m を測る。検出面からの深さは 0.38 m を測り、箱型に掘り込まれる。土坑内から 4 B 段階の土師器皿 A・N が多量に重なった状態で出土した。出土した土師器は完形品や完形に近い状態のものが多く、埋納されたものとする。

土坑 190 (図 13)

東区 7 C 地区で検出した土坑である。南半を石組 135 に切られる。長さ 0.32 m、深さ 0.25 m を測る。柱穴の可能性もあるが、周囲に同時期の柱穴は確認できない。埋土は灰黄褐色泥砂である。遺物は 3 B 段階に属する土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。

土坑 547

西区 4 A・4 B 地区で検出した土坑である。後世の遺構や攪乱に遺構の西側を切られ、北側は

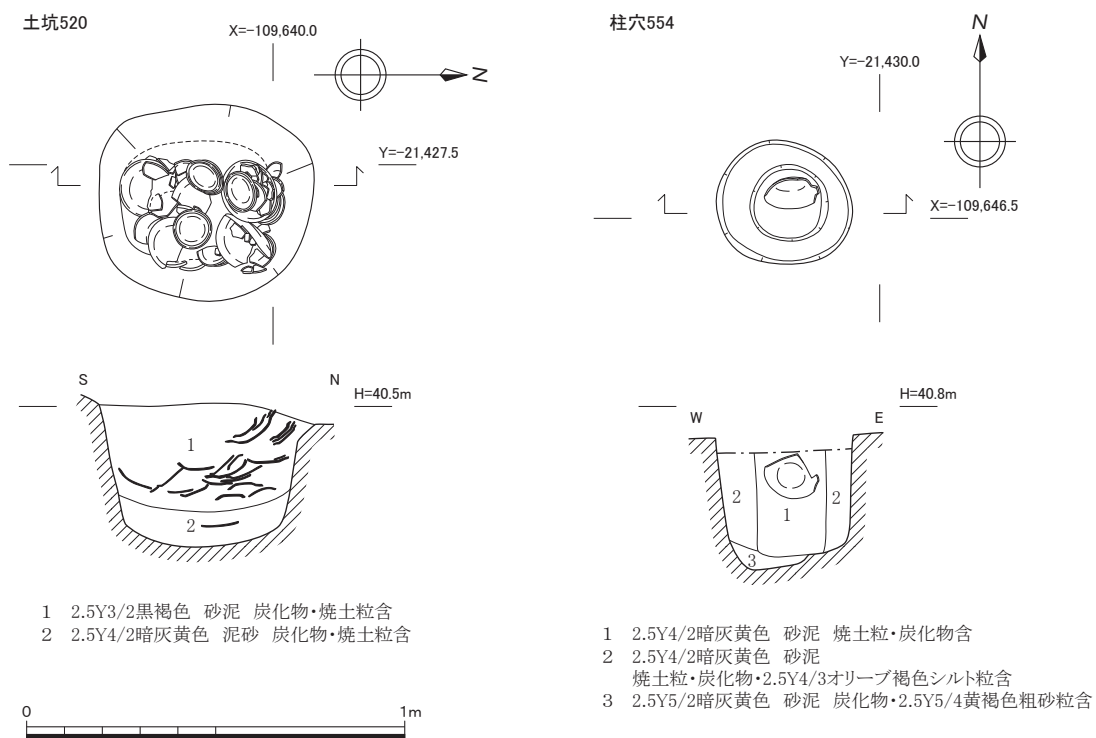


図16 土坑520、柱穴554平面・断面図（1：20）

調査区外に延びるため、規模は不明である。深さは検出面より 0.32 mを測り、底面は挿鉢状に窪む。埋土は上位から炭化物・焼土粒を含む暗灰黄色泥砂、炭化物・7層土粒を含む暗灰黄色砂泥である。遺物は3 A段階に属する土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。

（1） 柏田有香「平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡」 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2010 年

3 出土遺物

今回の調査では、コンテナ 97 箱分の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、鑄造関連資料、石製品等がある。遺物の時期は平安時代～江戸時代までに及ぶ。平安時代以前の遺物は、今回の調査では出土していない。江戸時代後半以降の遺物が最も多く、全体の半数近くを数える。次いで江戸時代前半の遺物が多く、鎌倉時代、平安時代の遺物も一定数出土しているが、室町時代の遺物は他時期に比べ少数である。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、軒瓦、丸瓦、平瓦		土師器 63 点、須恵器 2 点、黒色土器 2 点、緑釉陶器 7 点、緑灰釉陶器 2 点、白色土器 6 点、白磁 3 点、軒丸瓦 1 点、軒平瓦 5 点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、青磁・白磁・焼締陶器、軒瓦、丸瓦、平瓦、石製品		土師器 49 点、須恵器 6 点、青磁 6 点、白磁 1 点、青白磁 1 点、瓦器 6 点、瓦質土器 1 点、焼締陶器 3 点、軒丸瓦 1 点、石製品 1 点		
室町時代	土師器、須恵器、青磁、白磁、焼締陶器、瓦質土器、瓦		土師器 5 点、須恵器 1 点、青磁 1 点、白磁 1 点、瓦器 1 点、瓦質土器 1 点、施釉陶器 1 点		
安土桃山～江戸時代	土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、瓦質土器、土製品、棧瓦、金属製品、貝		土師器 30 点、施釉陶器 21 点、焼締陶器 7 点、瓦質土器 6 点、染付 17 点、国産磁器 2 点、軒丸瓦 1 点、金属製品 1 点、埴塼 2 点、石製品 1 点		
合計		107 箱	271 点 (10 箱)		97 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で遺物の抽出を行い 10 箱増加した。

(1) 土器・陶磁器類

a 平安時代

土坑 547 (図 17 1～13)

土師器 (1～9)、須恵器 (13)、黒色土器 (10・11)、緑釉陶器 (12) がある。

土師器は皿 A (1～3)、椀 A (4)、杯 A L (5・6)、高杯 (7・8)、甕 (9) がある。皿 A は口縁部が屈曲気味に外反し、端部は上方に丸く収める。1・2 は口径 13.7 cm、器高 2.0 cm であり、3 は口径 15.0 cm、器高 1.6 cm である。椀 A は口径 14.3 cm、器高 2.8 cm。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は屈曲し端部は上方に丸く収める。杯 A L は体部が直線的に外上方に立ち上がり、口縁部が屈曲する。口径はいずれも 18.8 cm。高杯は脚柱部 (7) と裾部 (8) がある。7 は心棒作りの脚柱部で 7 面に面取りをする。8 は直線的に外下方に開く裾部で端部が下方に肥厚する。甕は口縁部片である。口縁部が直線的に外上方に開き、端部は内面に肥厚する。

須恵器は鉢 (13) がある。底部に外方に肥厚する断面方形の高台を張り付ける。高台径 15.8 cm。体部外面に自然釉が付着する。

黒色土器は椀 (10)、杯 (11) がある。椀は断面三角形の高台が付く椀 B である。内面のみ黒色の A 類である。底部はやや丸みを持ち、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は緩く外反する。

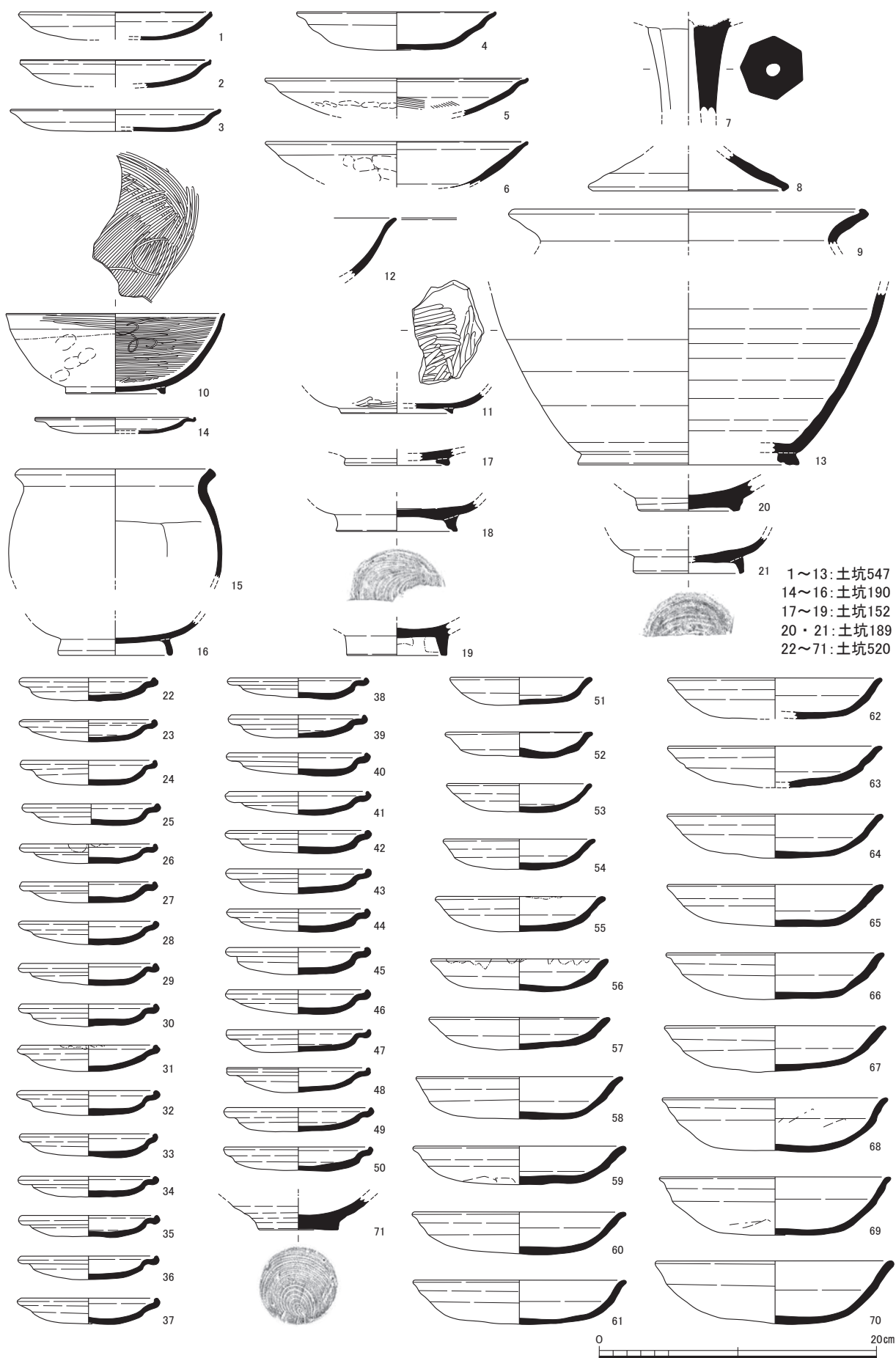


図17 出土遺物1 (平安時代 1 : 4)

内面及び口縁部外面にミガキを密に施し、口縁部内面に暗文を施す。杯は断面三角形の高台が付く杯Bである。内面のみ黒色のA類である。底部及び体部内面にミガキを密に施す。

緑釉陶器は碗（12）がある。口縁部片であり、口径は復元できなかった。浅黄色の釉薬を全面に施す。

土坑 547 出土遺物は、3 A 段階に属する。

土坑 190（図 17 14～16）

14 は土師器皿Aである。口径 11.4 cm、器高 1.2 cm。器壁は 2 mm 前後の厚さである。口縁部は外方に屈曲し、端部は上方につまみ上げる。15 は土師器甕である。口径 13.8 cm。口縁部は屈曲して外反し、端部は内面上方にわずかに肥厚する。16 は灰釉陶器碗底部である。高台径 8.2 cm。黒笹 90 号窯式。

土坑 190 の遺物は、3 B 段階に属する。

土坑 152（図 17 17～19）

17・18 は緑釉陶器底部である。17 は貼付け蛇の目高台で高台径 7.4 cm である。18 は近江産で高台径 8.6 cm。高台内側にナデによる段が付く。底部外面に糸切痕が残る。19 は白磁碗底部である。高台径 7.1 cm。

土坑 189（図 17 20・21）

20 は白色土器底部である。碗の底部か。背の低い断面方形の高台を削り出す。21 は灰釉陶器碗底部である。高台径 8.0 cm。釉薬は漬け掛けで、内面に自然釉が付着する。東山 72 号窯式。

土坑 520（図 17 22～71）

土坑内に埋納された一括資料である。土師器（22～70）、白色土器（71）がある。

土師器は、皿A（22～50）、皿N（51～70）がある。皿Aは口縁部が屈曲する「て」の字口縁の皿である。口径 9.4～10.4 cm、器高 1.5～1.8 cm であり、口径の幅は 1 cm 程度に収まる。26・31 の口縁部には煤が付着し、燈明皿であった可能性がある。皿Nは口縁部に 2 段ナデを施し、口縁端部は外反する。口径 10.0 cm 台のもの（51～54）、口径 11.8～12.8 cm のもの（55～57）、口径 14.8～16.9 cm のもの（58～70）の 3 種に口径が分布する。68～70 は器高が 3.9～4.6 cm と他に比べて深く、碗状を呈する。白色土器（71）は碗底部である。平高台の碗で、底部外面に糸切痕がある。

土坑 520 出土遺物は、4 B 段階に属する。

柱穴 522（図 18 72・73）

土師器（72）、白色土器（73）がある。土師器は皿Aである。口径 9.6 cm、器高 1.4 cm。白色土器は高杯である。脚部と杯部の接合部に段を設ける。杯底部中央は幅 2.0 cm で約 7 mm 窪む。

柱穴 522 出土遺物は 4 C 段階に属する。

柱穴 464（図 18 74・75）

須恵器（74）、白磁（75）がある。須恵器は壺もしくは瓶子の底部である。底径 6.3 cm。白磁は輪花皿である。6 輪花か。口径 11.1 cm、底径 4.6 cm、器高 3.3 cm。底部は平底である。体部は中程

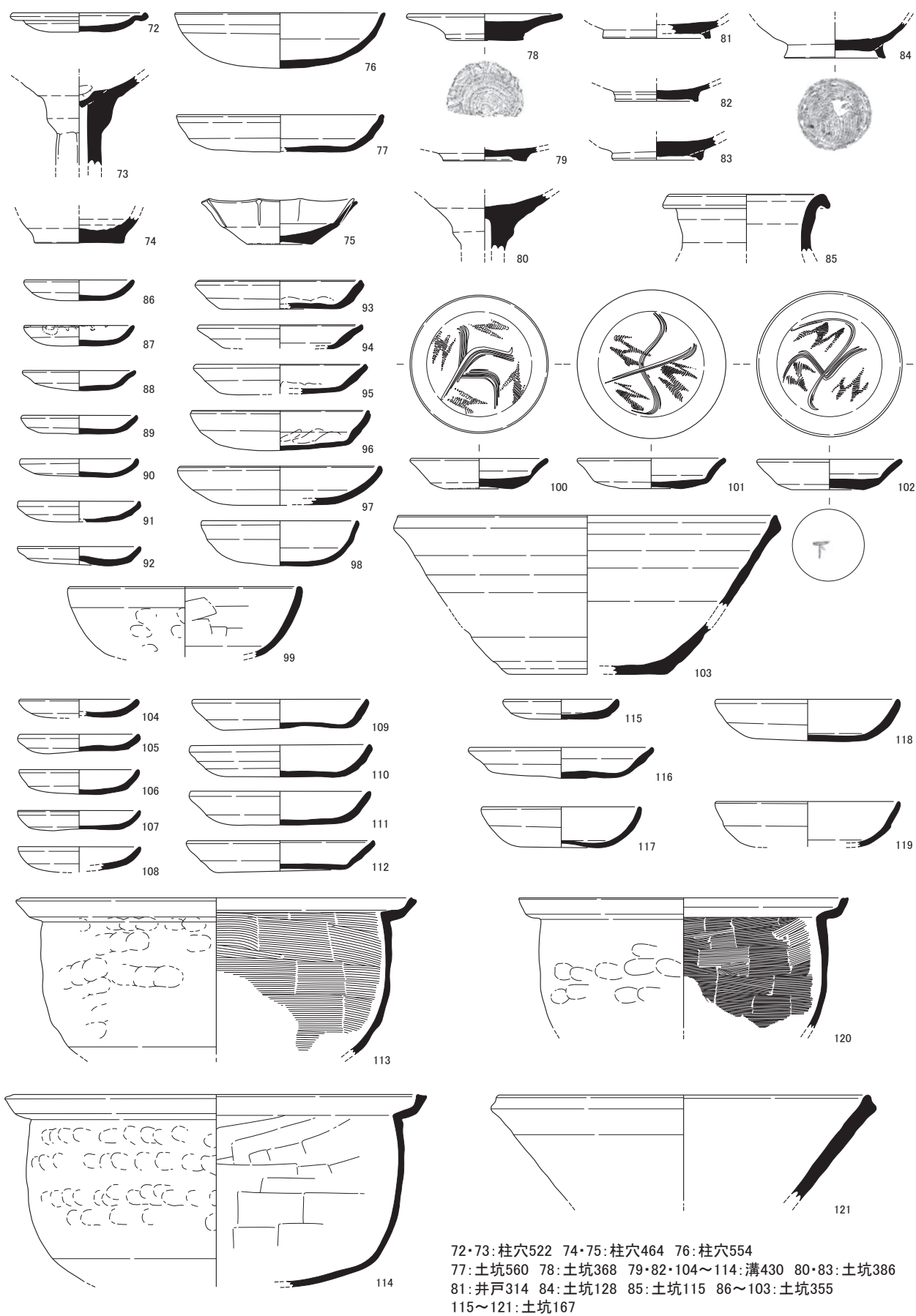


図18 出土遺物2（平安時代～鎌倉時代 1 : 4）

で屈曲し稜を持つ。口縁部は外反する。灰白色の胎土にややくすんだ灰白色の釉薬を施す。

柱穴 554 (図 18 76)

土師器皿 N がある。柱当たりからはほぼ完形の状態で出土した。口径 15.1 cm、器高 4.0 cm。口縁部に 2 段ナデを施し、口縁端部は僅かに外反する。4 C 段階に属する。

土坑 560 (図 18 77)

土師器皿 N がある。口径 14.7 cm、器高 2.7 cm。口縁部は 2 段ナデを施し上方に直立し、端部は僅かに外反する。5 A 段階に属する。

その他の遺構 (図 18 78～85)

中世以降の遺構に混入した平安時代の遺物を取り上げる。

78～80 は白色土器である。78 は平高台の皿である。底部に糸切痕がある。口径 11.0 cm、底径 5.6 cm、器高 2.0 cm。体部は外上方に低く立ち上がり、口縁端部は丸く収める。土坑 368 から出土。79 は椀もしくは皿底部である。幅広の削り出し高台で、高台径 6.2 cm。溝 430 から出土。80 は高杯である。脚部と杯部の接合部に段を設ける。土坑 386 から出土。

81～84 は緑釉陶器である。いずれも椀もしくは皿の底部である。81 は断面方形の高台を張り付ける東海産の緑釉陶器である。高台径 7.8 cm。井戸 314 から出土。82 は背の低い断面方形の高台を削り出す京都産の緑釉陶器である。高台径 6.0 cm。胎土は硬質で、全面に施釉の痕跡が残る。溝 430 から出土。83・84 は高台の内側に段を持つ近江産の緑釉陶器である。高台の形状は、83 は幅広で背が低く 84 は幅が狭くやや背が高い。高台径は、83 が 6.3 cm、84 が 7.2 cm。いずれも全面に濃緑色の釉薬が施される。83 は土坑 386 出土、84 は土坑 128 出土。85 は白磁の壺である。口径 11.0 cm。頸部は上方に立ち上がり、口縁部は緩く外反し端部は外下方に拡張する。土坑 115 出土。

b 鎌倉時代～室町時代

土坑 355 (図 18 86～103)

土師器 (86～98)、須恵器 (103)、瓦器 (99)、青磁 (100～102) がある。

土師器は皿 N (86～97) と皿 S (98) がある。皿 N は大小に区分され、86～92 が小型皿、93～97 が大型皿である。小型皿は口径 7.8～8.8 cm、器高 1.4～1.5 cm であり、口縁端部は上方に突出する。大型皿は口径 11.6～14.4 cm、器高 1.7～2.8 cm であり口径 12 cm 前後のものが中心である。口縁上端部は上方に突出し、断面は三角形を呈する。皿 S は口径 11.2 cm、器高 3.3 cm。灰白色の精良な胎土である。底部は平らで、口縁部は丸みを持ち立ち上がる。

須恵器は東播系の鉢がある。口縁部と底部は直接接合しないが、図上で復元した。口径 27.2 cm、底径 11.4 cm。口縁端部は上下方に拡張し断面三角形を呈する。

瓦器は鉢がある。口径 16.5 cm。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は丸く収める。体部外面はオサエ後ナデ調整、口縁部はナデ調整、体部内面は板ナデを施す。

青磁は皿がある。100～102 はいずれも龍泉窯産の皿である。3 枚重ねられた状態で出土した。口径 10.0 cm 前後、器高 2.2 cm であり、見込みに劃花文を施す。102 の底部には「下」の墨書がある。

土坑 355 出土遺物は、6 B 段階に属する。

溝 430 (図 18 104 ～ 114)

土師器 (104 ～ 112)、瓦器 (113・114) がある。

土師器は皿 N がある。大小があり、104 ～ 108 が小型皿、109 ～ 112 が大型皿である。小型皿は口径 8.4 ～ 8.8 cm、器高 1.3 ～ 1.8 cm であり、口縁端部は上方に突出する。大型皿は口径 12.5 ～ 13.4 cm、器高 2.1 ～ 2.4 cm であり、口縁端部は上方に突出し断面三角形を呈する。

瓦器は鍋がある。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して L 字状を呈し端部はナデにより窪みを持つ。113 は口径 28.3 cm。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整を施す。口縁部はナデで仕上げる。114 は口径 29.2 cm、器高 13.9 cm。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面は板ナデを施す。口縁部はナデ調整で仕上げる。

溝 430 出土遺物は、6 B 段階に属する。

土坑 167 (図 18 115 ～ 121)

土師器 (115 ～ 119)、須恵器 (121)、瓦器 (120) がある。

土師器は皿 N (115・116) と皿 S (117 ～ 119) がある。皿 N は口径 8.1 cm、器高 1.5 cm の小型皿 (115) と、口径 12.5 cm、器高 2.2 cm の大型皿 (116) がある。小型皿、大型皿共に口縁端部は上方に突出し、断面三角形を呈する。皿 S は、117 が口径 11.3 cm であり、118・119 が口径 13.1 ～ 13.2 cm である。器高はいずれも 3.0 cm 程度である。底部は平らで、口縁部は丸みを持って立ち上がり端部は上方で丸く収める。

須恵器は東播系の鉢である。口径 26.4 cm。口縁端部は上方に拡張し、ナデ調整により窪む。

瓦器は鍋がある。口径 23.6 cm。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して L 字状を呈し端部に面を持つ。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整を施す。口縁部はナデ調整で仕上げる。

土坑 167 出土遺物は、6 B 段階に属する。

土坑 156 (図 19 122 ～ 126)

土師器 (122 ～ 124)、須恵器 (126)、白磁 (125) がある。

土師器は皿 N (122・123) と皿 S (124) がある。皿 N は口径 7.6 cm、器高 1.3 cm の小型皿 (122) と、口径 10.8 cm、器高 1.7 cm の大型皿 (123) がある。大型皿は口縁部が屈曲して立ち上がり端部は上方にやや突出し丸く収める。皿 S は口径 11.9 cm、器高 2.8 cm。口縁部は開き気味に立ち上がる。灰白色を呈し精良な胎土である。

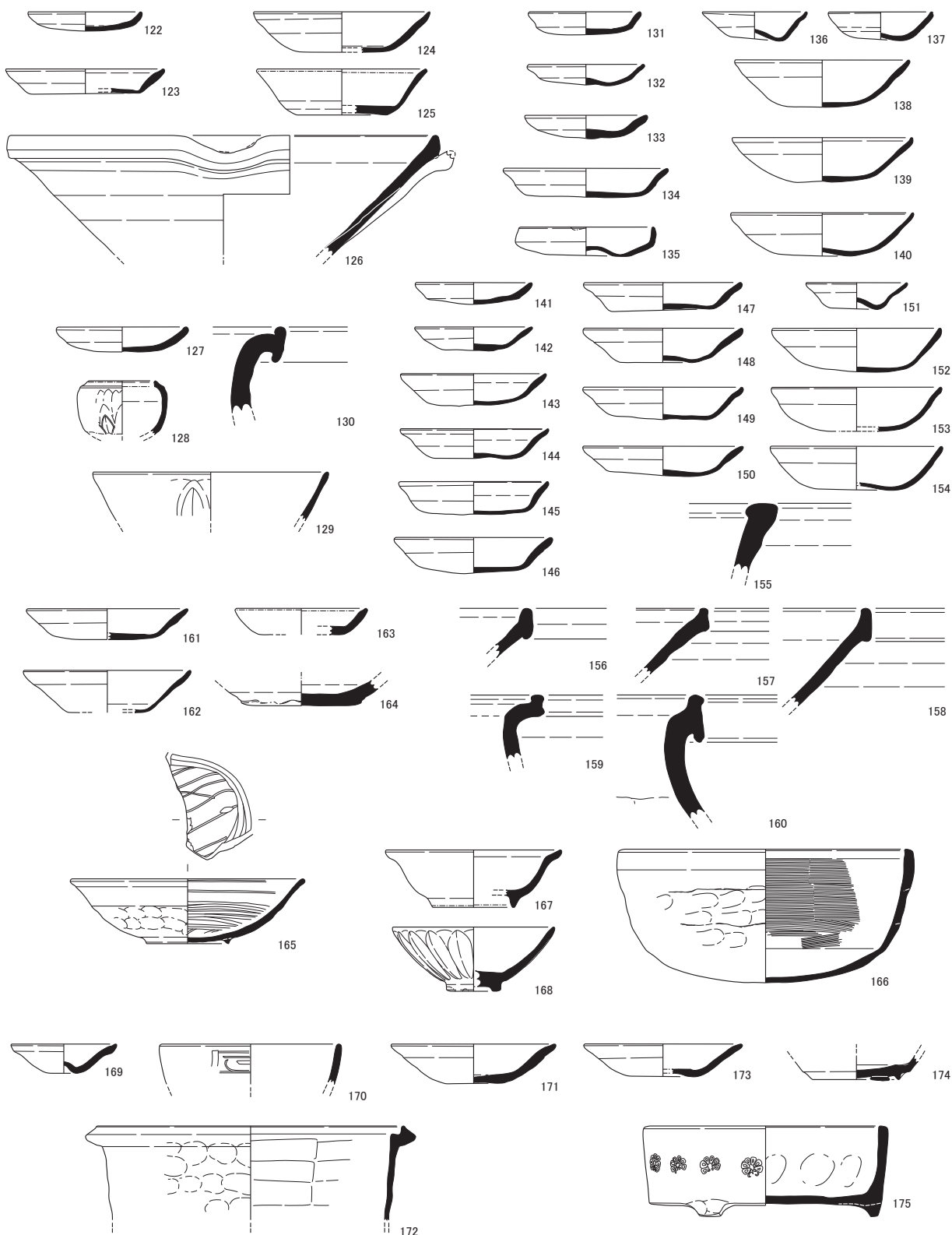
須恵器は東播系の片口鉢である。口径 28.8 cm。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は上下方に拡張する。

白磁は皿がある。口径 11.4 cm、底径 6.2 cm、器高 3.1 cm。平底で口縁端部が露胎となる口禿の皿である。

土坑 156 出土遺物は、7 B 段階に属する。

井戸 551 (図 19 127 ～ 130)

土師器 (127)、青白磁 (128)、青磁 (129)、焼締陶器 (130) がある。



122～126: 土坑156 127～130: 井戸551 131～140: 土坑360
 141～155: 土坑154 156～160: 井戸398 161～165: 土坑368
 166: 土坑375 167: 土坑301 168: 5層 169・170: 井戸180
 171: 土坑158 172: 土坑386 173～175: 土坑397

図19 出土遺物3 (鎌倉時代～室町時代 1:4)

土師器は皿Nがある。口径 8.8 cm、器高 1.7 cmの小型皿である。

青白磁は合子がある。体部は直線的に上方に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁端部は上方に拡張し、蓋の受部を作る。体部外面は3段の鎬蓮弁文を施す。

青磁は碗である。口径 15.8 cm。体部外面に鎬蓮弁文を施す。釉薬は明オリーブ色を呈する。

焼締陶器は常滑の甕がある。口縁端部が上下に拡張するN字型口縁の甕である。口径は復元でできなかった。

井戸 551 出土遺物は、7 B段階に属する。

土坑 360 (図 19 131 ~ 140)

土師器皿N (131 ~ 134)、皿S h (136)、皿S (137 ~ 140)、皿 (135) がある。皿Nは口径 7.5 ~ 8.2 cm、器高 1.4 ~ 1.6 cmの小型皿 (131 ~ 133) と口径 11.0 cm、器高 2.0 cmの大型皿 (134) がある。大型皿は口縁部が外反し、端部は丸く収める。皿S hは口径 7.1 cm、器高 2.0 cm。底部が 7 mm程度上方に突出する。口縁部はナデによりやや外反し、端部は上方で丸く収める。灰白色を呈し精良な胎土である。皿Sは口径 7.0 cm、器高 2.0 cmの小型皿 (137) と、口径 11.8 ~ 12.3 cm、器高 2.9 ~ 3.2 cmの大型皿 (138・139) がある。器壁は 3 mm程度であり、土坑 156 出土の皿Sと比べて薄い。灰白色を呈し精良な胎土である。135は皿A cの様な形状の皿である。口径 9.0 cm、器高 2.0 cm。皿Sと同様の灰白色を呈し精良な胎土である。

土坑 360 出土遺物は、7 B ~ C段階に属する。

土坑 154 (図 19 141 ~ 155)

土師器 (141 ~ 154)、瓦質土器 (155) がある。

土師器は皿N (141 ~ 150)、皿S h (151)、皿S (152 ~ 154) がある。皿Nは口径 7.8 cm、器高 1.5 ~ 1.6 cmの小型皿 (141・142) と、口径 9.8 ~ 10.9 cm、器高 2.0 ~ 2.5 cmの大型皿 (143 ~ 150) がある。口縁部はナデにより外反し、端部は上方で丸く収める。皿S hは口径 6.8 cm、器高 1.9 cm。底部が 7 mm程度上方に突出する。口縁部はナデにより外反する。灰白色を呈し精良な胎土である。皿Sは口径 11.4 ~ 11.6 cm、器高 3.0 cm。口縁部は丸みを持って立ち上がる。灰白色を呈し精良な胎土である。

瓦質土器は鉢がある。口径は復元できなかった。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚し上端に面を持つ。

土坑 154 出土遺物は、7 B ~ C段階に属する。

井戸 398 (図 19 156 ~ 160)

須恵器 (156 ~ 158)、焼締陶器 (159・160) がある。

須恵器は東播系の鉢である。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部が上下方に拡張する。

焼締陶器は常滑の甕がある。159は口縁部が屈曲して外反し、端部は上方に拡張する。160は口縁端部が上下方に拡張するN字型口縁である。

井戸 398 出土の須恵器、焼締陶器は、7期の土師器と共伴するものである。

土坑 368 (図 19 161 ~ 165)

土師器 (161・162)、須恵器 (164)、白磁 (163)、瓦器 (165) がある。

土師器は皿 N (161)、皿 S (162) がある。皿 N は口径 10.9 cm、器高 2.1 cm。口縁部は緩く外反し、端部は丸く収める。皿 S は口径 11.3 cm、器高 2.9 cm。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、端部は丸く収める。灰白色を呈する精良な胎土である。

須恵器は鉢底部である。底径 8.2 cm。東播系の鉢で、底部内面は使用により平滑である。

白磁は皿がある。口径 8.8 cm、器高 1.8 cm。平底で口縁端部が露胎の口禿皿である。

瓦器は椀がある。和泉型椀で、底部に断面三角形の高台を張り付ける。体部内面に横方向のミガキを施し、底部内面に並行のミガキを施す。6 期の遺物が混入したものと考えられる。

土坑 368 出土遺物は、土師器皿 S の口縁部が直線的に開く形状から 8 A 段階に属すると考える。

土坑 375 (図 19 166)

166 は瓦器の鉢である。口径 19.0 cm、器高 9.1 cm。底部はやや丸みを持ち、体部は直線的に上方に立ち上がる。口縁端部は上端に面を持つ。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整を施す。口縁部はナデで仕上げる。

土坑 301 (図 19 167)

167 は青磁椀である。口径 12.0 cm、高台径 10.9 cm、器高 4.0 cm。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。全面に明緑灰色の釉薬を施し、高台接地面の釉薬を剥ぐ。

5 層 (図 19 168)

168 は青磁椀である。口径 10.9 cm、高台径 3.2 cm、器高 4.4 cm。幅広で背の低い角高台を削り出す。体部外面に鎬蓮弁文を施す。椀内面及び体部外面にやや暗い青灰色の釉薬を施し、高台内側は露胎である。

井戸 180 (図 19 169・170)

土師器 (169)、青磁 (170) がある。

土師器は皿 S h である。口径 7.1 cm、器高 2.0 cm。口縁部は外反し、端部は外上方に突出する。

青磁は椀である。口径 12.0 cm。口縁部外面に雷文を施す。明緑灰色の釉薬を施す。

井戸 180 出土遺物は、9 B ~ C 段階に属する。

土坑 158 (図 19 171)

171 は土師器皿 S である。口径 11.2 cm、器高 2.7 cm。器壁は 6 mm 程の厚さである。口縁部は屈曲気味に外反し、端部は丸く収める。10 A 段階に属する。

土坑 386 (図 19 172)

172 は瓦器鍋である。口径 20.5 cm。口縁部の張り出しは平らで、端部は尖り断面三角形を呈する。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面は板ナデを施す。口縁部はナデで仕上げる。7 C ~ 8 A 段階に属する。

土坑 397 (図 19 173 ~ 175)

土師器 (173)、古瀬戸 (174)、瓦質土器 (175) がある。

土師器は皿Sである。口径10.6 cm、器高2.2 cm。口縁部立ち上がりの内面がナデにより僅かに窪む。胎土は褐色系を呈し精良である。

古瀬戸は皿底部である。高台径5.8 cm。灰釉を施す。底部外面には重ね焼き時のトチンが一部融着する。

瓦質土器は鉢である。口径15.5 cm、器高6.2 cm。底部の3箇所を脚を貼り付ける。体部外面に菊のスタンプが6箇所残る。

土坑398出土遺物は、10 A段階に属する。

c 安土桃山時代～江戸時代

石組135 (図20 176～178)

土師器(176・177)、施釉陶器(178)がある。これらは石組内から出土した。

土師器は皿Sである。法量は176が口径9.8 cm、器高2.4 cmであり、177が口径12.1 cm、器高2.0 cmである。内面に凹線状の圏線が巡る。

施釉陶器は壺の底部である。体部内外面に黒釉を施す。

石組135出土遺物は、11 A段階に属する。

土坑8 (図20 179～182)

土師器(179・180)、瓦質土器(181)、施釉陶器(182)がある。

土師器は皿Sである。法量は、179が口径9.6 cm、器高1.9 cm、180が口径11.4 cm、器高2.1 cmである。底部内面に圏線が巡る。

瓦質土器は鉢である。口径11.8 cm、器高5.6 cm。底部の3箇所を脚が張り付けられる。体部外面に菊文を6箇所押捺する。10期の混入遺物か。

施釉陶器は織部の向付である。舟形を呈する。型押しで成形され、内面に布目が残る。底部に環足が3個付く。口縁部外面に草文、口縁部内面に花文、見込みに草花文を描き、織部釉と透明釉を掛け分ける。

土坑8出土遺物は、11 A段階に属する。

土坑115 (図20 183～208)

土師器(183～188)、施釉陶器(189～197)、染付(198～201)、瓦質土器(202～205)、焼締陶器(206～208)がある。

土師器は皿N(183・184)と皿S(185～187)、鍋(188)がある。皿Nは口径5.7～5.8 cm、器高1.3 cm。皿Sは口径10.6～11.2 cm、器高2.2～2.4 cm。底部内面に凹線状の圏線が巡る。鍋は口径26.0 cm。体部は丸みを持ち、口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上方に肥厚し、上端に面を持つ。体部外面はオサエの指頭痕が残り、内面はハケ調整を施す。外面に使用による煤が付着する。

施釉陶器は、京焼(189)、瀬戸美濃系(190・191)唐津(192～197)がある。京焼は碗がある。貼付け高台で、口径13.6 cm、高台径5.0 cm、器高6.5 cm。胎土は軟質で灰白色を呈し、全体に緑釉を施す。瀬戸美濃系は瀬戸天目茶碗(190)と志野碗(191)がある。190は口径11.2 cm、高台径4.6 cm、器高7.0 cm。内面及び体部外面に黒釉を施す。191は口径10.1 cm、高台径4.6 cm、器高

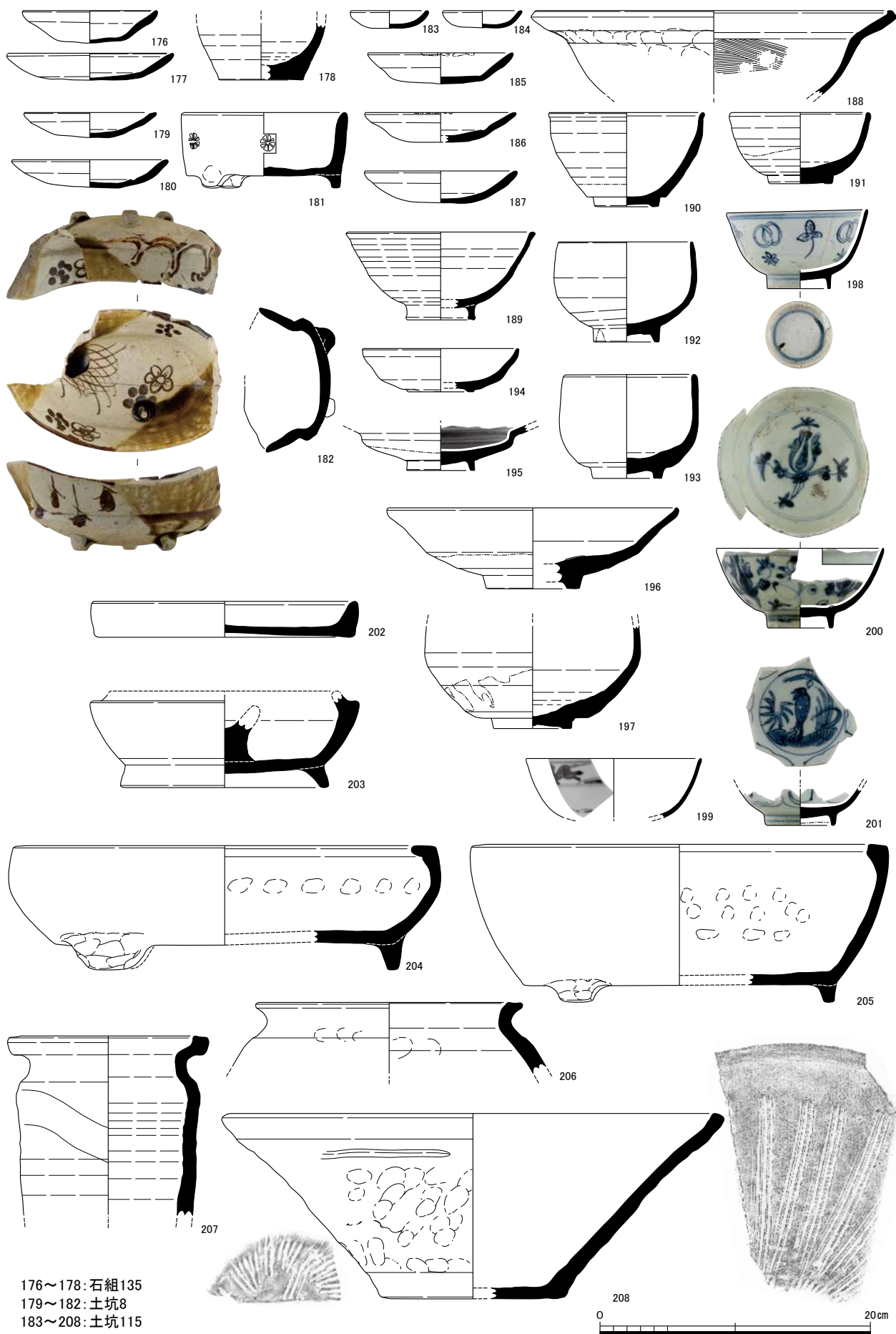


図20 出土遺物4（安土桃山時代～江戸時代前半 1：4）

5.3 cm。ロクロで成形し、背の低い高台を削り出す。胎土は軟質で灰白色を呈し、灰白色の釉薬を施す。唐津は碗（192・193）、皿（194～196）、鉢（197）がある。いずれも削り出し高台である。碗はいずれも丸碗で腰の張るタイプである。灰釉を施す。192 は口径 9.8 cm、高台径 4.8 cm、器高 7.4 cm。193 は口径 9.5 cm、高台径 5.0 cm、器高 7.7 cm。皿は小型皿（194・195）と大皿（196）がある。194 は口径 11.4 cm、高台径 4.8 cm、器高 3.2 cm。体部は丸みを持ち口縁部は上方で丸く収める。灰釉を施す。195 は幅の狭い高台を削り出し、高台径 5.0 cm。口縁部は 2 箇所屈曲して外反する。灰色の釉薬を施し、内面に鉄絵で円を重圈文状に描く。196 は口径 21.3 cm、高台径 6.8 cm、器高 6.0 cm。体部は中程で屈曲し稜を持ち、口縁部は直線的に外上方に延び端部はナデにより上方に突出する。灰釉を漬け掛けする。見込みに 1 箇所、高台接地面に 2 箇所砂目が残る。鉢は体部が袋状に立ち上がる。高台径 6.8 cm。灰釉を施す。見込みに重ね焼きの目跡が 3 箇所残る。

染付は肥前産（198）と明染付（199～201）がある。198 は肥前産の染付碗である。口径 10.4 cm、器高 5.9 cm。体部外面に連環、草花文を描く。明染付は碗がある。199 は口径 12.9 cm。体部外面に動物が描かれる。200 は口径 12.3 cm、高台径 4.8 cm、器高 5.9 cm。外面に草花文、口縁部内面に二重の圈線、見込みに二重の圈線と草花文を描く。201 は高台径 5.0 cm。見込みに鳥と草花文を描く。

瓦質土器は盤（202）、瓦燈（203）、火鉢（204・205）がある。盤は口径 19.4 cm、器高 2.7 cm。円盤状の底部に体部を貼付け、ナデで仕上げる。底部外面は未調整であることから蓋ではなく盤と考えた。瓦燈は底部に外傾する高台を貼付け、内部に燈明皿受を付ける。口縁部内面にかえりを付ける。高台径 15.0 cm。火鉢は 2 個体あり、いずれも底部に 3 個の脚を貼り付ける。204 は口径 31.0 cm、器高 9.2 cm。底部は平らで体部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚し上端に面を持つ。205 は口径 30.8 cm、器高 11.7 cm。底部は平らで、体部は外上方に立ち上がり口縁部は内傾する。口縁端部は内側に肥厚し、上端に面を持つ。

焼締陶器は信楽壺（206）、備前花入（207）、丹波播鉢（208）がある。信楽壺は口径 17.6 cm。口縁部は短く外反し、端部は外側に肥厚する。胎土は赤みがかった橙色を呈する。備前花入は口径 14.2 cm としているが、口縁部の歪によりやや精度を欠く。体部は直線的に上方に立ち上がり、頸部は内外に屈曲し、口縁端部は断面方形を呈する。丹波播鉢は口径 35.8 cm、底径 12.6 cm、器高 13.7 cm。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は緩く丸みを帯びる。内面に 4 条単位の播目を施す。

土坑 115 出土遺物は、11 A～B 段階に属する。

土坑 111（図 21 209・210）

土師器（209）、施釉陶器（210）がある。

土師器は皿 S である。口径 12.9 cm、器高 2.3 cm。底部内面に凹線状の圈線が巡る。

施釉陶器は唐津皿である。大型の皿と考えられ、高台径 6.6 cm。削り出し高台である。内面に鉄絵で曲線を描く。見込みに 5 箇所砂目が付く。

土坑 111 出土遺物は、11 A～B 段階に属する。

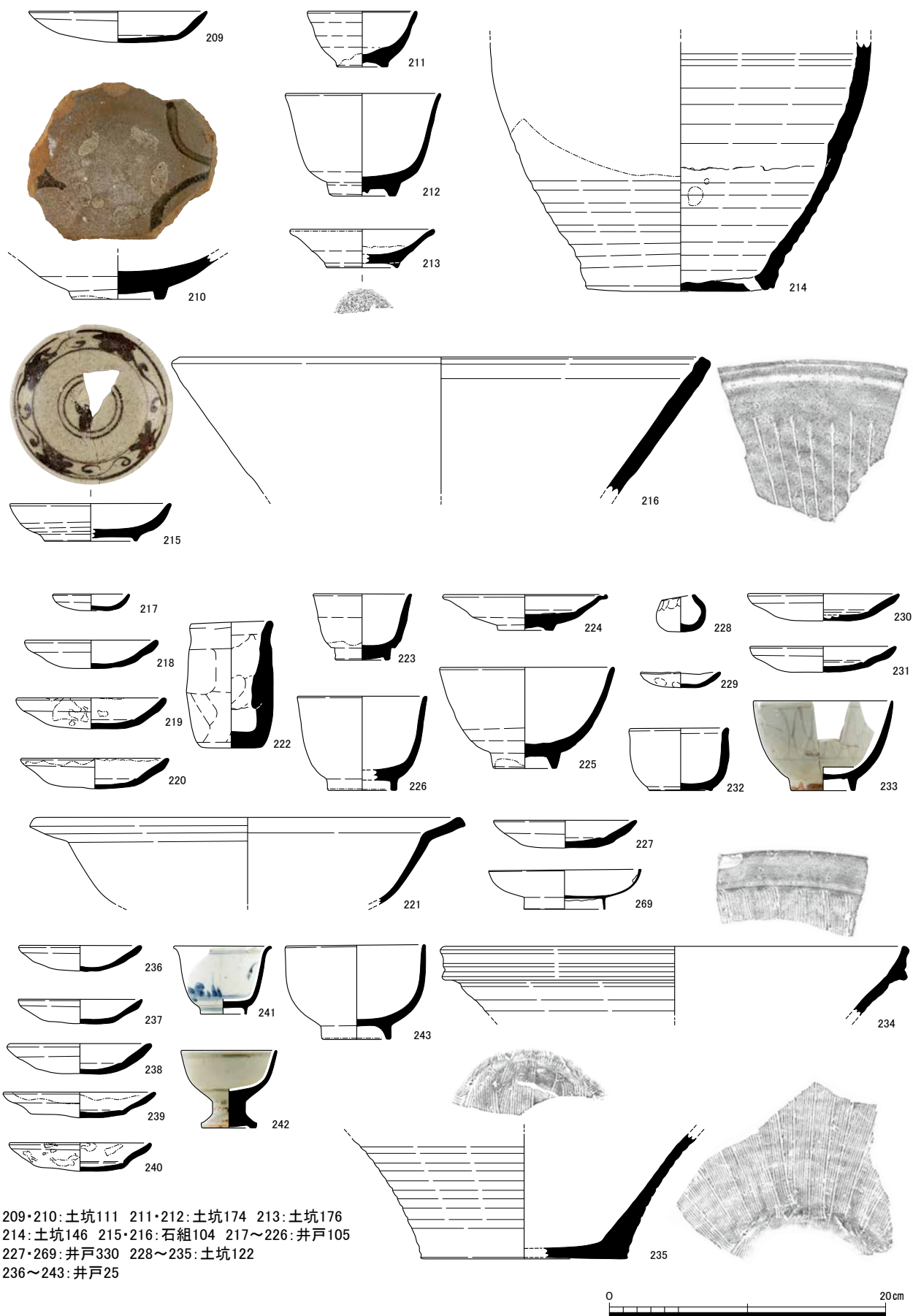


図21 出土遺物5（江戸時代 1：4）

土坑 174 (図 21 211・212)

施釉陶器があり、211は唐津碗、212は京焼と考えられる軟質施釉陶器碗である。211は口径7.8cm、高台径3.6cm、器高4.1cmの小型の碗である。削り出し高台で灰白色の釉薬を施す。212は口径11.1cm、底径4.5cm、器高7.4cm。ロクロで成形し、高台を削り出す。浅黄色の釉薬を施し、高台の接地面にはハナレ砂が付着する。

土坑 174 出土遺物は、11 A～B段階に属する。

土坑 176 (図 21 213)

213は焼締陶器皿である。口径10.2cm、高台径2.8cm、器高5.1cmの小型皿である。ロクロで成形し、底部糸切の後高台を貼り付ける。内面には重ね焼きの痕跡がある。

土坑 146 (図 21 214)

214は施釉陶器壺である。平底で、底径13.5cm。底部端の1箇所に径1.0cmの穿孔がある。胎土は硬質でオリブ灰色の釉薬を漬け掛けする。

石組 104 (図 21 215・216)

志野皿(215)、丹波播鉢(216)がある。志野皿は口径11.6cm、高台径6.6cm、器高2.8cm。灰白色の釉薬を施し、鉄絵で口縁部内面に2条の圏線間に蔓文、見込みに2条の圏線内に蔓を描く。丹波播鉢は口径37.8cm。口縁部内面が凹線状に窪み、上端部は面を持つ。内面に単線の播目を施す。

石組 104 出土遺物は、11 A～B段階に属する。

井戸 105 (図 21 217～226)

土師器(217～222)、施釉陶器(223～225)、国産磁器(226)がある。

土師器は皿N(217)、皿S b(218) 皿S(219・220)、鍋(221)、焼塩壺(222)がある。皿Nは口径5.5cm、器高1.2cm。皿S bは口径9.5cm、器高2.1cm。皿Sは口径10.6cm、器高2.2～2.3cm。底部内面に圏線が巡る。口縁部や体部に煤が付着することから、燈明皿として使用されたと考えられる。鍋は口径30.5cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は屈曲し上端部は面を持つ。体部外面に使用による煤が付着する。焼塩壺は口径5.8cm、底径4.3cm、器高9.2cm。円筒形を呈し、内面に布目は確認できない。

施釉陶器は、瀬戸碗(223)、唐津皿(224)、京焼碗(225)がある。瀬戸碗は口径7.1cm、高台径3.7cm、器高4.8cmの小型碗である。ロクロで成形し、高台を削り出す。浅黄色の釉薬を内面及び体部外面に施す。唐津碗は口径11.7cm、高台径4.0cm、器高2.6cm。口縁部は屈曲気味に外反し、端部は上方に突出する。ロクロで成形し、糸切り後高台を削り出す。灰黄色の釉薬を施す。見込みの3箇所、体部外面及び高台接地面の3箇所に重ね焼き時の砂目がある。京焼碗は口径12.5cm、高台径4.6cm、器高7.3cm。削り出し高台で明緑灰色の釉薬を施す。高台内は露胎である。

井戸 105 出土遺物は、11 B～C段階に属する。

井戸 330 (図 21 227)

227は土師器皿Sである。口径10.3cm、器高2.0cm。底部内面に圏線が巡る。口縁部に煤が付着することから、燈明皿の可能性はある。後述する銅製碗(269)の内面に重なった状態で出土した。

12 A段階に属する。

土坑 122 (図 21 228 ～ 235)

土師器 (228 ～ 231)、施釉陶器 (232)、染付 (233)、焼締陶器 (234・235) がある。

土師器は小型壺 (228)、皿 N (229)、皿 S (230・231) がある。小型壺は口径 2.4 cm、器高 2.7 cm。手づくねで成形し、口縁端部はナデで整える。皿 N は口径 5.8 cm、器高 1.1 cm。手づくねで成形し、ナデで調整する。皿 S は 230 が口径 11.0 cm、器高 2.0 cm、231 が口径 10.5 cm、器高 1.9 cm。底部はやや丸みを持ち、内面に V 字状の圈線が巡る。

施釉陶器は志野碗 (232) である。志野碗は口径 7.0 cm、高台径 4.6 cm、器高 4.6 cm。ロクロで成形し、背の低い高台を削り出す。内面及び体部外面に灰白色の釉薬を施し、釉薬には多くの貫入が入る。染付は碗 (233) である。くらわんか碗と呼ばれるもので、口径 10.0 cm、高台径 4.6 cm、器高 6.5 cm。高台が露胎で、表面は橙色化する。

焼締陶器は播鉢 (234・235) がある。234 は備前播鉢の口縁部である。口径 33.1 cm。口縁端部は上下に拡張し 3 段を呈する。体部内面に 7 本単位の播目を密に施す。235 は備前播鉢底部である。底径 14.8 cm。内面に 10 本単位の播目を密に施す。

土坑 122 出土遺物は、12 B 段階に属する。

井戸 25 (図 21 236 ～ 243)

土師器 (236 ～ 240)、染付 (241・242)、施釉陶器 (243) がある。

土師器は皿 S b (236・237)、皿 S (238 ～ 240) がある。皿 S b は口径 8.8 ～ 8.9 cm、器高 1.8 ～ 1.9 cm。皿 S は口径 10.2 ～ 10.8 cm、器高 1.9 ～ 2.2 cm。底部はやや丸みを持ち、内面に V 字状の圈線が巡る。239・240 には煤が付着することから、燈明皿として使用された可能性がある。

染付はいずれも肥前産で碗 (241)、仏飯碗 (242) がある。碗は口径 6.8 cm、高台径 3.3 cm、器高 4.9 cm の小型碗である。口縁部外面と高台に二重の圈線を描き、体部外面に抽象化された風景を描く。仏飯碗は口径 6.8 cm、高台径 3.8 cm、器高 5.6 cm。ロクロ成形で、糸切り後に高台を削り出す。高台接地面に糸切痕が残る。

施釉陶器は京都産の碗 (243) がある。口径 9.9 cm、高台径 5.0 cm、器高 6.9 cm。削り出し高台である。淡黄色の釉薬を全面に施し、高台の接地面は釉薬を剥ぐ。

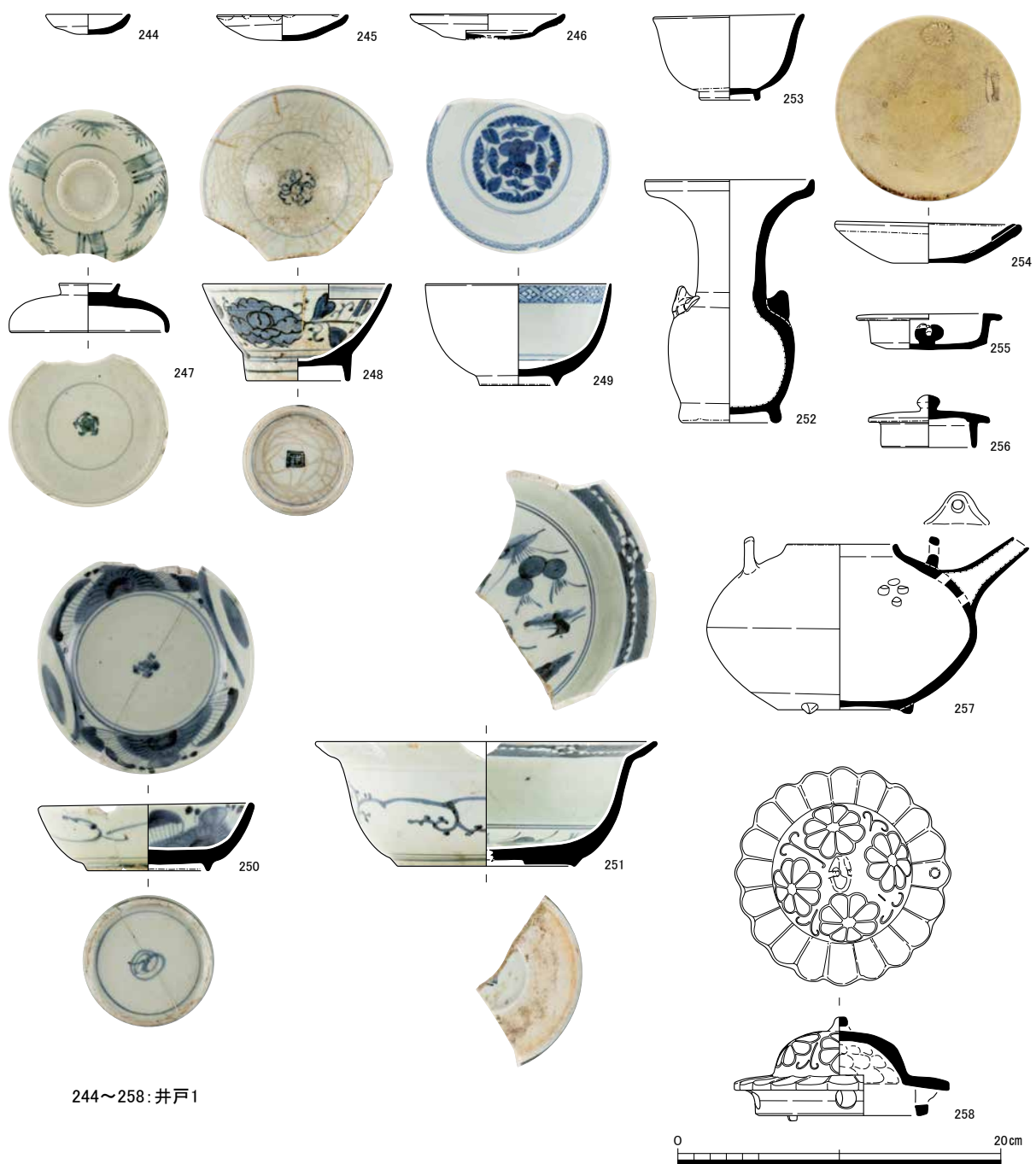
井戸 25 出土遺物は、13 A 段階に属する。

井戸 1 (図 22 244 ～ 258)

土師器 (244 ～ 246)、染付 (247 ～ 251)、青磁 (252)、施釉陶器 (253 ～ 257)、瓦質土器 (258) がある。

土師器は皿 N (244)、皿 S b (245)、皿 S (246) がある。皿 N は口径 5.2 cm、器高 1.2 cm。手づくねで成形する。皿 S b は口径 8.0 cm、器高 1.6 cm。口縁部に煤が付着することから、燈明皿の可能性はある。皿 S は口径 9.6 cm、器高 1.6 cm。底部内面に圈線が巡る。口縁部はナデにより外反し、内面が僅かに凹む。底部中央付近に径 6 mm の穿孔がある。

染付は蓋 (247)、碗 (248・249)、皿 (250)、鉢 (251) がある。蓋は天井部に輪高台が付く。口径 9.7 cm、



244~258:井戸1

図22 出土遺物6（幕末 1：4）

高台径 3.7 cm、器高 3.1 cm。口縁部はほぼ直立し、天井部は平坦である。外面に竹林、内面中央に五弁花を描く。椀は 248 が口径 11.6 cm、高台径 6.3 cm、器高 7.0 cm の広東椀である。焼継がなされている。外面に草花文、内面に花文、高台内に渦福を描く。249 は口径 11.4 cm、高台径 6.3 cm、器高 4.8 cm。体部の立ち上がりは丸みを持ち、口縁部はほぼ直立する。外面は青磁釉を施し、内面には口縁部に菱型文を描き、見込みに二重に巡る圏線内に草花文を描く。皿は口径 13.0 cm、高台径 7.5 cm、器高 4.2 cm。外面に抽象化された唐草、体部内面に日と花文、見込みに二重の圏線と五弁花、高台内に崩れた渦福を描く。鉢は口径 21.0 cm、高台径 11.0 cm、器高 7.7 cm。高台は蛇の目に釉剥ぎする。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は屈曲して外反する。外面に唐草、口縁部内面に草花文、見込みに二重の圏線と山水を描く。

青磁は肥前産の花瓶（252）である。口径 10.3 cm、高台径 5.9 cm、器高 15.1 cm。やや角のある球状の体部から頸部が長く上方に延び、口縁部は外反し端部は上方に屈曲する。体部上位に把手状の摘みが 2 個張り付けられる。白色の胎土に明緑色の釉薬を全面に施し、高台接地面の釉を剥ぐ。

施釉陶器は椀（253）、皿（254）、蓋（255・256）、土瓶（257）がある。椀は口径 9.3 cm、高台径 3.6 cm、器高 5.3 cm。削り出し高台である。体部の立ち上がりは丸みを帯び、口縁部は緩く外反する。灰白色の釉薬を施し、高台内は露胎である。皿は燈明皿である。口径 11.2 cm、底径 4.6 cm、器高 2.6 cm。内面に条線があり、口縁部内面に菊型の貼花が付く。内面及び口縁部外面に透明釉を施す。蓋は急須蓋である。255 は体部が上方に立ち上がり、口縁部が水平に外反し、窪んだ内面中央につまみが付く。口径 8.8 cm、器高 2.2 cm。256 はかえりが付くタイプで、天井部に宝珠状の把手が付く。口径 5.8 cm、器高 3.3 cm。土瓶は上位に吊耳を 2 個貼付け、底部にこぶ状の脚が 3 個付く。表面に透明釉を施す。底部外面には使用による煤が付着する。

瓦質土器は蓋がある。裏面にかえりが付き、かえりの 4 箇所には穿孔される。罫は花卉をあしらひ、外面には型押しによる草花文が施される。

井戸 1 出土遺物は、14 B 段階に属する。

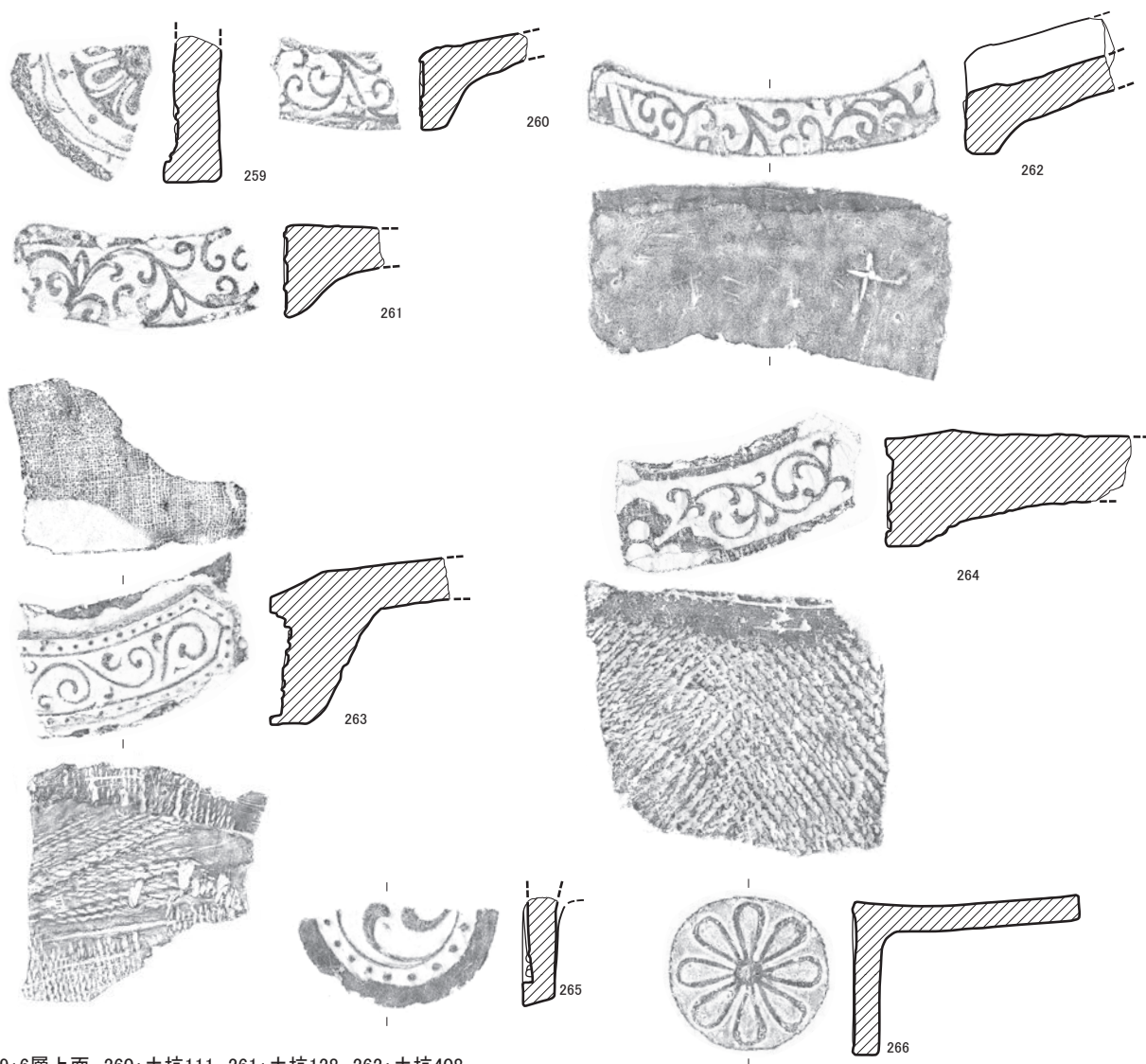
（2）瓦（図 23 259～266）

軒丸瓦（259・265・266）

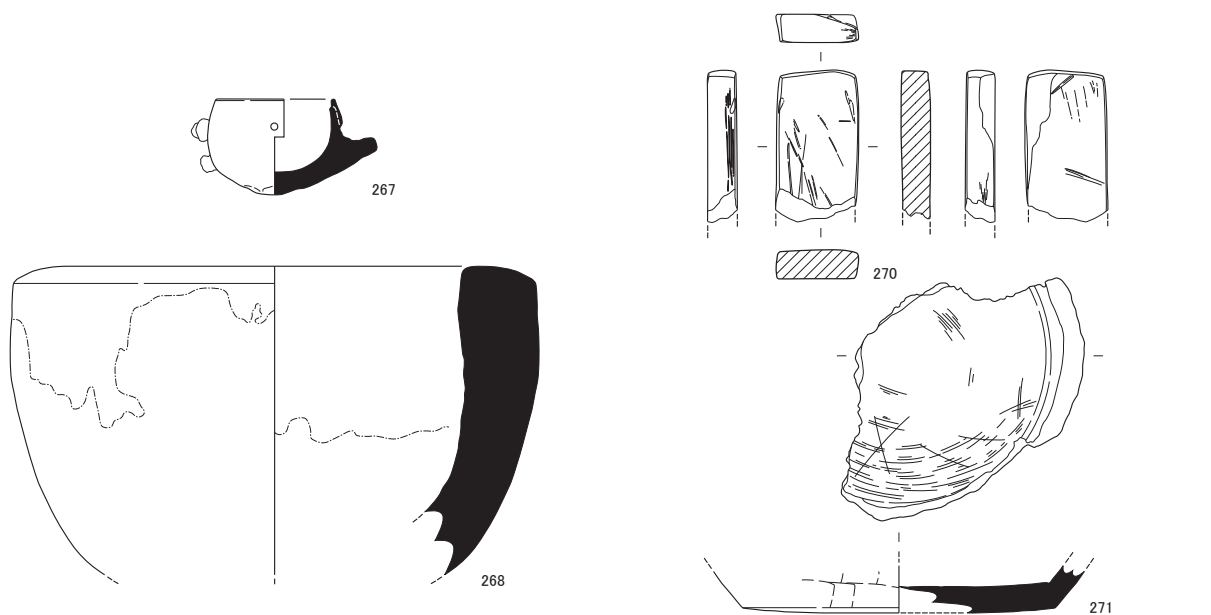
259 は複弁蓮華文。子葉は盛り上がり、弁間は Y 字である。圏線が 1 条巡り、珠文は圏線の内側に配置する。外区は唐草文が左回りに巡る。中央官衙系である。平安時代後期に属する。6 層上面の精査時に出土。265 は右巻き三つ巴文。巴頭部はやや尖り、尾部は長く伸び圏線に接する。外区に珠文が巡る。室町時代に属する。土坑 397 から出土。266 は菊花文。無周縁で菊花文を配する。中房は凸型で単弁八葉である。江戸時代前期に属する。土坑 115 から出土。

軒平瓦（260～264）

260 は偏行唐草文。唐草は左から右へ偏行する。主葉は連続して大きく反転し、子葉は強く巻き込む。瓦当部形成は折り曲げ技法。土坑 111 から出土。261 は偏行唐草文。唐草は左から右に偏行する。主葉は連続して大きく反転し、子葉は強く巻き込む。土坑 128 から出土。262 は偏行唐草文。



259: 6層上面 260: 土坑111 261: 土坑128 262: 土坑408
263: 土坑138 264: 土坑422 265: 土坑397 266: 土坑115



267: 土坑136 268: 土坑421
270: 土坑115 271: 土坑425

图23 出土遺物7 (軒瓦、土製品、石製品 1 : 4)

唐草は左から右に偏行する。主葉は連続して大きく反転し、子葉は強く巻き込む。瓦当部形成は折り曲げ技法。平瓦部凹面は布目が残る。顎部は横方向のナデを施し、平瓦部凸面はナデを施し「十」の線刻がある。土坑 408 から出土。263 は均整唐草文。丹波王子瓦窯産である。圈線によって内外区を区画し、外区に珠文を配する。主葉は 3 反転し、子葉は主葉と離れコンマ状を呈する。瓦当部形成は折り曲げ技法。顎部裏面及び平瓦部凸面に縄叩きが残る。平瓦部凹面は布目が残る。土坑 138 から出土。264 は半截花文唐草文。讃岐産である。中心飾りは半截花文で、唐草は主葉が連続して反転し子葉は強く巻き込む。全体的に厚手の作りであり、平瓦部凹面には布目残り、顎部裏面及び平瓦部凸面は縄叩きが残る。

(3) 金属製品 (図 21 269)

269 は銅製の皿である。井戸 330 から出土。口径 11.0 cm、底径 5.8 cm、器高 2.9 cm である。器壁は 1 ～ 2 mm と薄い。高台内の底部外面に木製と考えられる付着物がある。前述した 227 の土師器皿が重ねられた状態で出土した。

(4) 土製品 (図 23 267・268)

埴塙が出土した。267 は小型の球形を呈し一方に把手が付く。口径 6.2 cm、器高 5.1 cm である。土坑 136 から出土。268 は大型の椀状を呈し、口径 23.0 cm である。土坑 421 から出土。

(5) 石製品 (図 23 270・271)

270 は砥石である。石種は凝灰岩か。残存長 8.1 cm、幅 4.4 cm、厚さ 1.5 cm である。表裏両面とも使用により平滑である。土坑 115 から出土。271 は滑石鍋底部である。底径 16.1 cm、厚さ 1.4 cm を測る。底部内面の一部は平滑である。土坑 425 から出土。

参考文献

『平安京概要』角川書店 1994 年

『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会 2003 年

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995 年

『平安京左京北辺四坊』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2004 年

上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究 13・14』元興寺文化財研究所考古学研究室 1978 年

上原真人「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考－小林行雄博士古稀記念論考－』1982 年

第Ⅳ章 まとめ

1 遺構の変遷（図24～29）

平安時代（図24）

今回の調査では、平安時代中期にあたる3 A段階から遺構が検出される。10世紀の当町には右大臣藤原定方の邸宅「中西殿」が構えられ、それが藤原永頼、同能通へと伝了される。3期に属する遺構は「中西殿」に関連する遺構と想定される。3期の遺構は、土坑547・190、柱穴214の3基がある。

平安時代後期には、西区を中心に遺構数が増加する。西区では柱穴を中心として多くの遺構を検出したが、東区では後世の攪乱が激しく、西区と比較して遺構数は少ない。遺構の時期は4 B～C段階に属するものが多く、5 A～B段階の遺構は減少する。西区では複数の建物や柵が想定されるが、建物としてまとめることはできなかった。平成23年に当調査地の南隣で実施された調査（以下、「平成23年度調査」という）においても11～12世紀代の柱穴が多く検出されており、当町南東部に複数の建物が立ち並んでいたと想定される。調査区東端部で検出した南北溝178は富小路西側溝と推定される。鎌倉時代前半の遺構との切合い関係から、鎌倉時代初頭までには埋没したと考えられる。

鎌倉時代（図25・26）

鎌倉時代では引き続き遺構数は多い。当該期は、前半にあたる6 B～C段階と、後半～南北朝時代初頭にあたる7 B～C段階の2時期にピークがある。

6 B～C段階では柱穴・溝・石組・土坑を検出した。西区では小規模な掘立柱建物や柵の可能性のある柱穴を複数検出している。遺構は、東区では後世の攪乱により密度が低い、調査区のほぼ全域で検出している。東区で検出した土坑167、170は、富小路西築地推定ラインより東で検出され、鎌倉時代前半には宅地は東に拡張していた可能性が高い。西区で検出した溝430は富小路西築地推定ラインより12.5m西に位置し、敷地内の区画に伴う溝と考えられる。土坑は土坑355・362・399など平面方形を呈し底面が平坦なものを西区で検出している。オリーブ褐色シルトである7層をあまり掘り込んでいないことから土取穴とは考えにくく、平面形が方形を呈し底面が平坦であることから、竪穴状の遺構を想定する。西区北西部で検出した土坑492は、方形を呈し箱型に掘り込まれる土坑で、壁面の一部に被熱痕が確認された。6 B～C段階に属する井戸は検出していないが、土坑425は井戸の掘方であった可能性がある。

7 B～C段階では、井戸・土坑等を検出した。6 B～C段階で検出した掘立柱建物や柵等は7 B～C段階ではみられなくなり、土取穴や廃棄土坑などが遺構の中心となる。井戸は西区で2基検出した。安全面から底面は確認できなかったが、井戸551は標高39.25mまで確認している。西区で検出した土坑360は南北方向の布掘り土坑である。土坑内に据えられた礎石などは確認できなかったが、区画に伴う遺構であると考えられる。西区北半では、北五門・六門境界推定ライン付近で多数の土坑が切り合う状態で検出された。大半は平面形が不正方形を呈する土取穴や廃棄土坑と考えら

れる。

室町時代（図27）

室町時代は井戸・土坑を検出したが、鎌倉時代と比べ遺構・遺物は減少する。遺構は井戸1基と土坑17基が検出されたが、遺物の出土量は本調査において最も少ない。井戸180は調査区東端部で検出し、時期は9B～C段階に属する。底面の標高は39.08mである。検出位置は富小路西側溝及び路面推定位置であり、室町時代中頃には完全に宅地が東に拡張している。

当調査地の西隣で実施された御池中学校での調査や、南隣での平成23年調査においても室町時代の遺構・遺物は希薄になる。室町時代には市街地の中心部は上京と下京に二分され、また応仁の乱以後の都市荒廃に伴い、上京と下京の中間地である調査地周辺は衰退すると考えられており、今回の調査成果も同様の状況を示すものと考えられる。

安土桃山時代～江戸時代前半（図28）

11A段階には遺構数・遺物量共に増加する。遺構は東区及び西区東半に集中し、西区西半では希薄な状況である。井戸や土坑が調査区東部に集中する状況から、富小路通に面した東西方向の町屋が想定されるが、建物を復元できるだけの柱穴や礎石は検出していない。

検出した遺構は井戸・石組・土坑が中心である。井戸は東区北部で2基検出した。X=-109,640mラインに約4m離れた状態で並んで検出した。底面の標高は39.30m付近で、室町時代の井戸180の底面より30cm程高い位置にある。石組104・141・320は、円形石組の井戸のように見えるが底面の標高が井戸より50cm以上高く、水溜等の施設と判断した。石組135は、平面方形の土取穴状に掘方を掘り下げ、段階的に埋め戻す過程と並行して円形の石組を構築している。石組135の東では、拳大の礫による集石を広範囲で検出した。集石は地盤改良を目的としたものではないかと考えたが、石組135と合わせて庭園を構成するものであるかもしれない。

当該期は、先述した御池中学校での調査において、金属生産関連の工房が検出されている。今回の調査では工房に関する遺構は検出せず、土坑などから埴塼など金属生産に関する遺物が少数出土するのみである。当調査地南隣での平成23年度調査においても工房に関連する遺構は無く、当該期の検出遺構は井戸や石室などであることから、当調査地を含む富小路通東面では町屋が広がる状況であったと考えられる。

江戸時代後半～幕末（図29）

引き続き多くの遺構を検出した。検出した遺構は井戸や土坑が中心で調査区の全域に分布するが、調査区西部ではやや密度が低い。12B段階までの遺構は調査区中央より東に分布するが、13A段階以降は調査区中央より西側でも井戸や土坑が出現し、14A以降は調査区西端まで井戸の分布範囲が拡張する。井戸が東西方向に並んで配される状況から富小路通に正面を向けた建物配置は考えにくく、遺構の分布が西に広がりを見せる13A段階以降に南側もしくは北側に正面を向ける建物配置に変化した可能性を考える。

井戸は、井戸と判断した素掘りのものを含めると14基を数える。井戸枠は花崗岩を用いて円形に組まれたものが大半を占めるが、井戸351は花崗岩を長方形の石室状に組んだ井戸枠を構築し



図24 遺構変遷図1 (平安時代 1 : 100)

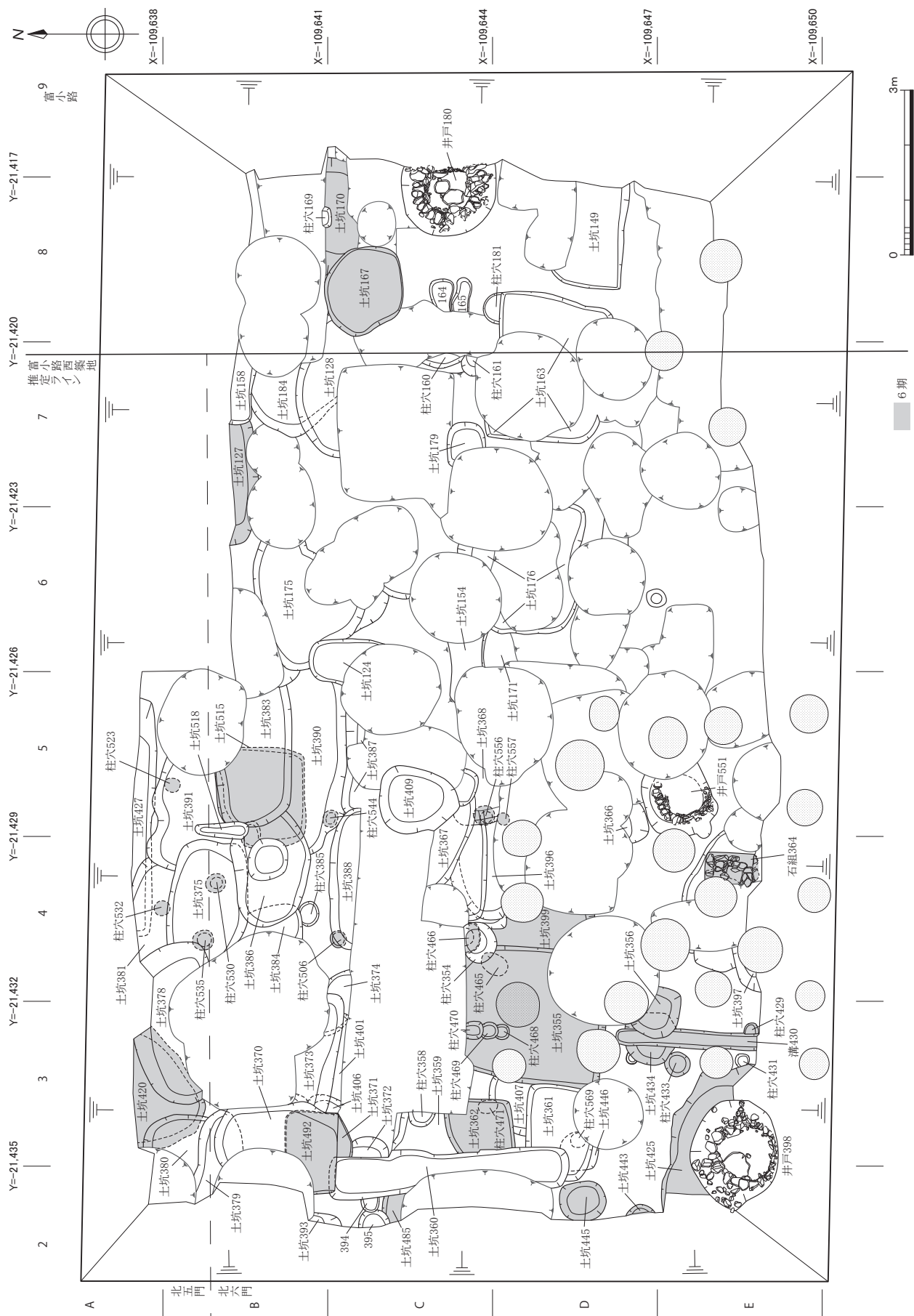


図25 遺構変遷図2 (鎌倉時代前半 1 : 100)

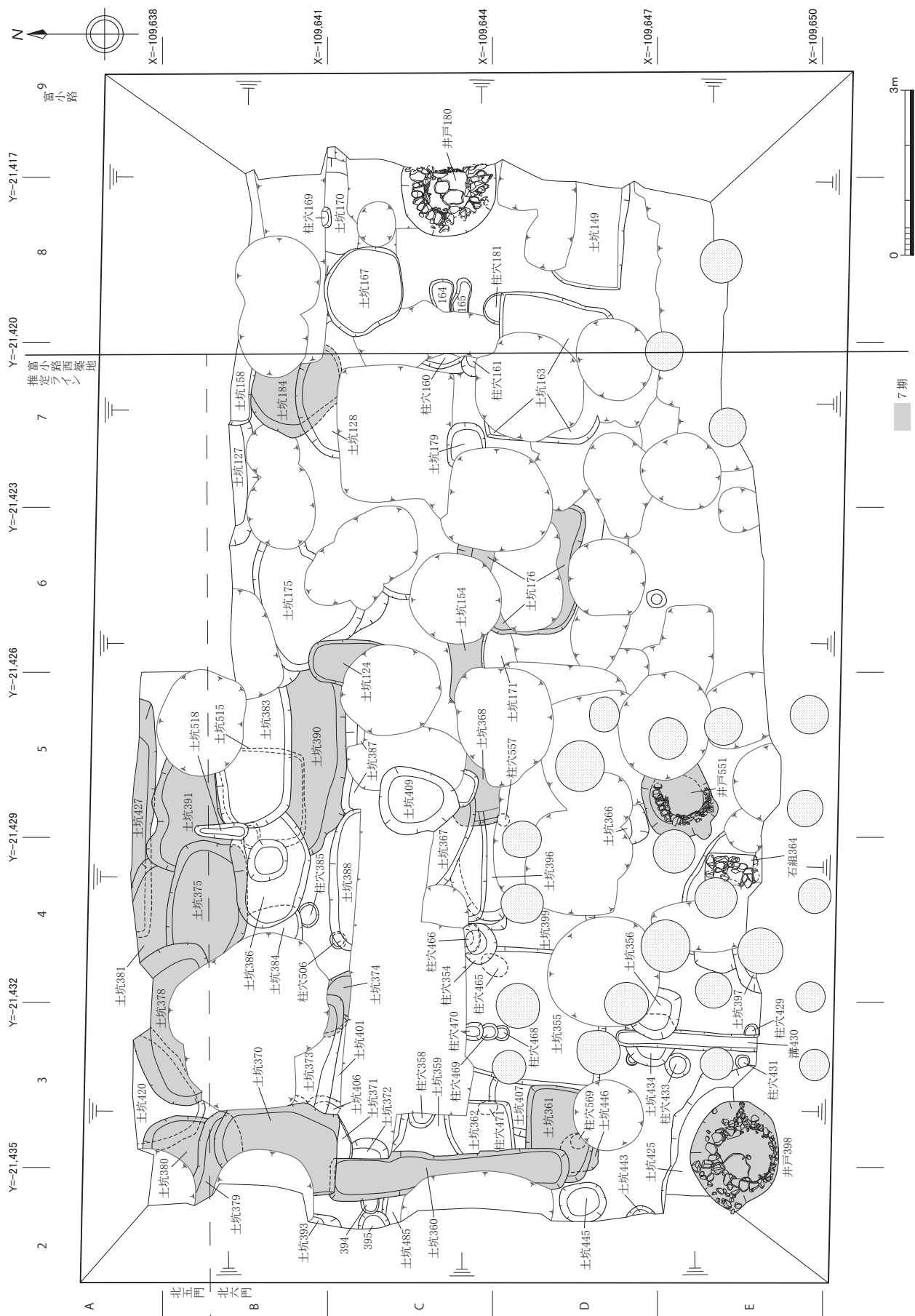


図26 遺構変遷図3 (鎌倉時代後半～南北朝時代初頭 1 : 100)

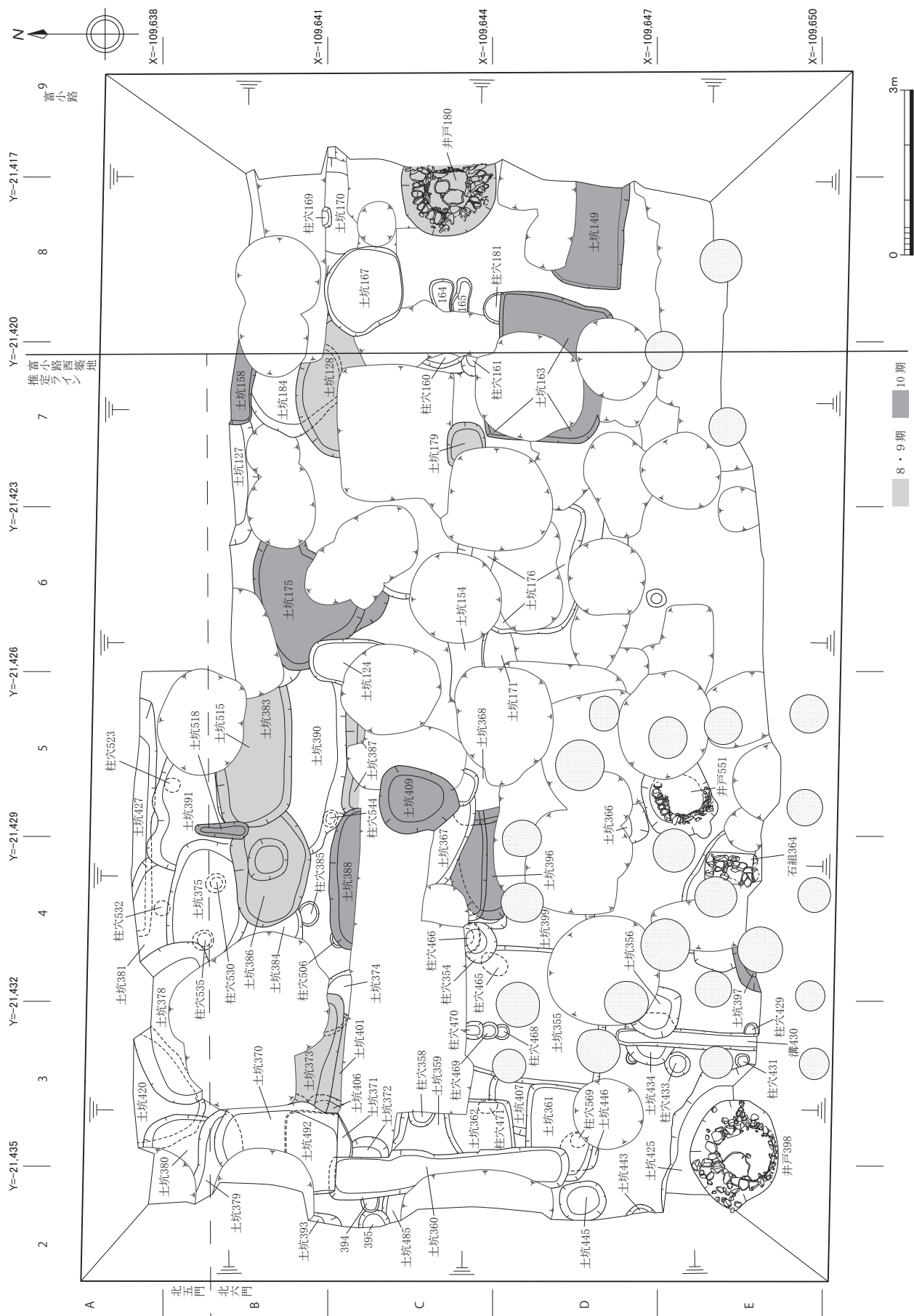


図27 遺構変遷図4 (室町時代 1 : 100)

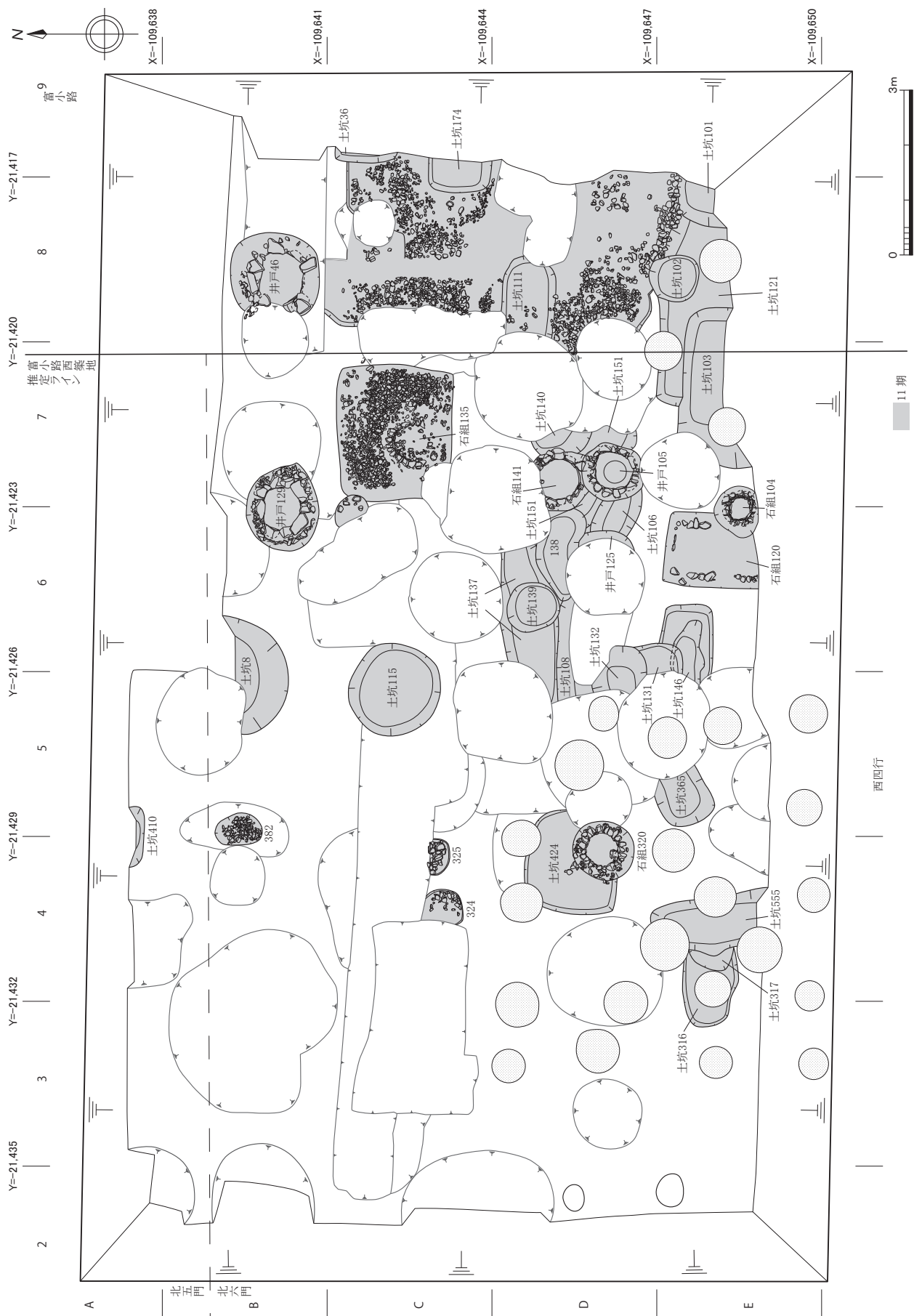


図28 遺構変遷図5 (安土桃山～江戸時代前半 1:100)

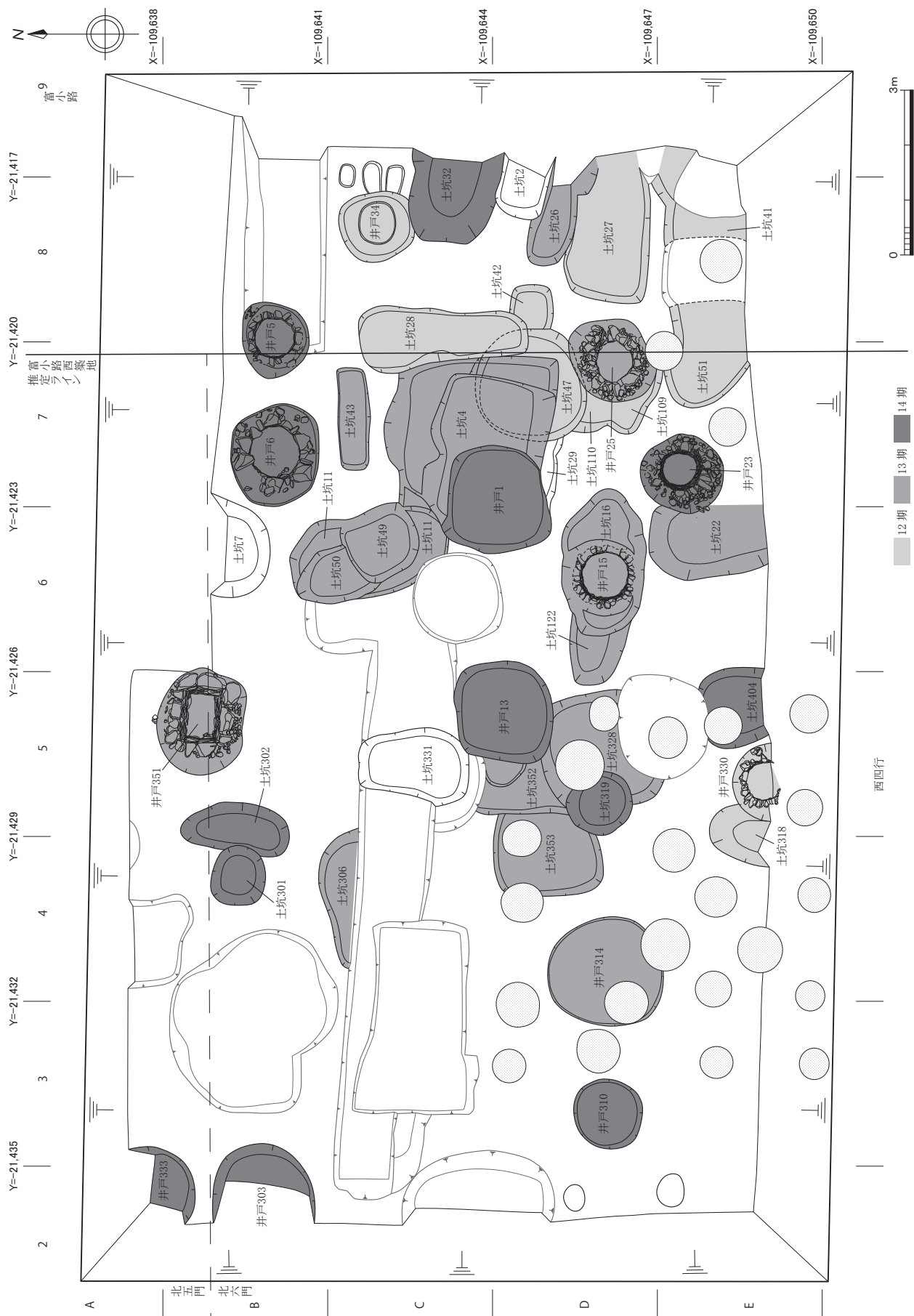


図29 遺構変遷図6 (江戸時代後半～幕末 1:100)

ている。検出時は石室と想定していたが、他の井戸と同深度まで掘り下げられていることから井戸と判断した。井戸は、調査区全域に分布するが、X=-109,640 m、X=-109,646 mライン上に半数が並んで検出され、その他もライン周辺で検出されている。井戸底面の標高は38.70～38.80 m付近で、前段階までと比べて20～30 cm程深くなっている。

井戸の他には土坑を検出した。土坑26・28・29・43は平面形が溝状に布掘りされ、埋土は多量の灰が混じった黒色泥砂である。土坑32は、播鉢状に窪む底面に黄褐色シルトが貼られていた。坪庭の池の可能性も考えたが、詳細は不明である。

2 出土遺物

平安時代

平安時代前期（1～2期）の遺物はほぼ出土せず、平安時代中期（3期）以降から出土量は増加する。

3 A段階の遺物が土坑547から、3 B段階の遺物が土坑190から出土した。その他に9～10世紀代の緑釉陶器や灰釉陶器等が後世の遺構に混入するが、全体的に出土量は少ない。

平安時代後期の4 B段階から出土量は増加する。器種は土師器が大半を占め、白色土器や白磁が少数出土する。土坑520からは、土師器皿A・Nが多量に重なった状態で出土した。完形もしくはそれに近い個体が多く土坑内に埋納されたものと考えられ、4 B段階の良好な一括資料と評価される。瓦の出土数は少なく、中世以降の土坑等から平安時代の軒瓦が少数出土している。中央官衛系の瓦とともに丹波王子窯産（263）や讃岐産（264）の軒平瓦が出土した。

鎌倉時代

平安時代に比べて、出土数は増加している。当該期は、遺構数と同様に、6 B～C段階と7 B～C段階の2時期に属する遺物の出土数が多い。

6 B～C段階の遺物は、土坑167・355や溝430からまとまって出土した。土師器皿Nの数量が多く、皿Sは皿Nに比べて少ない。瓦器鍋は一定数出土しているが、瓦器碗の出土は僅かである。土坑355からは、見込みに劃花文を施す龍泉窯の皿が3枚重なった状態で出土している。

7 B～C段階の遺物は、6 B～C段階と変わらず土師器皿Nの出土が多いが、皿Sの数量が増加する。輸入陶磁器の量も増え、井戸551からは青白磁の合子（128）が出土している。

室町時代

鎌倉時代と比べて、遺物の出土数は激減する。近世の遺構に混入する遺物も少なく、遺物の出土量からも調査地周辺での活動が停滞する状況が見て取れる。

安土桃山時代～江戸時代前半

11 A段階から出土数は激増する。遺物は井戸や土坑にまとまって投棄されており、土坑115からはコンテナ2箱分の土器・陶磁器類が出土している。遺物には唐津・織部・志野・備前等の茶陶や明染付が含まれており、当地居住者の一定以上の生活水準の高さが伺われる。

江戸時代後半～幕末

出土数はさらに増加し、今回の調査における総数の内、半数近くが当該期に属する。井戸1からはコンテナ10箱以上の遺物が出土しており、全体量の1割以上を占める。井戸1からは幕末の遺物が出土し、内容は土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、国産磁器、瓦質土器、瓦、土製品等がある。香炉の蓋と思われる瓦質土器、国産青磁花瓶、染付鉢等、生活水準の高さが想定される遺物が含まれている。

3 左京三条四坊十町東部の宅地利用と富小路について

調査区東部Y = -21,420.20mライン付近は、富小路西築地の推定位置であり、調査区東壁付近では富小路路面及び西側溝の検出が想定された。今回の調査では、近世の攪乱が激しく路面は検出できなかったが、調査区東端部付近で富小路西側溝と考えられる南北溝178を検出した。当調査地の南隣で実施された平成23年調査では平安時代～室町時代後半の富小路路面と西側溝が検出されており、今回検出した溝178は西側溝の北延長にあたる。平成23年調査では、路面は部分的な改変も含め6面ほど確認されており、平安時代前期～室町時代にかけて補修を重ねながら存続していたと報告されている。西側溝については、最大幅2.3m、深さは路面から1.2mを測るという大規模なもので幾度かの改変を受けたと想定され、室町時代の路面には明確な側溝は伴わず路面の西隣で検出された土坑が側溝としての機能を果たしていたのではないかとされる。

今回検出した溝178は、幅1.27m、深さ0.38mを測り、平成23年調査で検出された西側溝と比べて小規模である。前述のとおり、鎌倉時代前半の遺構との切合い関係から鎌倉時代初頭までには埋没したと考えられ、以後周辺に新たに開削された側溝は確認できない。東区8C・9C地区で検出した6B段階に属する土坑167・170は富小路西築地推定ラインより東に位置し、鎌倉時代前半には当町の宅地が東に拡張していた可能性を伺わせる。

平成23年調査では、富小路路面は平安時代～室町時代まで存続したとされ、秀吉の天正地割によって富小路が西へ移動する直前には古来からの道路位置が不明確になっていたのではないかと想定されている。今回の調査でも、9B～C段階に属する井戸180が富小路路面及び西側溝推定位置で検出していることから、室町時代中頃には施工当初の富小路路面位置は宅地利用されている状況であったと考えられるが、今回の調査成果からは鎌倉時代前半の段階ですでに宅地が富小路側へ拡張していた可能性が高いと考える。今回の調査では路面は検出できなかったため、調査地における鎌倉時代の路面状況は不明であるが、西側溝は当調査地においては消失したか規模が縮小していた可能性を考える。当町東部での宅地の利用状況や富小路の変遷については、今後の調査成果の増加と、今回の調査を含めこれまでの調査成果の再検討が必要であろう。

参考・引用文献

上村和直・小檜山一良「平安京左京三条四坊十町跡」 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
尾藤徳行「平安京左京三条四坊十町跡」 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
上村憲章「平安京左京四坊十町・烏丸御池遺跡」 古代文化調査会 2011年

表4 遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿 A	土坑 547	13.7	2.0	-	10YR8/3 浅黄橙色	
2	土師器	皿 A	土坑 547	13.7	2.0	-	7.5YR6/6 橙色	
3	土師器	皿 A	土坑 547	15.0	1.6	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
4	土師器	杯 A	土坑 547	14.3	2.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
5	土師器	杯 A	土坑 547	18.8	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
6	土師器	杯 A	土坑 547	18.8	-	-	7.5YR7/6 橙色	
7	土師器	高杯	土坑 547	9.6	1.2	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
8	土師器	高杯	土坑 547	14.2	2.3	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
9	土師器	甕	土坑 547	7.4	3.1	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
10	黒色土器	碗	土坑 547	15.6	5.8	7.1	10YR2/1 黒色	
11	黒色土器	杯	土坑 547	-	-	8.0	N3/0 暗灰色	
12	緑釉陶器	碗	土坑 547	-	-	-	(釉) 5Y7/4 浅黄緑 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	
13	須恵器	壺	土坑 547	-	-	15.8	5Y7/1 灰白色	
14	土師器	皿 A	土坑 190	11.4	1.2	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
15	土師器	甕	土坑 190	13.8	(7.9)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
16	灰釉陶器	碗	土坑 190	-	(2.5)	8.2	N7/0 灰白色	
17	緑釉陶器	碗	土坑 152	-	(1.2)	7.4	(釉) 7.5YR5/3 灰オリーブ色 (胎) 2.5Y7/2 灰黄色	
18	緑釉陶器	碗	土坑 152	-	(2.2)	8.6	(釉) 濃緑 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	
19	白磁	碗	土坑 152	-	(2.4)	7.1	(釉) 10Y8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	
20	白色土器	碗	土坑 189	-	(2.2)	7.3	2.5Y8/1 灰白色	
21	灰釉陶器	碗	土坑 189	-	(2.7)	8.0	2.5Y7/2 灰黄色	
22	土師器	皿 A	土坑 520	9.4	1.7	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
23	土師器	皿 A	土坑 520	9.5	1.6	-	10YR8/3 浅黄橙色	
24	土師器	皿 A	土坑 520	9.6	1.5	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
25	土師器	皿 A	土坑 520	9.6	1.6	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
26	土師器	皿 A	土坑 520	9.6	1.5	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	口縁部に煤付着
27	土師器	皿 A	土坑 520	9.6	1.5	-	10YR8/3 浅黄橙色	
28	土師器	皿 A	土坑 520	9.6	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
29	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.6	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
30	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
31	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	口縁部に煤付着
32	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
33	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.8	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
34	土師器	皿 A	土坑 520	9.7	1.5	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
35	土師器	皿 A	土坑 520	9.8	1.6	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
36	土師器	皿 A	土坑 520	9.8	1.7	-	7.5YR8/6 浅黄橙色	
37	土師器	皿 A	土坑 520	9.8	1.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
38	土師器	皿 A	土坑 520	9.9	1.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
39	土師器	皿 A	土坑 520	9.8	1.7	-	5YR8/4 にぶい橙色	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
40	土師器	皿 A	土坑 520	9.9	1.7	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
41	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.7	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
42	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
43	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
44	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
45	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	2.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
46	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.8	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
47	土師器	皿 A	土坑 520	10.0	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
48	土師器	皿 A	土坑 520	10.2	1.8	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
49	土師器	皿 A	土坑 520	10.3	1.7	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
50	土師器	皿 A	土坑 520	10.4	1.8	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
51	土師器	皿 N	土坑 520	10.0	2.0	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
52	土師器	皿 N	土坑 520	10.3	1.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
53	土師器	皿 N	土坑 520	10.2	2.1	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
54	土師器	皿 N	土坑 520	10.7	2.3	-	5YR7/4 にぶい橙色	
55	土師器	皿 N	土坑 520	11.8	2.6	-	5YR7/6 橙色	
56	土師器	皿 N	土坑 520	12.6	2.4	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部に煤付着
57	土師器	皿 N	土坑 520	12.8	2.4	-	10YR8/4 浅黄橙色	
58	土師器	皿 N	土坑 520	14.8	3.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
59	土師器	皿 N	土坑 520	15.0	2.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
60	土師器	皿 N	土坑 520	15.1	3.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
61	土師器	皿 N	土坑 520	15.1	3.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
62	土師器	皿 N	土坑 520	15.2	3.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
63	土師器	皿 N	土坑 520	15.2	3.0	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
64	土師器	皿 N	土坑 520	15.3	3.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
65	土師器	皿 N	土坑 520	15.4	3.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
66	土師器	皿 N	土坑 520	15.6	3.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
67	土師器	皿 N	土坑 520	15.6	3.4	-	5YR7/6 橙色	
68	土師器	皿 N	土坑 520	16.0	3.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
69	土師器	皿 N	土坑 520	16.4	4.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
70	土師器	皿 N	土坑 520	16.9	4.6	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
71	白色土器	椀	土坑 520	-	-	-	10YR8/2 灰白色	
72	土師器	皿 A	柱穴 522	9.6	1.4	-	10YR8/2 灰白色	
73	白色土器	高杯	柱穴 522	-	(6.4)	-	10YR8/2 灰白色	
74	須恵器	壺	柱穴 464	-	(1.9)	6.3	7.5YR8/4 浅黄橙色	
75	白磁	椀	柱穴 646	11.1	3.3	4.6	(釉)5Y7/2 灰白色 (胎)2.5Y8/1 灰白色	
76	土師器	皿	柱穴 554	15.1	4.0	-	7.5YR7/6 橙色	
77	土師器	皿 N	土坑 560	14.7	2.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
78	白色土器	皿	土坑 368	11.0	2.0	5.6	10YR8/2 灰白色	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
79	白色土器	碗	溝 430	-	-	6.0	10YR8/2 灰白色	
80	白色土器	高杯	土坑 386	-	(5.1)	-	2.5Y8/3 淡黄色	
81	緑釉陶器	碗	井戸 314	-	(1.3)	7.8	(釉)7.5Y6/3 オリーブ黄色 (胎)5Y8/1 灰白色	
82	緑釉陶器	碗	溝 430	-	(1.3)	6.0	N6/0 灰	
83	緑釉陶器	碗	土坑 386	-	(1.7)	6.3	(釉)10Y5/2 オリーブ灰色 (胎)2.5Y6/1 黄灰色	
84	緑釉陶器	碗	土坑 128	-	(2.6)	7.2	(釉)濃緑 (胎)2.5Y8/2 灰白色	
85	白磁	壺	土坑 115	11.0	(4.2)	-	(釉)5Y6/2 灰オリーブ色 (胎)2.5Y7/1 灰白色	
86	土師器	皿 N	土坑 355	7.8	1.5	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
87	土師器	皿 N	土坑 355	14.4	2.4	-	10YR7/4 にぶい橙色	
88	土師器	皿 N	土坑 355	8.0	1.5	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
89	土師器	皿 N	土坑 355	8.2	1.4	-	5Y6/6 橙色	
90	土師器	皿 N	土坑 355	8.4	1.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
91	土師器	皿 N	土坑 355	8.7	1.5	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
92	土師器	皿 N	土坑 355	8.8	1.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
93	土師器	皿 N	土坑 355	11.6	2.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
94	土師器	皿 N	土坑 355	11.7	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
95	土師器	皿 N	土坑 355	12.1	2.2	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
96	土師器	皿 N	土坑 355	12.7	2.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
97	土師器	皿 N	土坑 355	14.4	2.8	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
98	土師器	皿 S	土坑 355	11.2	3.3	-	10YR8/2 灰白色	
99	瓦器	鉢	土坑 355	16.5	(5.1)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色～ 2.5Y5/1 黄灰色	
100	青磁	皿	土坑 355	9.8	2.2	4.8	(釉)7.5YR6/2 灰オリーブ色 (胎)5Y7/2 灰白色	
101	青磁	皿	土坑 355	10.5	2.2	4.3	(釉)10GY7/1 明緑灰色 (胎)10YR5/3 にぶい黄褐色	
102	青磁	皿	土坑 355	10.2	2.2	5.2	(釉)7.5YR6/2 灰オリーブ色 (胎)5Y7/2 灰白色	
103	須恵器	鉢	土坑 355	27.2	(6.6)	(3.8)	N4/0 灰	
104	土師器	皿 N	溝 430	8.4	1.3	-	10YR8/4 浅黄橙色	
105	土師器	皿 N	溝 430	8.6	1.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	
106	土師器	皿 N	溝 430	8.6	1.8	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
107	土師器	皿 N	溝 430	8.8	1.5	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
108	土師器	皿 N	溝 430	8.8	1.8	-	10YR8/3 浅黄橙色	
109	土師器	皿 N	溝 430	12.5	2.1	-	10YR8/6 黄橙色	
110	土師器	皿 N	溝 430	12.8	2.3	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
111	土師器	皿 N	溝 430	12.8	2.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	
112	土師器	皿 N	溝 430	13.4	2.3	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
113	瓦器	鍋	溝 430	28.3	(11.4)	-	N5/0 灰	
114	瓦器	鍋	溝 430	29.2	13.9	-	N4/0 灰	
115	土師器	皿 N	土坑 167	8.1	1.5	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
116	土師器	皿 N	土坑 167	12.5	2.2	-	2.5Y7/3 浅黄色	
117	土師器	皿 S	土坑 167	11.3	3.0	-	2.5Y8/2 灰白色	

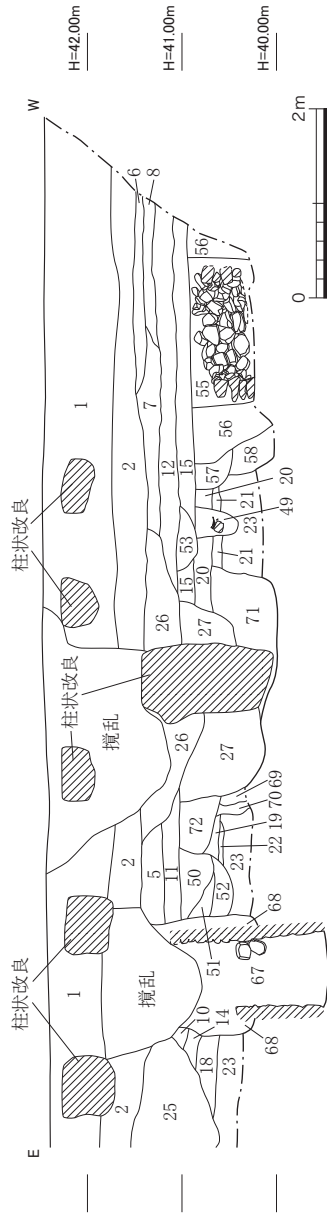
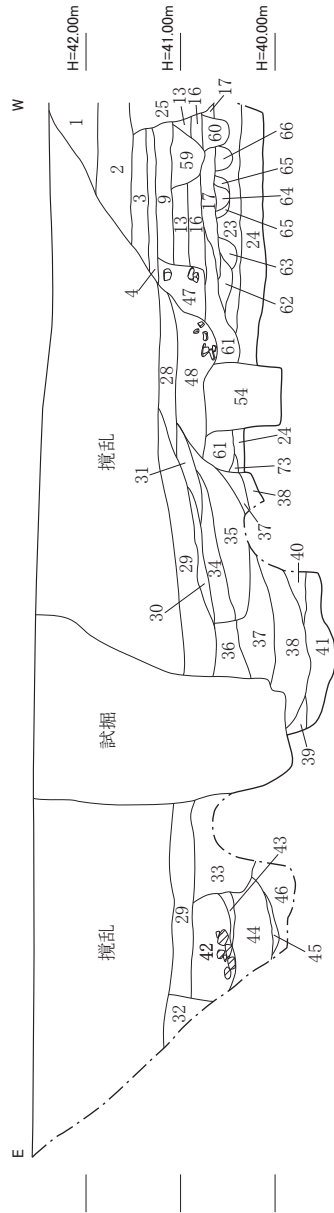
掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
118	土師器	皿 S	土坑 167	13.1	-	-	2.5Y8/2 灰白色	
119	土師器	皿 S	土坑 167	13.2	(3.3)	-	2.5Y8/2 灰白色	
120	瓦器	鍋	土坑 167	23.6	(9.4)	-	N4/0 灰	
121	須恵器	鉢	土坑 167	26.4	(7.6)	-	N4/0 灰	
122	土師器	皿 N	土坑 156	7.7	1.3	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
123	土師器	皿 N	土坑 156	10.7	1.7	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	
124	土師器	皿 S	土坑 156	12.0	(2.8)	-	10YR8/2 灰白色	
125	白磁	皿	土坑 156	11.3	3.2	-	(釉)5GY8/1 灰白色 (胎)N8/0 灰白色	
126	須恵器	鉢	土坑 156	28.8	8.2	-	N4/0 灰	
127	土師器	皿 N	井戸 551	8.8	1.7	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
128	青白磁	合子	井戸 551	4.5	(3.7)	-	(釉)10GY8/1 明緑灰色 (胎)N8/0 灰白色	
129	青磁	椀	井戸 551	-	(3.3)	-	(釉)明オリープ色 (胎)N80 灰白色	
130	焼締陶器	甕	井戸 551	-	(5.8)	-	10YR4/1 褐灰色	
131	土師器	皿 N	土坑 360	7.5	1.5	-	10YR8/2 灰白色	
132	土師器	皿 N	土坑 360	7.9	1.4	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
133	土師器	皿 N	土坑 360	7.5	1.5	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
134	土師器	皿 N	土坑 360	11.0	2.0	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	
135	土師器	皿	土坑 360	9.0	2.0	-	2.5Y8/2 灰白色	
136	土師器	皿 Sh	土坑 360	7.1	2.0	-	2.5Y8/2 灰白色	
137	土師器	皿 S	土坑 360	7.0	2.0	-	10YR8/1 灰白色	
138	土師器	皿 S	土坑 360	11.8	3.2	-	5Y8/1 灰白色	
139	土師器	皿 S	土坑 360	12.1	3.0	-	10YR8/1 灰白色	
140	土師器	皿 S	土坑 360	12.3	2.9	-	2.5Y8/2 灰白色	
141	土師器	皿 N	土坑 154	7.8	1.5	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
142	土師器	皿 N	土坑 154	7.8	1.6	-	10YR8/4 浅黄橙色	
143	土師器	皿 N	土坑 154	9.8	2.2	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
144	土師器	皿 N	土坑 154	10.0	2.1	-	10YR8/3 浅黄色	
145	土師器	皿 N	土坑 154	7.8	1.6	-	10YR8/4 浅黄橙色	
146	土師器	皿 N	土坑 154	10.5	2.5	-	7.5YR7/6 橙色	
147	土師器	皿 N	土坑 154	10.6	2.0	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
148	土師器	皿 N	土坑 154	10.6	2.3	-	7.5YR7/6 橙色	
149	土師器	皿 N	土坑 154	10.8	2.2	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	
150	土師器	皿 N	土坑 154	10.9	2.1	-	7.5YR6/4 にぶい橙色	
151	土師器	皿 Sh	土坑 154	6.8	1.9	-	10YR8/2 灰白色	
152	土師器	皿 S	土坑 154	11.4	3.0	-	10YR8/2 灰白色	
153	土師器	皿 S	土坑 154	11.5	3.0	-	10YR8/2 灰白色	
154	土師器	皿 S	土坑 154	11.6	3.0	-	10YR8/2 灰白色	
155	瓦質土器	鉢	土坑 154	-	(4.7)	-	7.5YR6/6 橙色	
156	須恵器	鉢	井戸 398	-	(3.4)	-	N5/0 灰	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
157	須恵器	鉢	井戸 398	-	(4.5)	-	5Y7/1 灰白色	
158	須恵器	鉢	井戸 398	-	(6.6)	-	N5/0 灰	
159	焼締陶器	甕	井戸 398	-	(4.4)	-	(釉)2.5Y5/3 黄褐色 (胎)2.5Y5/1 黄灰色	
160	焼締陶器	甕	井戸 398	-	(8.4)	-	2.5YR4/4 におい赤褐色	
161	土師器	皿 N	土坑 368	10.9	2.1	-	10YR7/3 におい黄橙色	
162	土師器	皿 S	土坑 368	11.3	2.9	-	10YR8/2 灰白色	
163	白磁	皿	土坑 368	8.8	1.8	5.6	(釉)2.5GY8/1 灰白色 (胎)N8/0 灰白色	
164	須恵器	鉢	土坑 368	-	(1.7)	8.2	N7/0 灰白色	
165	瓦器	椀	土坑 368	15.7	4.4	5.6	N4/0 灰	和泉Ⅲ・3 6B～C
166	瓦質土器	鉢	土坑 375	19.0	9.1	-	N3/0 暗灰色	
167	青磁	椀	土坑 301	12.0	3.9	5.6	(釉)10GY8/1 明緑灰色 (胎)N8/0 灰白色	
168	青磁	小椀	5 層	10.9	4.4	3.2	(釉)10Y6/1 灰色 (胎)10YR7/4 におい黄橙色	
169	土師器	皿 Sh	井戸 180	7.1	2.0	-	10YR8/2 灰白色	
170	青磁	椀	井戸 180	12.0	(2.8)	-	(釉)7.5GY8/1 明緑灰色 (胎)N8/0 灰白色	
171	土師器	皿 S	土坑 158	11.2	2.7	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
172	瓦器	鍋	土坑 386	20.5	6.5	-	(外)N5/0 灰 (内)2.5Y8/1 灰白色	
173	土師器	皿 S	土坑 397	10.6	2.2	-	10YR6/2 灰黄褐色	
174	施釉陶器	皿	土坑 397	-	(1.6)	5.8	(釉)7.5Y5/3 灰オリーブ色 (胎)2.5Y8/2 灰白色	古瀬戸
175	瓦質土器	鉢	土坑 397	15.5	6.2	-	(内外)N5/0 灰 (断)7.5YR6/4 におい橙色	
176	土師器	皿 S	石組 135	9.8	2.4	-	7.5YR7/3 におい橙色	
177	土師器	皿 S	石組 135	12.1	2.0	-	10YR7/4 におい黄橙色	
178	施釉陶器	壺	石組 135	-	(4.2)	6.0	(釉)2.5Y2/1 黒・7.5YR3/2 黒 褐色 (胎)7.5YR4/1 褐灰色	
179	土師器	皿 S	土坑 8	9.6	1.9	-	7.5YR7/3 におい橙色	
180	土師器	皿 S	土坑 8	11.4	2.1	-	7.5YR7/3 におい橙色	
181	瓦質土器	鉢	土坑 8	11.8	5.6	-	(内外)10YR4/1 褐灰色 (断)7.5YR7/4 におい橙	
182	施釉陶器	向付か	土坑 8	(16.0)	6.7	-	(釉)2.5Y5/6 黄褐色・7.5Y3/2 黒褐色 (胎)10YR8/2 灰白色	織部
183	土師器	皿 N	土坑 115	5.7	1.3	-	10YR7/4 におい黄橙色	
184	土師器	皿 N	土坑 115	5.8	1.3	-	10YR7/4 におい黄橙色	
185	土師器	皿 S	土坑 115	10.6	2.3	-	10YR4/1 褐灰色	
186	土師器	皿 S	土坑 115	11.1	2.2	-	7.5YR7/4 におい橙色	
187	土師器	皿 S	土坑 115	11.2	2.4	-	10YR7/4 におい黄橙色	
188	土師器	鍋	土坑 115	26.0	(6.2)	-	(内)10YR8/4 浅黄褐色 (外)10YR4/2 灰黄褐色	
189	施釉陶器	椀	土坑 115	13.6	6.5	5.0	(釉)明緑灰色 (胎)5Y8/1 灰白色	京焼
190	施釉陶器	天目茶碗	土坑 115	11.2	7.0	4.6	(釉)5YR2/2 黒褐色 (胎) 10YR8/2 灰白色	瀬戸
191	施釉陶器	椀	土坑 115	10.1	5.3	4.6	(釉)2.5Y8/1 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	志野
192	施釉陶器	椀	土坑 115	9.8	7.4	4.8	(釉)2.5Y7/2 灰黄色 (胎) 10YR7/2 におい黄橙色	唐津
193	施釉陶器	椀	土坑 115	9.5	7.7	5.0	(釉)10YR7/ 灰白色 (胎) 2.5Y6/2 灰黄色	唐津
194	施釉陶器	皿	土坑 115	11.4	3.2	4.8	(釉)2.5Y5/4 黄褐色 (胎) 5YR5/4 におい赤褐色	唐津
195	施釉陶器	皿	土坑 115	-	(3.4)	5.0	(釉)10Y4/1 褐灰色 (胎) 2.5YR4/6 明赤褐色	唐津

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
196	施釉陶器	皿	土坑 115	21.3	6.0	6.8	(釉) 10YR7/1 明オリブ灰色 (胎) 10YR7/1 灰白色	唐津
197	施釉陶器	鉢	土坑 115	-	(7.6)	5.7	(釉) 5Y7/2 灰白色 (胎) 5Y7/1 灰白色	唐津
198	染付	椀	土坑 115	10.4	5.9	4.5	(釉) 呉須 (胎) N9/0 白色	肥前
199	染付	椀	土坑 115	12.9	(4.4)	-	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	明染付
200	染付	椀	土坑 115	12.3	5.9	4.8	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	明染付
201	染付	椀	土坑 115	-	(2.7)	5.0	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	明染付
202	瓦質土器	盤	土坑 115	19.4	2.7	-	N4/0 灰色	
203	瓦質土器	瓦燈	土坑 115	-	(6.8)	15.0	N4/0 灰色	
204	瓦質土器	火鉢	土坑 115	31.0	9.2	-	(内外) N4/0 灰色 (断面) 7.5YR7/4 にぶい橙色	
205	瓦質土器	火鉢	土坑 115	30.8	11.7	-	(内外) N4/0 灰色 (断面) 7.5YR7/4 にぶい橙色	
206	焼締陶器	壺	土坑 115	17.6	(5.3)	-	2.5YR6/6 橙色	信楽
207	焼締陶器	花入	土坑 115	14.2	(13.3)	-	(内) 5YR4/2 灰褐色 (外) N7/0 灰白色	備前
208	焼締陶器	播鉢	土坑 115	35.8	13.7	12.6	2.5YR4/6 赤褐色	丹波
209	土師器	皿 S	土坑 111	12.9	2.3	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
210	施釉陶器	皿	土坑 111	-	(3.2)	6.6	(釉) N8/0 灰白色 (胎) 7.5YR6/6 橙色	唐津
211	施釉陶器	小椀	土坑 174	7.8	4.1	3.6	(釉) N7/0 灰白色 (胎) 10YR6/3 にぶい黄橙色	唐津
212	施釉陶器	椀	土坑 174	11.1	7.4	4.5	(釉) 2.5Y7/4 浅黄色 (胎) 2.5Y8/3 淡黄色	京焼
213	焼締陶器	皿	土坑 176	10.2	2.8	5.1	(釉) 7.5Y7/1 灰白色 (胎) 10YR6/4 にぶい黄橙色	
214	施釉陶器	壺	土坑 146	-	(18.1)	13.5	(釉) 10Y5/2 オリブ灰色 (胎) N7/0 灰白色	底面に穿孔
215	施釉陶器	皿	石組 104	11.6	2.8	6.6	(釉) 5Y8/2 灰白色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	志野
216	焼締陶器	播鉢	石組 104	37.8	(9.9)	-	7.5YR4/2 灰赤色	丹波
217	土師器	皿 N	井戸 105	5.5	1.2	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
218	土師器	皿 Sb	井戸 105	9.5	2.1	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	
219	土師器	皿 S	井戸 105	10.6	2.3	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	表面に煤付着
220	土師器	皿 S	井戸 105	10.6	2.2	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部に煤付着
221	土師器	鍋	井戸 105	30.5	(6.3)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
222	土師器	焼塩壺	井戸 105	5.8	9.2	4.3	5YR6/6 橙色	
223	施釉陶器	椀	井戸 105	7.1	4.8	3.7	(釉) 5Y7/4 浅黄色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	瀬戸
224	施釉陶器	皿	井戸 105	11.7	2.6	4.0	(釉) 2.5Y7/2 灰黄色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	唐津
225	施釉陶器	椀	井戸 105	12.5	7.3	4.6	(釉) 7.5GY8/1 明緑灰色 (胎) 10YR8/2 灰白色	京焼
226	白磁	椀	井戸 105	9.4	6.8	4.9	N9/0 白色	肥前
227	土師器	皿 S	井戸 330	10.3	2.0	-	10YR7/4 にぶい黄橙色	269 に重なって出土
228	土師器	壺	土坑 122	2.4	2.7	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	つぼつぼ
229	土師器	皿 N	土坑 122	5.8	1.1	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
230	土師器	皿 S	土坑 122	11.0	2.0	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
231	土師器	皿 S	土坑 122	10.5	1.9	-	10YR8/3 浅黄橙色	
232	施釉陶器	椀	土坑 122	7.0	4.6	4.6	(釉) 10YR8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	志野
233	染付	椀	土坑 122	10.0	6.5	4.6	(釉) 10Y7/1 灰白色 (胎) 5YR6/6 橙色	肥前
234	焼締陶器	播鉢	土坑 122	33.1	(5.0)	-	(釉) 7.5YR3/3 暗褐色 (胎) 10YR5/2 灰黄褐色	備前

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
235	焼締陶器	播鉢	土坑 122	-	(9.1)	14.8	2.5YR4/2 灰赤色	備前
236	土師器	皿 S	井戸 25	8.8	1.9	-	2.5Y4/1 黄灰色	
237	土師器	皿 S	井戸 25	8.9	1.8	-	2.5Y4/1 黄灰色	
238	土師器	皿 S	井戸 25	10.2	2.2	-	2.5Y6/4 にぶい黄色	
239	土師器	皿 S	井戸 25	10.8	1.9	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
240	土師器	皿 S	井戸 25	10.2	2.1	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	表面に煤付着
241	染付	椀	井戸 25	6.8	4.9	3.3	(釉) N8/0 灰白色 (胎) N9/0 白色	肥前
242	染付	仏飯椀	井戸 25	6.8	5.6	3.8	(釉) 10Y7/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	肥前
243	施釉陶器	椀	井戸 25	9.9	6.9	5.0	(釉) 2.5Y8/4 淡黄色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	
244	土師器	皿 N	井戸 1	5.2	1.2	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	
245	土師器	皿 S	井戸 1	8.0	1.6	-	10YR8/2 灰白色	口縁部に煤付着
246	土師器	皿 S	井戸 1	9.6	1.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	底面に穿孔
247	染付	蓋	井戸 1	9.7	3.1	3.7	(釉) 10Y8/1 灰白色 (胎) 5Y8/1 灰白色	肥前
248	染付	広東椀	井戸 1	11.6	7.0	6.3	(釉) 呉須 (胎) N9/0 白色	肥前
249	染付	椀	井戸 1	11.4	4.8	6.3	(釉) 10GY8/1 明緑灰色 (胎) N8/0 灰白色	肥前
250	染付	皿	井戸 1	13.0	4.2	7.5	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	肥前
251	染付	鉢	井戸 1	21.0	7.7	11.0	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	肥前
252	青磁	花瓶	井戸 1	10.3	15.1	5.9	(釉) 7.5GY8/1 明緑灰色 (胎) N9/0 白色	肥前
253	施釉陶器	椀	井戸 1	9.3	5.3	3.6	(釉) 5Y8/2 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
254	施釉陶器	燈明皿	井戸 1	11.2	2.6	4.6	(釉) 2.5Y8/1 灰白色 (胎) 10YR8/3 浅黄橙色	
255	施釉陶器	蓋	井戸 1	8.8	2.2	5.3	(釉) 2.5Y7/2 灰黄色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	
256	施釉陶器	蓋	井戸 1	5.8	3.3	-	(釉) 5GY7/1 暗オリーブ灰色 (胎) 2.5Y7/2 灰黄色	
257	施釉陶器	土瓶	井戸 1	6.8	10.9	7.5	(釉) 2.5Y8/1 灰白色 (胎) 10YR8/3 浅黄橙色	
258	瓦質土器	蓋	井戸 1	10.0	6.4	-	10YR4/1 褐灰色	
259	瓦	軒丸瓦	6 層上面	長 -	瓦当径 (8.3)	-	N6/0 灰	
260	瓦	軒平瓦	土坑 111	長 (6.0)	幅 (8.2)	瓦当厚 5.4	2.5Y8/1 灰白色	中央官衙系
261	瓦	軒平瓦	土坑 128	長 (6.0)	幅 (12.9)	瓦当厚 5.1	N3/0 暗灰色	中央官衙系
262	瓦	軒平瓦	土坑 408	長 (8.5)	幅 19.9	瓦当厚 3.4	N4/0 灰色	中央官衙系
263	瓦	軒平瓦	土坑 138	長 (10.0)	幅 (13.5)	瓦当厚 9.3	(外) N5/0 灰色 (断) 2.5Y8/1 灰白色	丹波王子窯
264	瓦	軒平瓦	土坑 422	長 (10.0)	幅 13.5	瓦当厚 9.3	2.5Y8/2 灰白色	讃岐
265	瓦	軒丸瓦	土坑 397	長 -	瓦当径 (11.2)	-	(外) N5/0 灰色 (断) 2.5Y7/2 灰黄色	
266	瓦	軒丸瓦	土坑 115	長 12.0	瓦当径 8.5	-	N3/0 暗灰色	
267	埴塼		土坑 136	6.2	5.1	-	N6/0 灰	
268	埴塼		土坑 421	23.0	(16.3)	-	5Y7/1 灰白色	
269	金属製品	銅皿	井戸 330	11.0	2.9	5.8		227 が重なって出土
270	石製品	砥石	土坑 115	長 (8.1)	幅 4.4	厚 1.5		凝灰岩か
271	石製品	石鍋	土坑 425	-	(2.5)	16.1		滑石

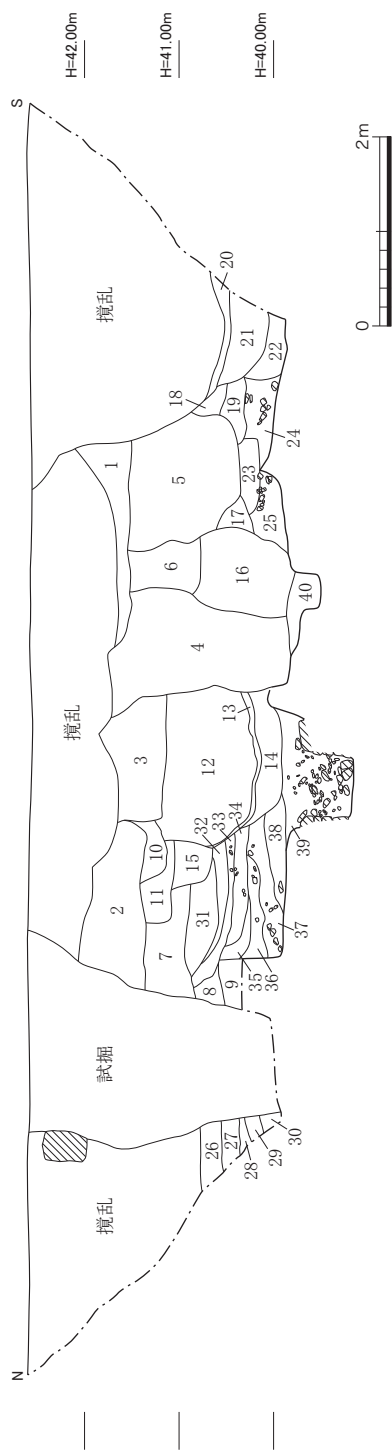
図 版



調査区南壁土層断面図（1：80）

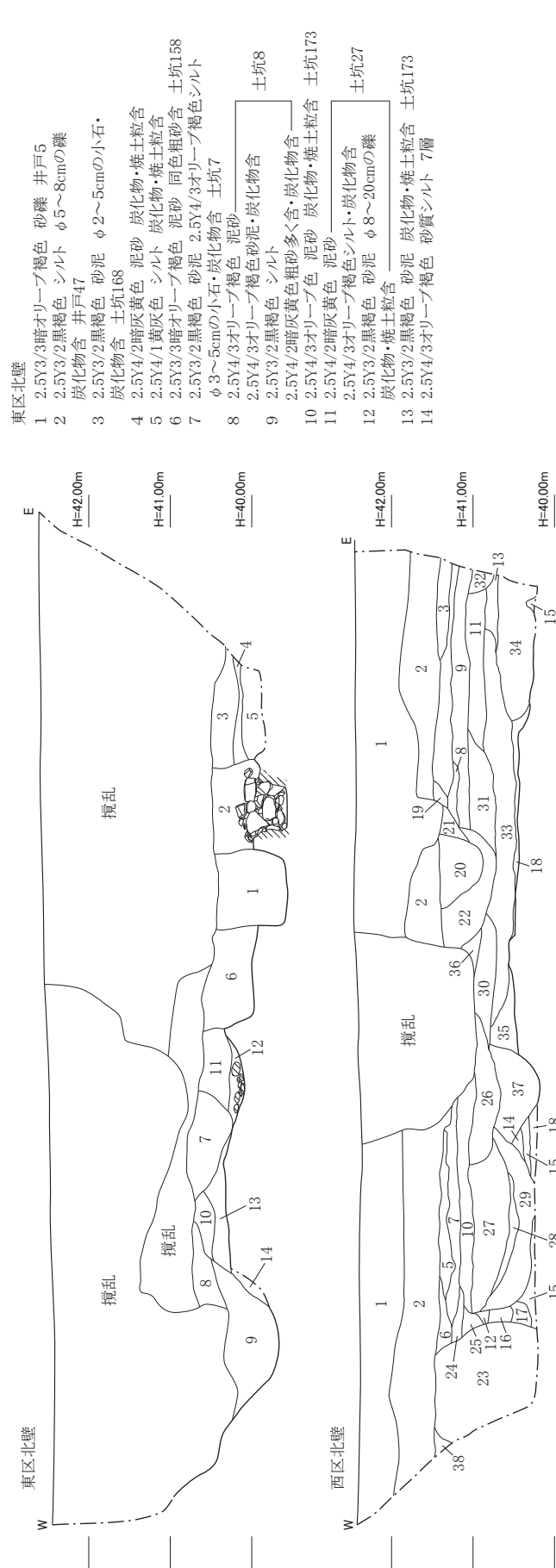
- 42 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥
43 2.5Y3/2黒褐色 シルト 2.5Y3/3暗オリブ褐色
44 2.5Y3/2黒褐色 炭化物・焼土粒含
泥砂層状に堆積、炭化物・焼土粒含
45 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物含
46 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y4/3細砂含 石組120
47 2.5Y4/3粘土 2.5Y4/3細砂含 泥砂
48 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥
49 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ10cm前後の礫・炭化物・焼土粒含
50 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
51 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
52 2.5Y4/3オリブ褐色シルト粒・炭化物含
2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
53 2.5Y4/3オリブ褐色シルトブロック・炭化物含
2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物含・焼土多く含
54 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含 石組104
55 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 井戸398井戸枠内
56 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 φ5～10cmの礫多く含 井戸398掘形
57 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
58 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 φ3～8cmの小石含
59 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
60 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含
61 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物含
62 2.5Y3/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
63 2.5Y5/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
64 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含
65 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
66 2.5Y5/2暗灰黄色 泥砂 炭化物含
67 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物・焼土・瓦片多く含 井戸330
68 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 φ5～8cmの礫・炭化物含
69 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色粗砂粒・炭化物含
70 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色シルト粒・炭化物含
71 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色シルトブロック
炭化物・焼土粒含 土坑422
72 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥2.5Y4/3シルト粒
炭化物・焼土粒含
73 2.5Y3/2黒褐色 砂泥

- 1 10YR3/3暗褐色 砂泥 炭化物・焼土・コンクリートガラ含 1層
2 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥 焼土・炭化物含 2層
3 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 φ3～5cmの小石・炭化物含
4 2.5Y4/4オリブ褐色 砂泥2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
φ3cmの小石含
5 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 2.5Y4/3オリブ褐色シルト粒
炭化物含
6 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 2.5Y4/4オリブ褐色シルト粒
炭化物・焼土粒含
7 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含
8 2.5Y4/3オリブ褐色 粗砂 炭化物含
9 10YR3/2黒褐色 砂泥 φ2～5cmの小石・炭化物含
10 2.5Y4/2暗オリブ褐色 砂泥 炭化物含
11 5Y3/2オリブ黒色 泥砂 炭化物・焼土粒含
12 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物含
13 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
14 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物・焼土粒含
15 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
16 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物・焼土粒含
17 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・焼土粒含
18 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・焼土粒含
19 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
5Y4/3オリブ褐色シルトブロック・炭化物含
20 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物・土器細片含
- 21 2.5Y4/3オリブ褐色 シルト 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
炭化物・焼土粒含
22 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/1黄灰色シルト含
23 2.5Y4/3オリブ褐色 砂質シルト
24 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト 2.5Y5/3黄褐色シルト・炭化物・マンガング粒含
25 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色シルトブロック
φ8～15cmの礫含・炭化物多く含 土坑404
26 2.5Y4/3オリブ褐色 粗砂
27 2.5Y4/3オリブ褐色 泥砂 φ1～3cmの小石・炭化物含 土坑555
28 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥・炭化物含
29 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/4オリブ褐色砂礫含
30 2.5Y4/3オリブ褐色 泥砂 炭化物含
31 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥
32 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂
33 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y5/4黄褐色シルト含・炭化物多く含 土坑121
34 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒多く含
土坑103
35 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
36 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒多く含
37 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物多く含
38 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 φ2～5cmの小石・炭化物含
土坑121
39 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥
40 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ2～5cmの小石・炭化物含
41 2.5Y3/1黒褐色 シルト φ2cmの小石・炭化物含



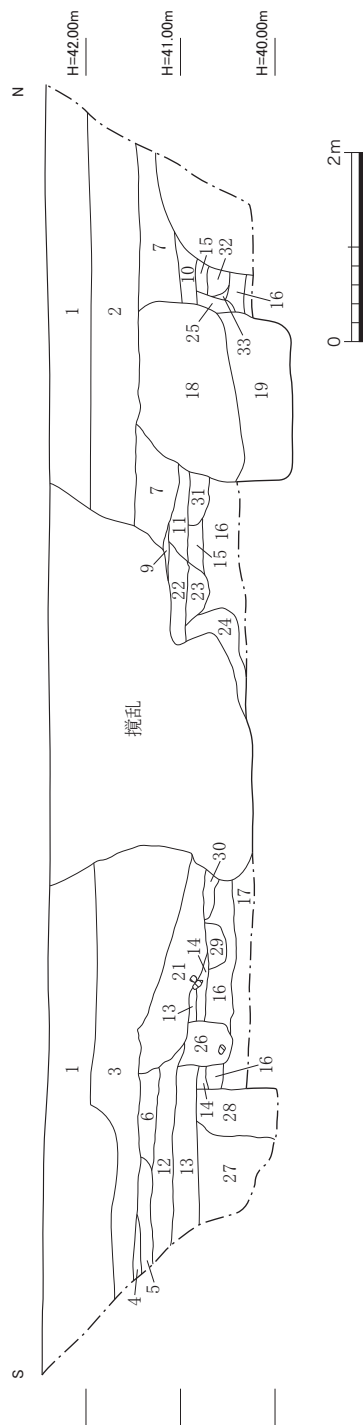
- | | | | | | |
|----|--|-------|----|--|-------|
| 1 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 φ 2~3cmの小石含 | 1層 | 23 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 2.5Y4/4オリープ褐色シルト含 | 土坑27 |
| 2 | 2.5Y3/1黒褐色 砂泥 炭化物多く含 | 2層 | 24 | 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 φ 3~8cmの礫含 | 土坑145 |
| 3 | 10YR3/3暗褐色 砂泥+焼土 | | 25 | 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 φ 3~8cmの礫・炭化物含 | 土坑149 |
| 4 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ 5~28cmの礫・炭化物・焼土含 | 土坑2 | 26 | 2.5Y3/3暗オリープ褐色 砂泥 炭化物含 | |
| 5 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ 8~15cm、20cmの礫・炭化物含 | | 27 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含 | 土坑168 |
| 6 | 10YR2/1黒色 泥砂+灰 | | 28 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ 2~5cmの小石・炭化物含 | |
| 7 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 1cmの小石・炭化物含 | | 29 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含 | |
| 8 | 2.5Y4/3オリープ褐色 砂質シルト 2.5Y5/4黄褐色シルト粒含 | 6層 | 30 | 2.5Y4/1黄灰色 シルト 炭化物・焼土粒含 | |
| 9 | 2.5Y5/4黄褐色 シルト 7層 | | 31 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含 | |
| 10 | 10YR3/1黒色 泥砂 灰多く含 | | 32 | 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物多く含 | 土坑36 |
| 11 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・漆喰含 | | 33 | 2.5Y3/3暗オリープ褐色 砂泥 炭化物含 | |
| 12 | 10YR3/1黒色 泥砂 灰多く含 | | 34 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物含 | |
| 13 | 2.5Y5/4黄褐色 シルト | 土坑32 | 35 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 2.5Y5/4泥砂含 | |
| 14 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ 3~8cmの礫・炭化物含 | 土坑176 | 36 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 2.5Y4/3オリープ褐色細砂 φ 2~5cmの小石含 | 土坑162 |
| 15 | 2.5Y3/3暗オリープ褐色 砂泥 炭化物含 | | 37 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 φ 5~6cmの礫含 | |
| 16 | 10YR2/1黒色 泥砂 灰多く含 | 土坑26 | 38 | 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 φ 3~8cmの礫含 | |
| 17 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ 10~20cmの礫含 | | 39 | 2.5Y4/3オリープ褐色 泥砂 φ 3~8cmの礫多く含 | 井戸180 |
| 18 | 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含 | | | | |
| 19 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 | | | | |
| 20 | 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 | | | | |
| 21 | 2.5Y3/2黒褐色 シルト 2.5Y3/3暗オリープ褐色 泥砂層状に堆積・炭化物・焼土粒含 | 土坑101 | | | |
| 22 | 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 | | | | |
| | 2.5Y4/3砂泥・炭化物・焼土粒含む | | | | |

調査区東壁土層断面図 (1 : 80)



調査区北壁土層断面図（1：80）

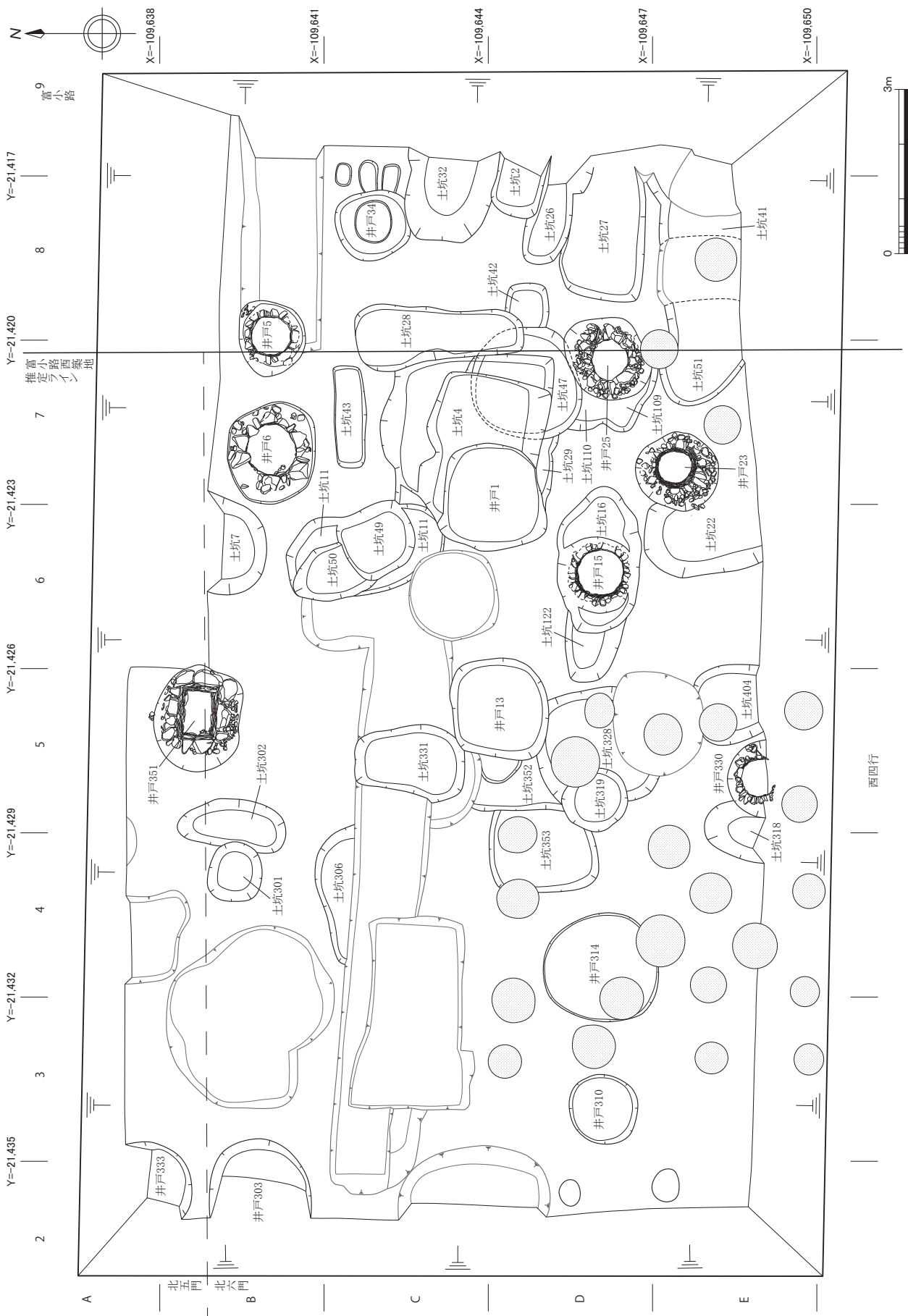
- 東区北壁
- 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂礫 井戸5
 - 2.5Y3/2黒褐色 シルト φ5～8cmの礫 炭化物含 井戸47
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ2～5cmの小石・炭化物含 土坑168
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含
 - 2.5Y4/1黄灰色 シルト 炭化物・焼土粒含
 - 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 泥砂 同色粗砂含 土坑158
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト φ3～5cmの小石・炭化物含 土坑7
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂
 - 2.5Y3/2黒褐色 シルト
 - 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂多く含・炭化物含 土坑8
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂
 - 2.5Y3/2暗灰黄色 泥砂
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト・炭化物含 土坑27
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ8～20cmの礫 炭化物・焼土粒含 土坑173
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質シルト 7層
- 西区北壁
- 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 φ2～3cmの小石含 1層
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂泥 焼土・炭化物含 2層
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y4/1黄灰色 砂泥
 - 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・土器細片含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭化物・焼土粒含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 2.5Y4/2暗灰黄色 炭化物・焼土粒含
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト少量含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト・炭化物含
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 砂質土 シルト含 8層
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
- 東区北壁
- 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含
 - 2.5Y5/2暗灰黄色 砂礫 φ2～5cm、8～15cmの礫含 井戸333
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・焼土粒含 土坑378
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥
 - 2.5Y5/3黄褐色 粗砂
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y4/3オリーブ褐色 泥砂 土坑381
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト粒 炭化物含
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物含
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含 土坑427
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト粒 炭化物・焼土粒含
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含 土坑547
 - 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
 - 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト粒 炭化物含 土坑542
 - 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含 3層



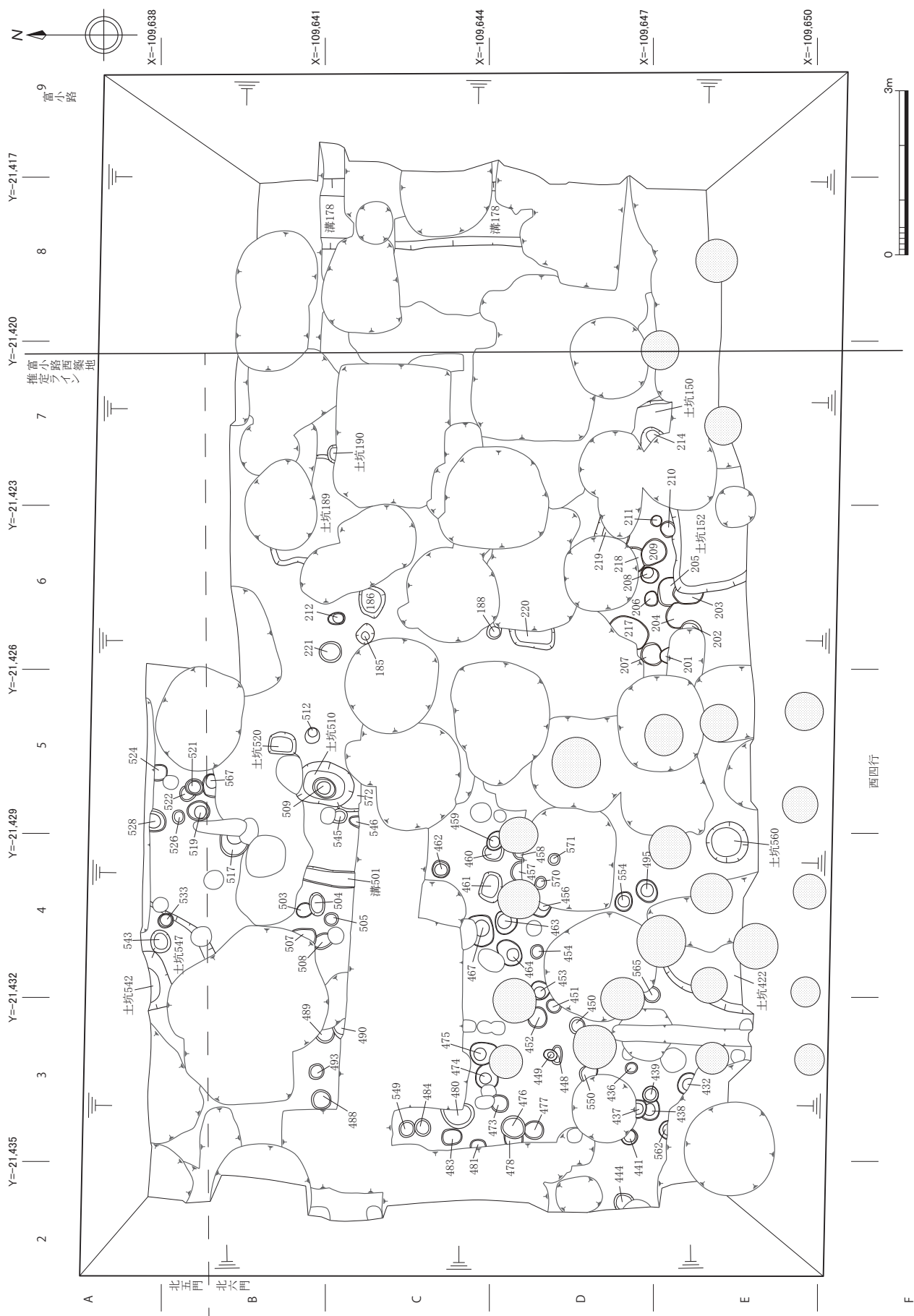
- 1 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 φ2~3cmの小石含 1層
2 2.5Y4/3オリブ褐色 砂泥 焼土・炭化物含 2層
3 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 φ3~8cmの礫・炭化物含
4 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 2.5Y4/4オリブ褐色シルト粒
炭化物・焼土粒含
5 2.5Y4/3オリブ褐色 粗砂 炭化物含
6 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物含
7 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 φ8~10cmの礫・炭化物含
8 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
9 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物 4層
10 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
11 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・土器細片含 5層
12 2.5Y3/3暗オリブ褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含 4層
13 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 5層
14 2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト 炭化物・土器細片含 6層
15 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
16 2.5Y3/3暗オリブ褐色 粗砂 同色シルト含 7層
17 2.5Y4/3オリブ褐色 砂質シルト 8層

- 18 2.5Y5/2暗灰黄色 砂礫 φ2~5cm、8~15cmの礫多く含 井戸303
19 2.5Y3/2黒褐色 砂礫 同色粗砂・炭化物含
2.5Y4/3オリブ褐色シルト粒少量含
20 2.5Y5/2暗灰黄色 砂礫 2~5cm、8~15cmの礫多く含 井戸333
21 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
22 2.5Y4/2暗灰黄色 泥砂 炭化物・焼土粒含
23 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
24 2.5Y3/2黒褐色 泥砂 炭化物・焼土粒・2.5Y4/3オリブ褐色シルト含 土坑485
25 2.5Y3/3暗オリブ褐色 粗砂
26 10YR3/2黒褐色 砂泥 炭化物含
27 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 φ5~10cmの礫多く含 井戸398掘形
28 2.5Y3/3オリブ褐色 砂泥 φ3~8cmの礫・炭化物含 土坑425
29 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色シルト
炭化物・焼土粒含
30 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥 炭化物・焼土粒含
31 2.5Y3/2黒褐色 砂泥 炭化物・焼土粒含
32 2.5Y3/2黒褐色 砂泥
33 2.5Y3/2黒褐色砂泥 2.5Y4/3オリブ褐色シルト粒含

調査区西壁土層断面図 (1 : 80)



第1面-1平面图 (4層上面 1:100)



第3面平面圖 (7層上面 1 : 100)



1. 東区第1面-1全景（4層上面 南から）



2. 東区第1面-2全景（5層上面 南東から）



1. 西区第1面全景（南から）



2. 井戸1（東から）



3. 井戸6（南から）



1. 井戸15（北から）



2. 井戸23（南から）



3. 井戸25（南東から）



1. 井戸5・46（南から）



2. 井戸34上位遺物出土状況（西から）



3. 井戸34（東から）



1. 井戸351（南から）



2. 井戸351石組細部の状況（南東から）



3. 井戸330（南東から）



1. 井戸105（北から）



2. 井戸129（南から）



3. 井戸125（西から）



1. 石組104（北から）



2. 石組141（北から）



3. 石組320（南から）



1. 石組135（南から）



2. 石組135南北断面（西から）



3. 石組135完掘状況（南から）



1. 土坑32 (西から)



2. 土坑47 (東から)



3. 土坑101・102・103・121 (南から)



1. 東区東部集石検出状況（南から）



2. 東区東部 南北セクション断面（西から）



3. 土坑162・溝178断面（北から）



1. 集石324（北から）



2. 集石325（北から）



3. 集石382（南から）



1. 東区第2面全景（南から）



2. 西区第2面全景（南から）



1. 溝430 遺物出土状況（南から）



2. 井戸551（東から）



1. 井戸398 (北から)



2. 井戸180 (西から)



1. 石組364（南から）



2. 集石124（南から）



1. 土坑360（西から）



2. 土坑370・379・380（西から）



3. 土坑378（北から）



1. 土坑154遺物出土状況（西から）



2. 土坑127・128・158・175・184・189・190（北から）



3. 土坑375・386・390・383・391（北から）



1. 土坑167（西から）



2. 土坑355・361・362・399・407（南東から）



3. 土坑420（北から）



1. 東区第3面全景（南から）



2. 西区第3面全景（南から）



1. 東区南西部7層上面遺構掘削後（南から）



2. 溝178完掘状況（北から）



3. 溝178セクション断面（北から）



1. 土坑520遺物出土状況（東から）



2. 土坑520断面（東から）



3. 土坑520完掘状況（東から）



1. 柱穴554土師器皿出土状況（南から）



2. 土坑542・547（南から）



3. 西区 壁面周囲下層確認状況（南から）



1. 出土遺物 1 (平安時代前～中期)



2. 出土遺物 2 (平安時代後期)



1. 出土遺物 3 (土坑520出土土師器)



2. 出土遺物 4 (鎌倉時代前半)



1. 出土遺物 5（鎌倉時代土師器）



2. 出土遺物 6（輸入磁器）



3. 出土遺物 7（須恵器・焼締陶器）



1. 出土遺物 8 (室町時代前半)



2. 出土遺物 9 (室町時代後半)



1. 出土遺物10（土師器）



2. 出土遺物11（染付）



3. 出土遺物12（焼締陶器）



4. 出土遺物13（施釉陶器）



1. 出土遺物14 (唐津)



2. 出土遺物15 (瀬戸美濃・京焼)



1. 出土遺物16 (瓦質土器)



2. 出土遺物17 (井戸25)



1. 出土遺物18（江戸時代後半）



2. 出土遺物19（井戸1）



1. 出土遺物20 (軒瓦)



2. 出土遺物21 (罏塢)



3. 出土遺物22 (石製品)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうしほうじゅっちょうあと・からすまおいけいせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大西晃靖 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2020年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまおいけい 烏丸御池遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 とみのこうじとおりおいけ 富小路通御池あがる 上ル もりやまちょう 守山町165-1	26100	1 464	35度00 分 41秒	135度 45分 55秒	2019年 9月2日 ～ 2019年 12月17日	299.2㎡	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 烏丸御池遺跡	都城 集落跡	平安時代	柱穴 溝 土坑	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、白磁、軒瓦、 丸瓦・平瓦		・平安時代後期の柱穴 群を検出し、当該期の 複数の建物が想定され た。同時期の土師器皿 が多量に埋納された土 坑を検出し、良好な一 括資料を得られた。富 小路西側溝を検出した。 ・鎌倉時代の遺構の分 布状況から、鎌倉時代 前半には当宅地は富小 路側へ拡張していた可 能性を指摘することが できた。 ・安土桃山時代以降に 遺構・遺物が激増し、 町屋として発展する状 況を確認することがで きた。江戸時代初頭の 遺物に茶陶や明染付が みられ、居住者の生活 水準の高さが想定でき た。		
		鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴 溝 井戸 石組 土坑	土師器、須恵器、瓦 器、輸入陶磁器、焼締 陶器、瓦質土器、 丸瓦・平瓦、石製品				
		安土桃山時代 ～ 江戸時代	井戸 石組 集石 土坑	土師器、施釉陶器、 染付、焼締陶器、瓦質 土器、土製品、棧瓦、 金属製品				

平安京左京三条四坊十町跡・ 烏丸御池遺跡発掘調査報告書

発行日 2020年3月31日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961